

平成 30（2018）年度 学習院大学 卒業生調査

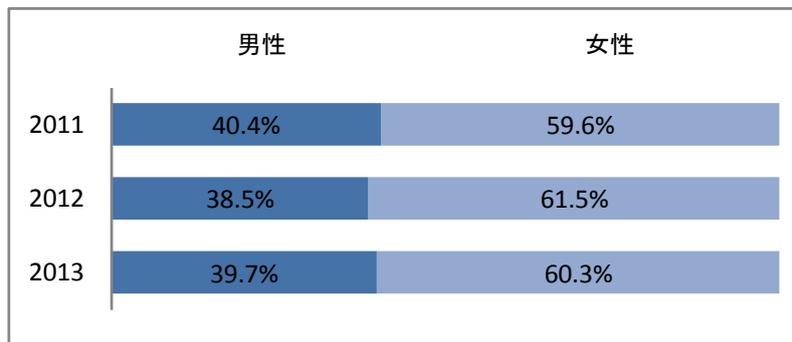
第 1 章 基本集計結果

調査概要

調査目的	本学卒業生の大学在学中の学習や諸経験が卒業後のキャリアや生活とどのような関係にあるのかを検証すること。
調査対象	平成 30 年度実施：平成 24 年度卒の学部卒業生（2013 年 3 月卒業、「2013」群と表記） ※本報告書では、あわせて平成 29 年度・平成 28 年度実施の回答を集計・分析する。 平成 29 年度実施：平成 23 年度卒の学部卒業生（2012 年 3 月卒業、「2012」群と表記） 平成 28 年度実施：平成 22 年度卒の学部卒業生（2011 年 3 月卒業、「2011」群と表記）
調査時期	平成 30（2018）年 11 月 7 日～平成 31（2019）年 2 月 19 日
調査方法	郵送にて依頼状を送付し、郵送にて返送あるいは Web 上のアンケートフォームにて回答
調査項目	Q01…フェイスシート 性別、年齢、学科、入試方式、配偶者、子ども、現住所 Q02…高校時代の学習習慣 Q03…高校までの海外経験 Q04…高校の成績（相対的かつ主観的な成績。上位・下位など） Q05…卒業した学科への入学決定の経緯 Q06…大学時代の授業科目その他への取り組み意欲 Q07…大学時代に楽しみだった科目 Q08…大学時代の学習時間（1 週間あたり） Q09…大学時代の学習習慣 Q10…大学時代の成績（相対的かつ主観的な成績。上位・下位など） Q11…大学時代の課外活動への取り組み意欲 Q12…大学時代の留学経験 Q13…卒業論文・卒業研究の経験有無 Q14…卒業論文・卒業研究執筆時に意識したこと Q15…卒業論文・卒業研究の意義 Q16…大学時代に身につけた知識や能力 Q17…大学時代の環境や学生生活の満足度 Q18…卒業した直後の状況 Q19…卒業した直後の仕事の内容 Q20…卒業直後から現在までの就業状況 Q21…現在の仕事の内容 Q22…海外での勤務・生活経験 Q23…キャリアのための学習活動 Q24…仕事に役立っている大学時代の学びや経験 Q25…大学でもっと熱心に取り組めばよかったこと Q26…現在の仕事への満足度 Q27…現在身につけている知識や能力 (Q16 と同様の項目で多少の文言が調整されている)

Q01 回答者属性

回答者の性別と年齢



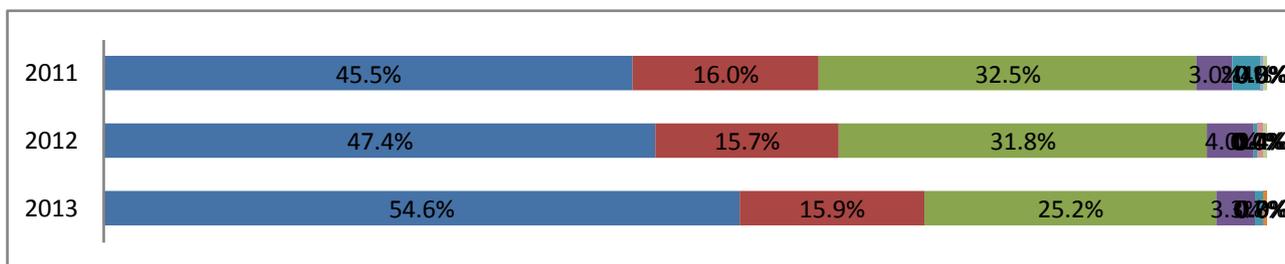
	男性	女性	平均年齢	最低年齢	最高年齢
2011	134	198	27.4	26	55
2012	106	169	27.5	26	35
2013	120	182	27.5	26	32

学科別回答人数



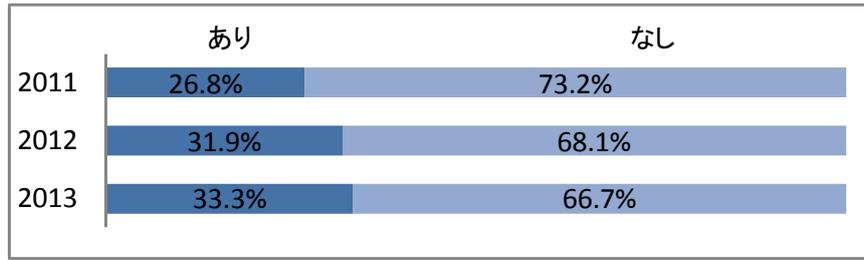
	1. 法学科	2. 政治学科	3. 経済学科	4. 経営学科	5. 哲学科	6. 史学科	7. 日本語日本文学科	8. 英語英米文化学科	9. ドイツ語圏文化学科	10. フランス語圏文化学科	11. 心理学科	12. 物理学科	13. 化学科	14. 数学科	15. 生命科学科
2011	48	33	40	53	18	23	30	24	10	11	20	8	8	5	
2012	39	30	33	29	15	13	21	24	12	19	18	4	6	10	
2013	39	41	35	40	14	14	26	22	3	17	15	12	11	8	5

入学にあたっての入試方式

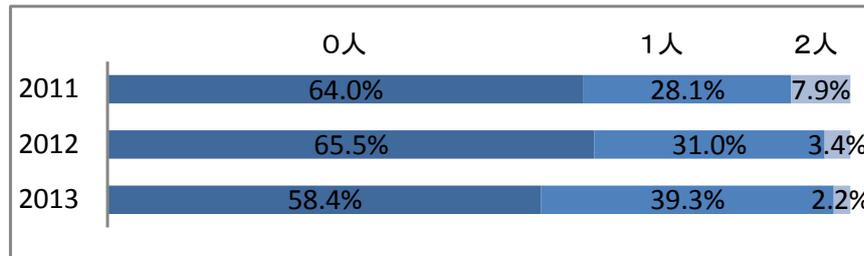


	1. 一般入試	2. 男女高等学校からの進学	3. 指定校推薦入試	4. 公募制推薦入試	5. 海外帰国生入試	6. 外国人学生特別入試	7. 社会人入試	8. 編入学試験	9. 転部・転科
2011	151	53	108	10	8	0	1	0	1
2012	130	43	87	11	1	0	0	1	1
2013	165	48	76	10	2	1	0	0	0

配偶者の有無



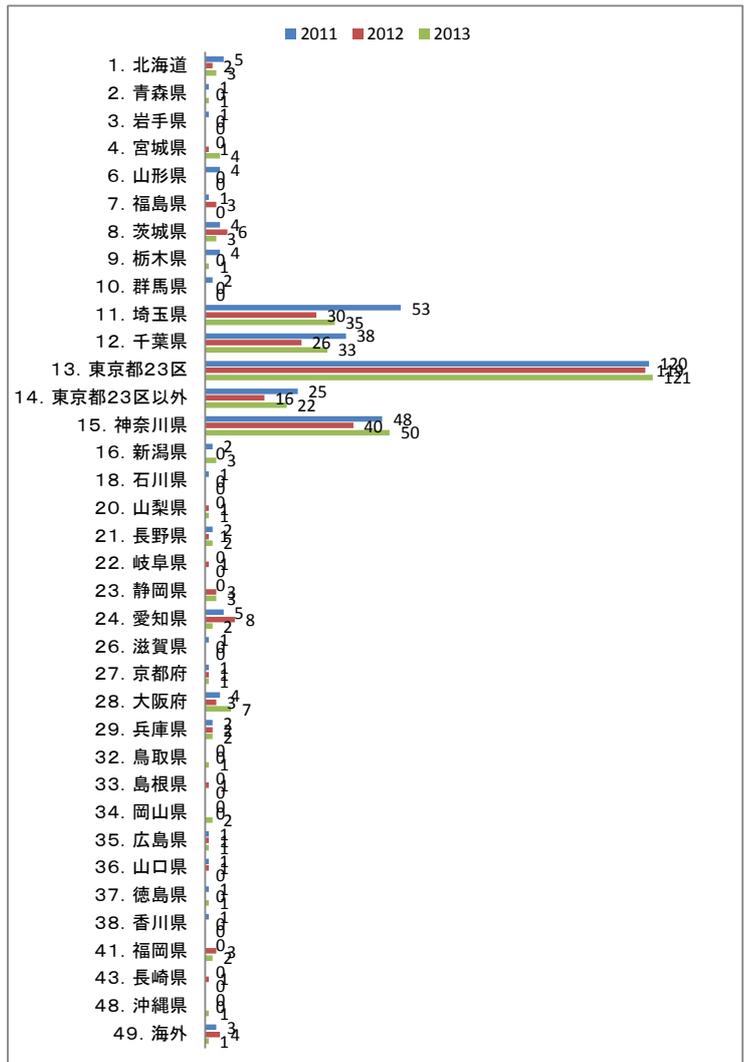
子供の人数



※ 配偶者ありの人数を 100%として計算。

現在のお住まい

	2011	2012	2013
1. 北海道	5	2	3
2. 青森県	1	0	1
3. 岩手県	1	0	0
4. 宮城県	0	1	4
6. 山形県	4	0	0
7. 福島県	1	3	0
8. 茨城県	4	6	3
9. 栃木県	4	0	1
10. 群馬県	2	0	0
11. 埼玉県	53	30	35
12. 千葉県	38	26	33
13. 東京都23区	120	119	121
14. 東京都23区以外	25	16	22
15. 神奈川県	48	40	50
16. 新潟県	2	0	3
18. 石川県	1	0	0
20. 山梨県	0	1	1
21. 長野県	2	1	2
22. 岐阜県	0	1	0
23. 静岡県	0	3	3
24. 愛知県	5	8	2
26. 滋賀県	1	0	0
27. 京都府	1	1	1
28. 大阪府	4	3	7
29. 兵庫県	2	2	2
32. 鳥取県	0	0	1
33. 島根県	0	1	0
34. 岡山県	0	0	2
35. 広島県	1	1	1
36. 山口県	1	1	0
37. 徳島県	1	0	1
38. 香川県	1	0	0
41. 福岡県	0	3	2
43. 長崎県	0	1	0
48. 沖縄県	0	0	1
49. 海外	3	4	1

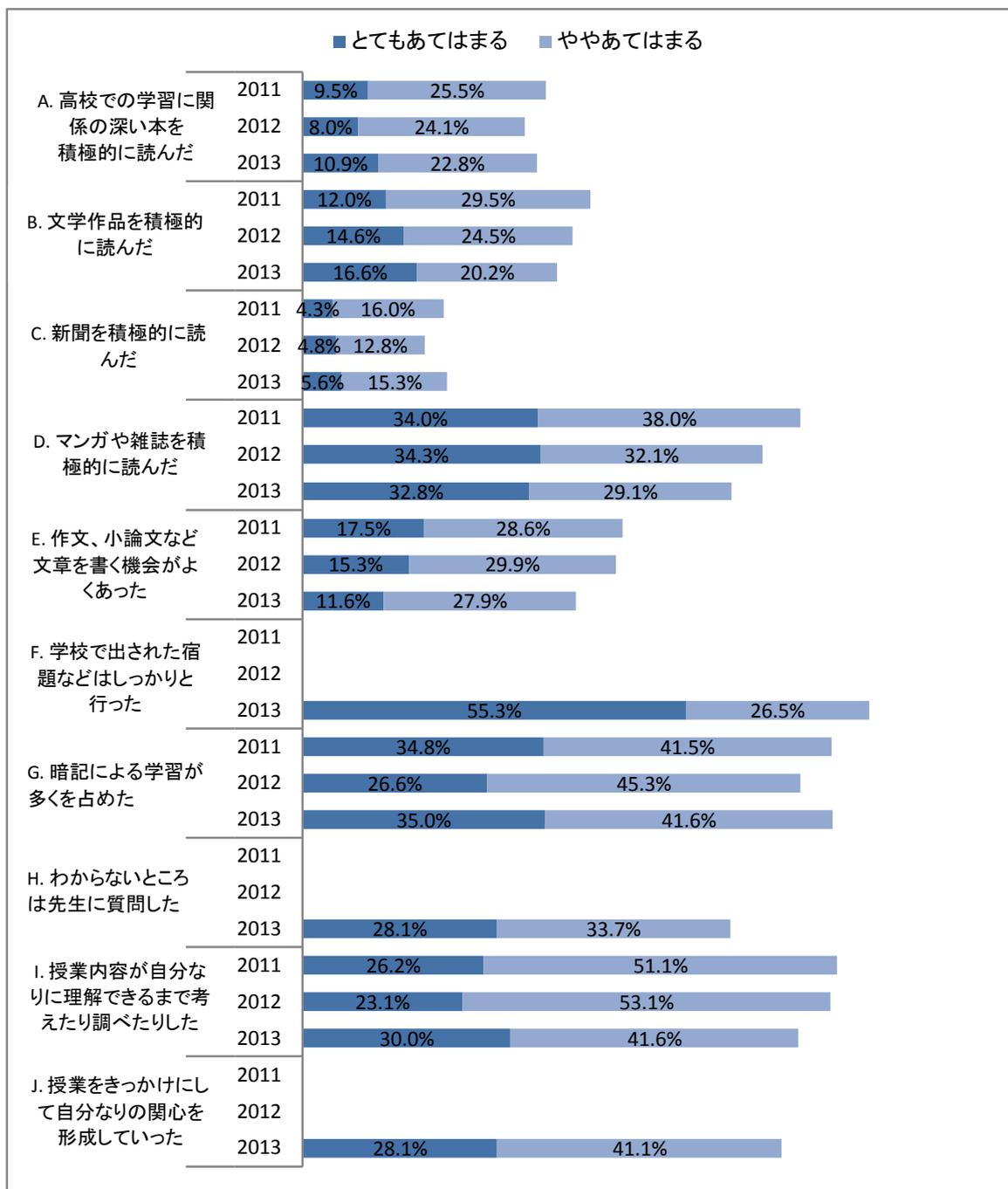


※ 2011年卒・2012年卒・2013年卒の全てで人数が0人の都道府県は記載していない。

大学入学時点までのことがら

Q02 高校時代のあなたの習慣について、あてはまるものを1つ選んでください。

(「とてもあてはまる」(4)～「全くあてはまらない」(1)の4件法)



●高校時代から習慣化されていたもの（「あてはまる」、「ややあてはまる」の合算が高い項目）

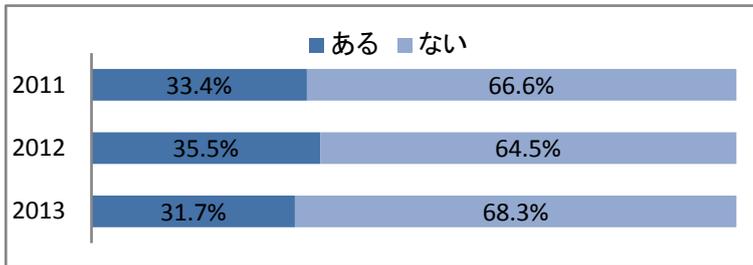
GやIは、どの学年でも7割以上の学生が行っていた。2013群で新規項目としたFやH、Jは少なくとも6割が高校時代に行っており、主体的な学習方法が高校時代から習慣化されていたといえる。マンガや雑誌もよく読まれているが、年々減少傾向にあることが見受けられる。

●高校時代には習慣化されていなかったもの

A～Cは習慣になっていない割合が多く、特にCは習慣になっていなかったようである。Eの文章を書く機会が年々減少傾向にあり、今後も継続的な確認が必要である。

Q03 あなたは、中学・高校時代に、海外で過ごした経験（留学や短期研修旅行、修学旅行なども含む）がありますか。

（経験の有無と経験ありの場合日数）

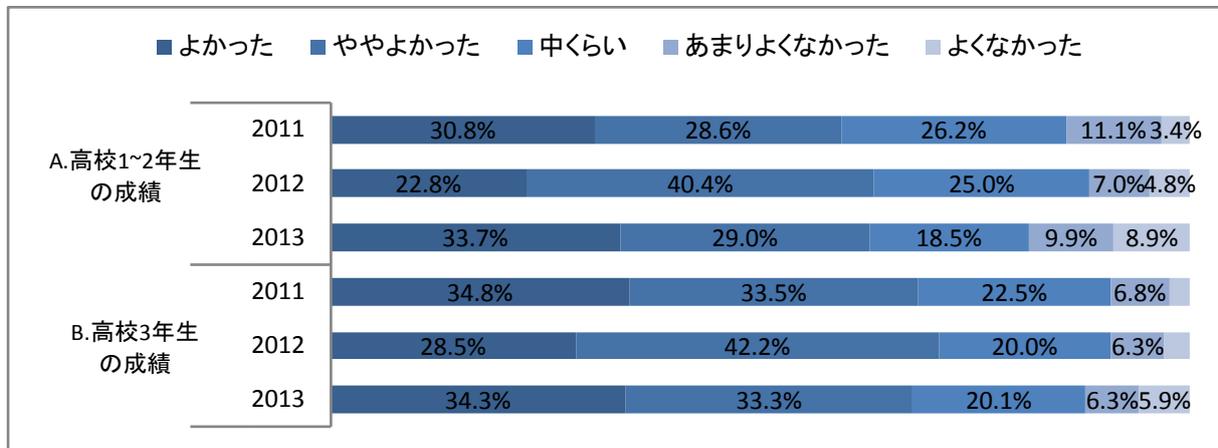


	2011	2012	2013
1週間未満	4	16	12
1週間以上2週間未満	30	20	22
2週間以上1ヶ月未満	44	35	39
1ヶ月以上2ヶ月未満	14	14	9
2ヶ月以上1年未満	4	6	8
1年以上	13	4	2
合計	109	95	92
平均日数	207.2	51.8	50.5

どの学年でも中学・高校時代に海外経験がある卒業生は3割を超える程度であり、変化の傾向は見て取れない。2013年卒で2週間以上のある程度の期間にわたった経験者は58名（海外経験者の63.0%）である。経験日数としては、どの年度でも2週間以上1ヶ月未満が比較的多い割合を占めている。

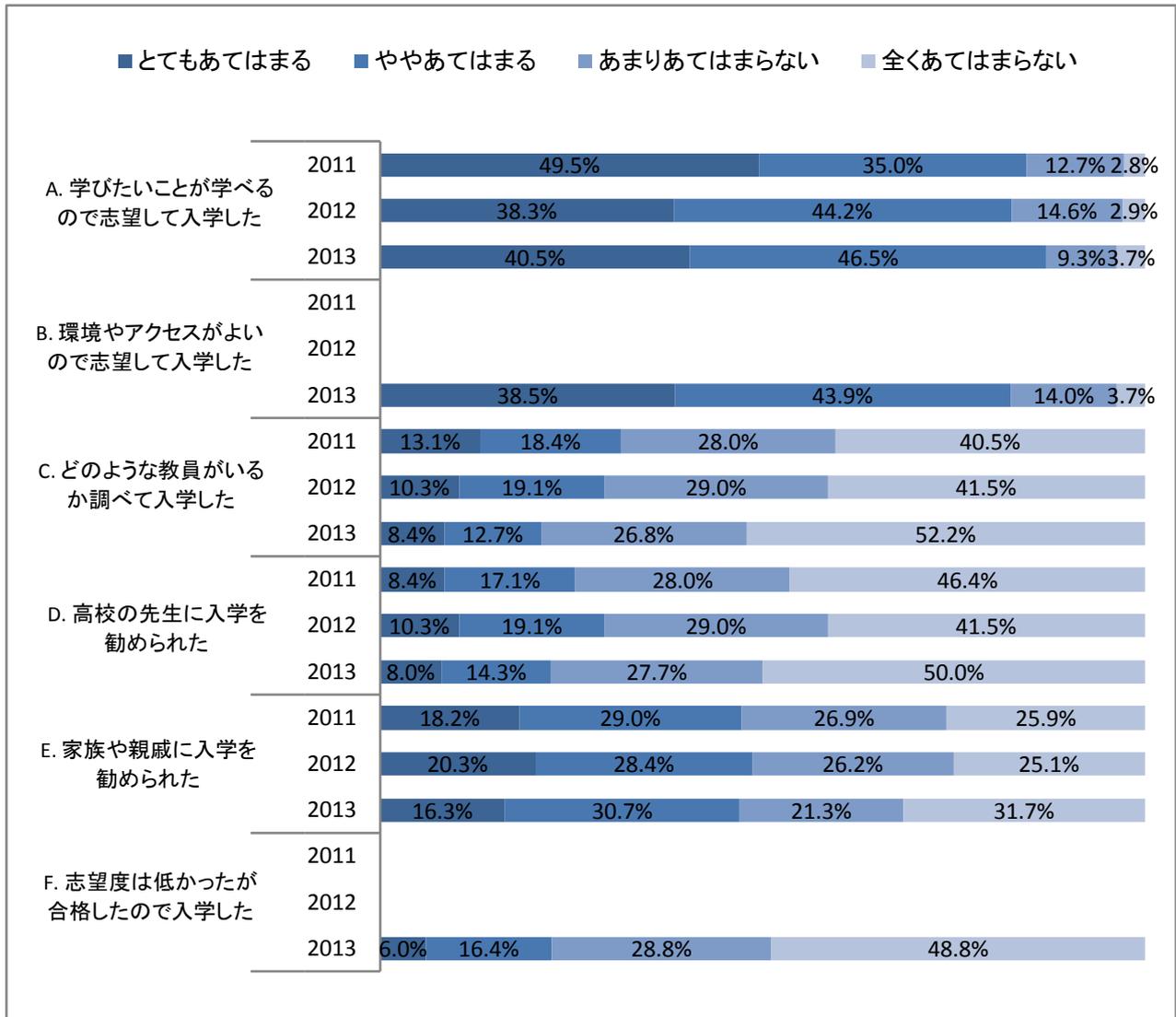
Q04 あなたの高校時代の成績はどのくらいだったと思いますか。

（「よかった」（5）～「中くらい」（3）～「よくなかった」（1）の5件法）



多くの卒業生が、高校時代の成績は「ややよかった」「よかった」と答えている。2013年卒は2012年卒に比べて、「よかった」と答える割合は増え、「ややよかった」と答える割合が減り、総じて見ると「ややよかった」以上の割合は減る結果となった。

Q05 あなたが卒業した学科への入学について、あてはまるものを1つ選んでください。
 (「とてもあてはまる」(4)～「全くあてはまらない」(1)の4件法)



※ Aは2011年卒・2012年卒では「強く希望して入学した」と尋ねた。B・Fは2013年卒からの新規項目。

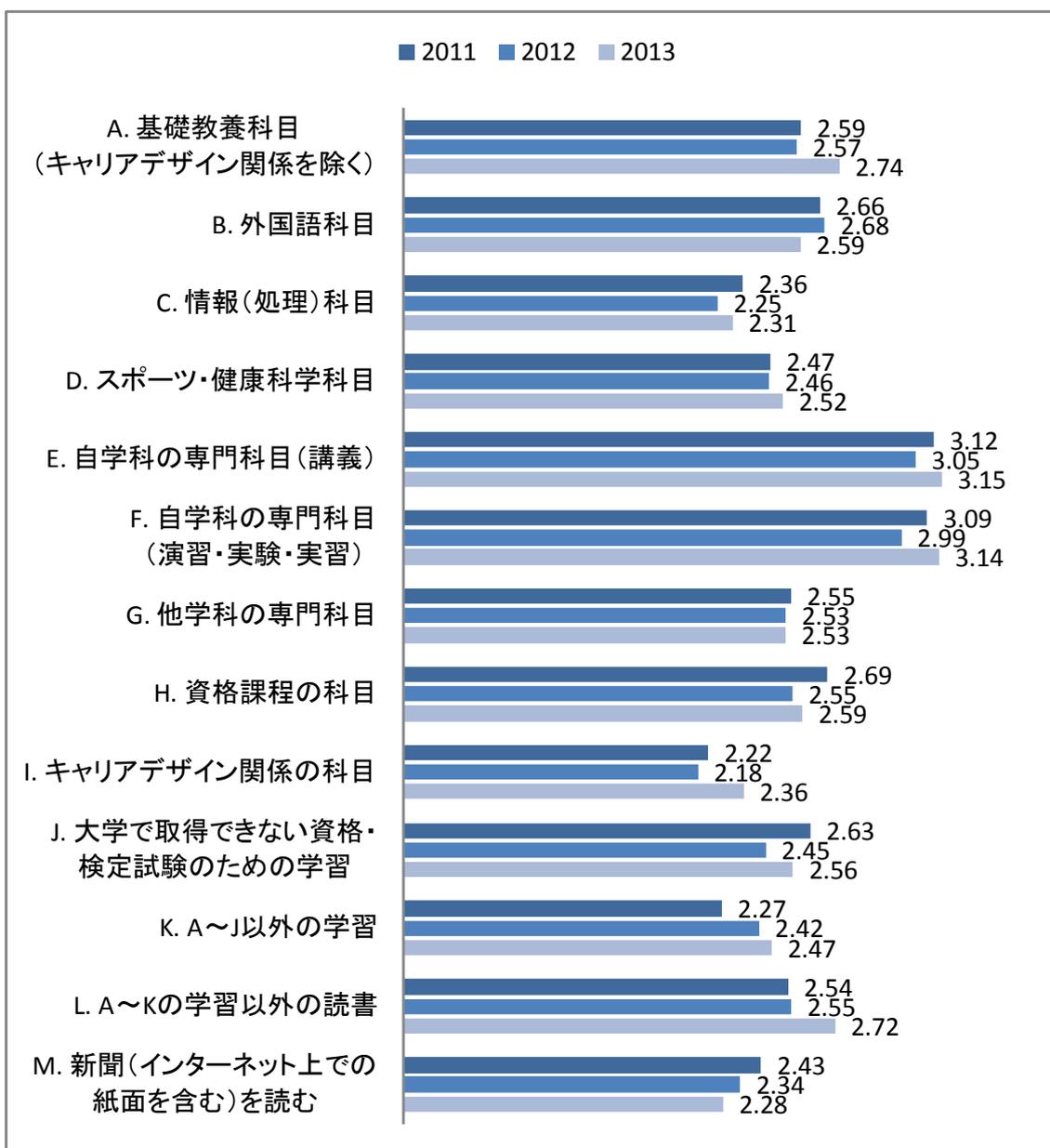
2013年卒に対しては、過年度に「A.強く希望して入学した」としていた項目を、上記のようにA.B.と志望した理由を詳細に尋ねた。結果として、学べる学問分野も、環境面も評価が高いことがうかがえる。

どのような教員がいるかまで調べた卒業生は少なく、また年々減少傾向にある。

また、2013年卒に対しては、不本意入学だったかどうかを尋ねる項目を新規に設けたところ、とても当てはまる・ややあてはまるの合計で2割強であった。

大学時代における学習や課外活動

Q06 あなたは、大学在学中、大学の授業やその他の学習などにどのくらい意欲的に取り組みましたか。授業時間外の予習や復習なども考慮して、あてはまるものを1つ選んでください。
 (「経験しなかった」を0として、「とても意欲的だった」(4)～「全く意欲的でなかった」(1)の5件法)

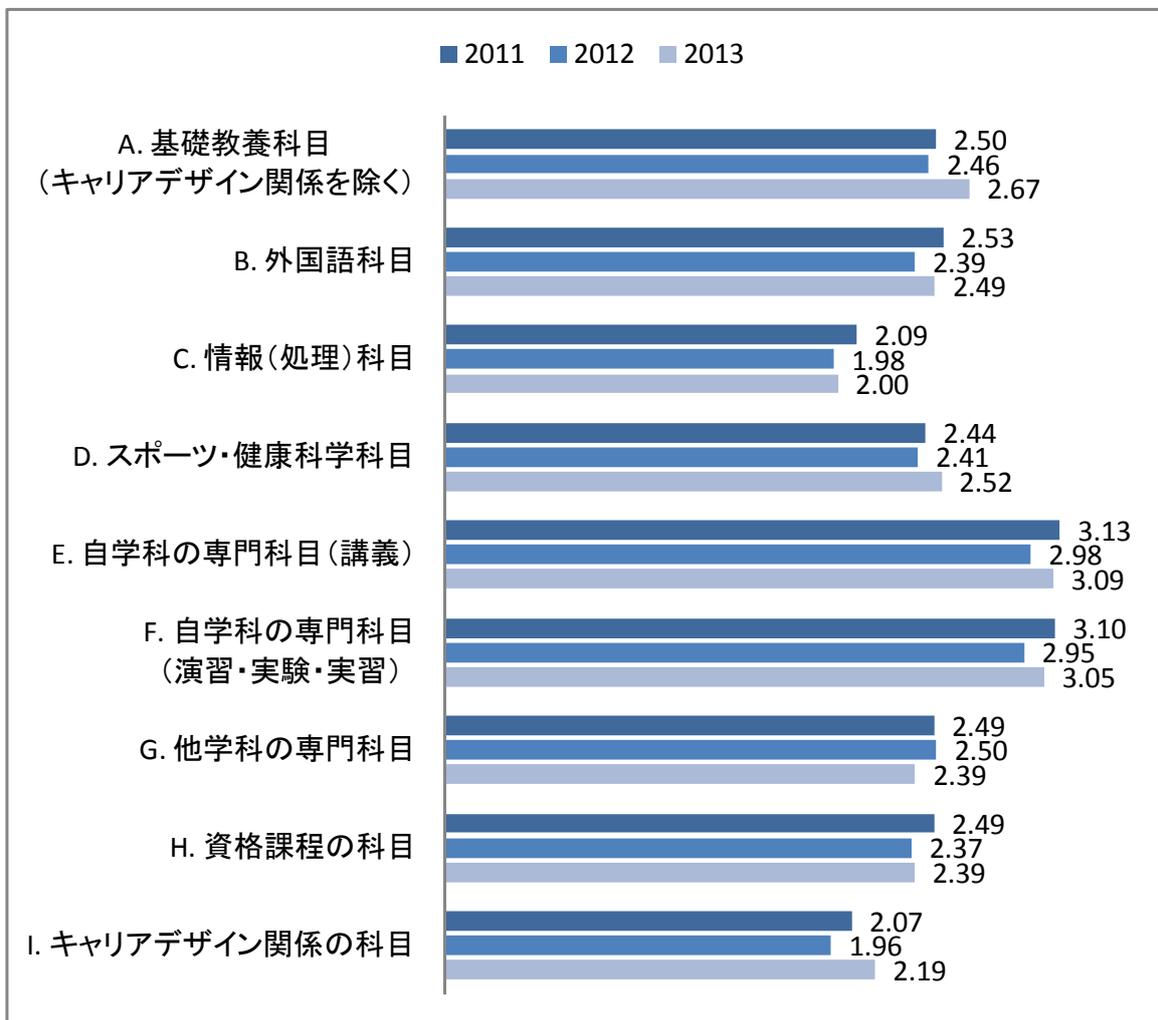


※ 平均値の計算には、0と回答した卒業生を含まない。

どの学年でも、自学科の専門科目については授業の形態にかかわらず高い意欲で取り組んでいたことがうかがえる。この3学年では学年間の違いはあまり見られないものの、KやLといった大学外での学習への意欲が若干高まりつつあるように見受けられる。大学での学習に意欲的に取り組みながら、大学外での自らの興味に根差した学習を行う学生が増え、学習行動のバリエーションがより広がっていく前兆と捉えることもできるかもしれない。

Q07 あなたは、大学の授業の中で、授業を受けることが楽しみだった科目はどの程度ありましたか。

（「経験しなかった」を0として、「5割以上あった」（4）～「ほとんどなかった」（1）の5件法）

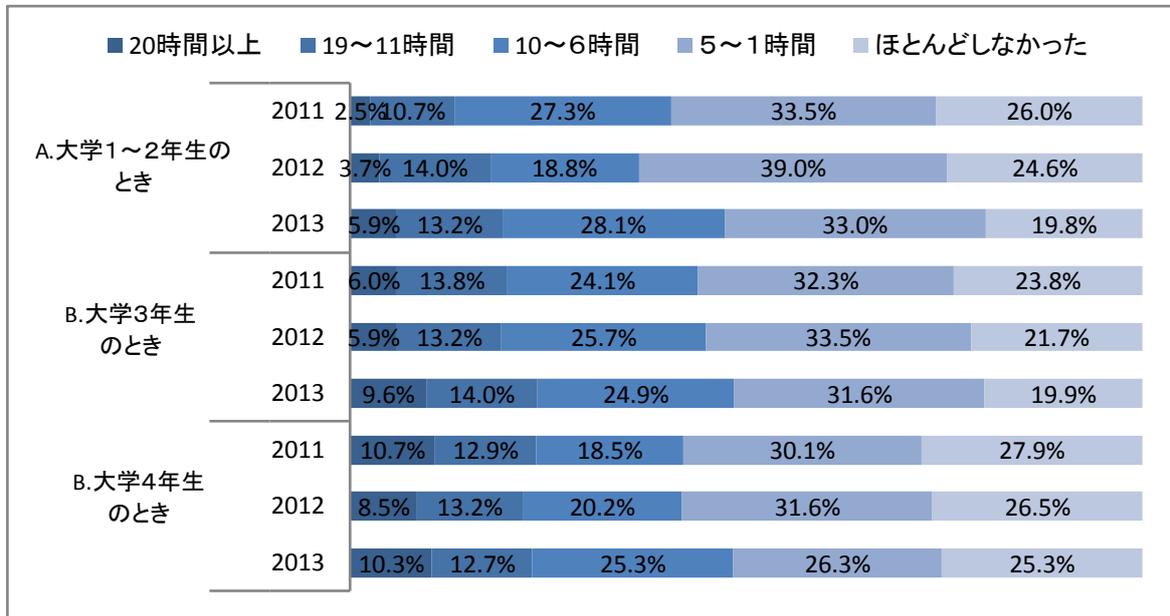


※ 平均値の計算には、0と回答した卒業生を含まない。

自学科の専門科目については、意欲の項目と同様に平均が高く、多くの卒業生が楽しみにしていたことがうかがえる。比較すると、情報（処理）科目やキャリアデザイン関係の科目などは平均が低かった。全体として、前2年度と同様の傾向であり、経年的な変化は見受けられなかった。

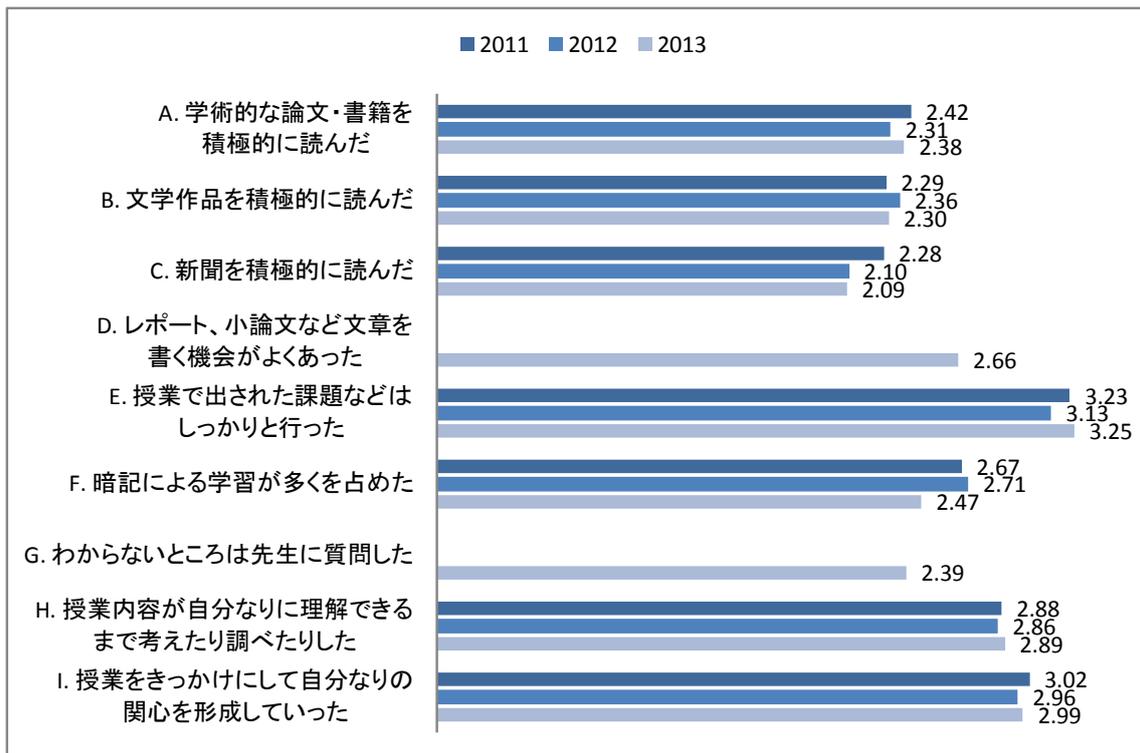
Q08 あなたは、大学在学中、1週間あたり平均でどのくらい「自学自習」(授業の予習・復習、レポート作成、授業とは関係のない学習などを含む日常的な学習時間で、定期試験のための学習時間は除きます)をしていましたか。

(「20時間以上」(5)～「ほとんどしなかった」(1)の5件法)



2013年卒の卒業生は、過去2年度間と比較して、A～B全ての時期で学習時間が週5時間以下の割合が減少した。しかし、大きな変化ではないことから、どの学年においても大学1～2年生までに身についた習慣がその後も維持された結果とみるのが自然であると思われる。

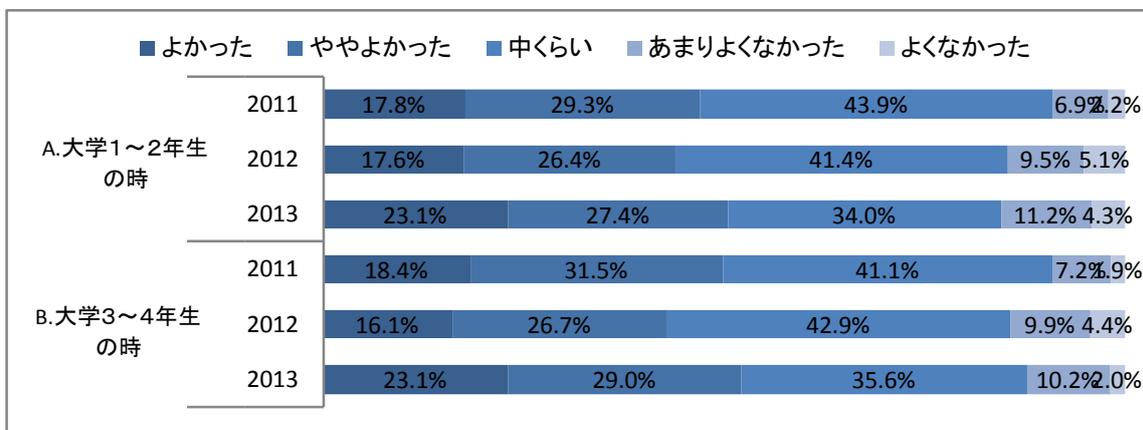
Q09 あなたは、大学在学中、どのような学び方をしてきましたか。
 (「とてもあてはまる」(4)～「全くあてはまらない」(1)の4件法)



※ D、Gは2013年卒からの新規項目。

3学年ともに尋ねた項目では、平均値の傾向はあまり変化がなかったが、Fが若干低下しているように見受けられた。新規項目については、Dは比較的行われやすく、Gは比較的行われにくい学習方法であることがうかがえる。高校時代のこの項目と高低が逆になっていることは、注意すべきと思われる。

Q10 あなたの大学在学時の成績はどのくらいだったと思いますか。
 (「よかった」(5)～「中くらい」(3)～「よくなかった」(1)の5件法)

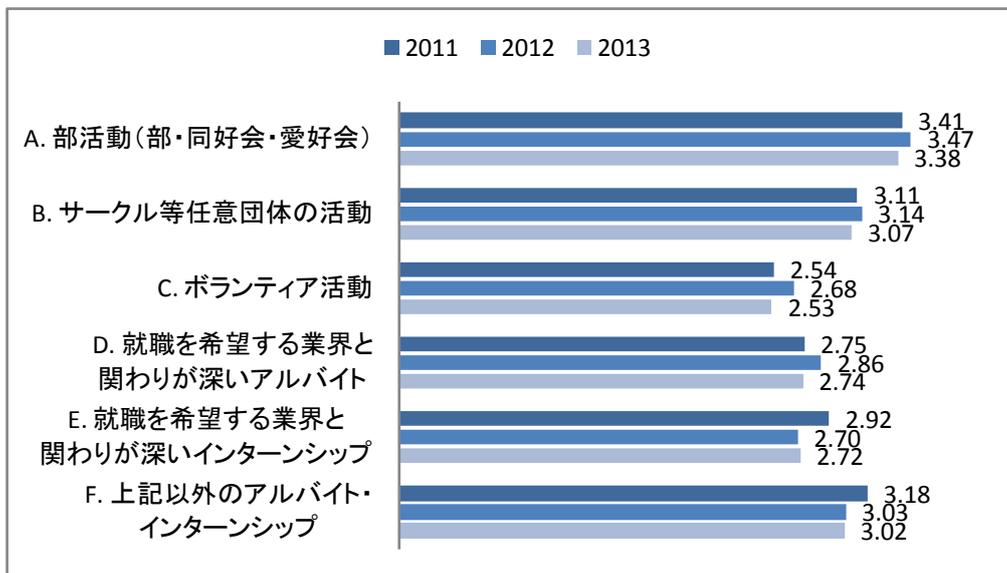


どの学年においても、中くらいと答えた卒業生が最も多く、よかった・ややよかったを合わせて4～5割程度が良い成績を取っていたと自覚する傾向に変わりがないことがうかがえる。

Q11 あなたは、大学在学中、課外活動などにどのくらい意欲的に取り組みましたか。

(「経験しなかった」を0として、「とても意欲的だった」(4)～「全く意欲的でなかった」(1)の5件法)

卒年・項目別平均値



※ 平均値の計算には、0と回答した卒業生を含まない。

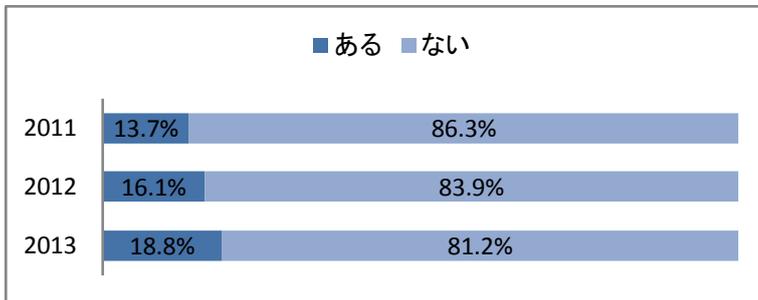
経験者の人数と割合

	2011		2012		2013	
	経験者数	割合	経験者数	割合	経験者数	割合
A. 部活動(部・同好会・愛好会)	178	55.5%	149	55.0%	168	55.4%
B. サークル活動	166	52.2%	138	50.7%	163	53.8%
C. ボランティア活動	81	25.2%	81	29.9%	72	23.9%
D. 就職を希望する業界と関わりが深いアルバイト	111	34.7%	95	34.9%	99	32.8%
E. 就職を希望する業界と関わりが深いインターンシップ	95	29.8%	81	29.9%	72	23.8%
F. 上記以外のアルバイト・インターンシップ	228	71.5%	212	78.2%	222	73.5%

2013年卒の卒業生では、部活動やサークル活動への参加率は5割強で、過去2年度と同様の傾向であった。そのほかのボランティア活動やアルバイト・インターンシップへの参加率も大きな変化がなく、この間の課外活動等への参加状況は安定していたといえるだろう。

Q12 あなたは、大学在学中、留学（海外短期研修や国際ボランティアなどを含みますが、単なる海外旅行は除きます）の経験がありますか。

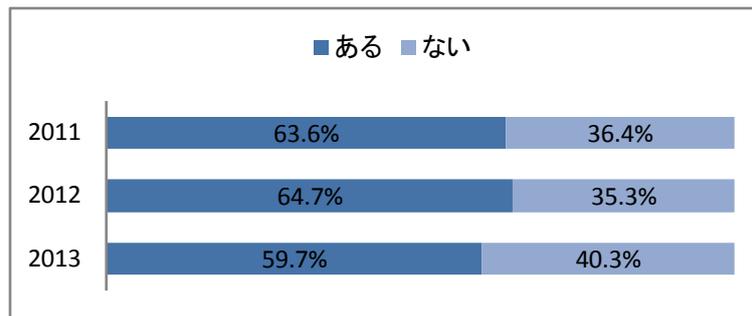
（経験の有無と経験ありの場合日数）



	2011	2012	2013
1週間未満	0	1	2
1週間以上2週間未満	9	2	3
2週間以上1ヶ月未満	10	9	19
1ヶ月以上2ヶ月未満	14	20	16
2ヶ月以上1年未満	9	9	13
1年以上	2	3	4
合計	44	44	57
平均日数	60.3	77.8	64.0

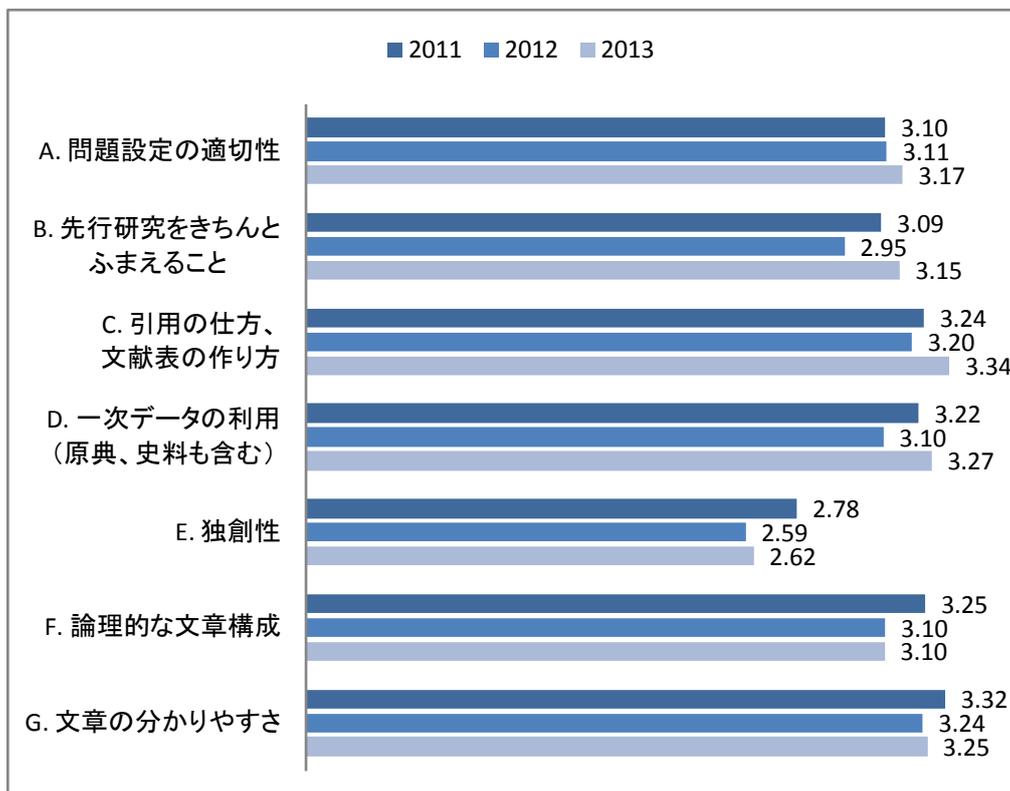
留学経験に関しては、経験ありの割合が徐々に増えてきている様子が見受けられる。その日数は、2013年卒の平均は2012年卒より短くなったが、2週間以上1ヶ月未満と2ヶ月以上1年未満の人数が増え、1ヶ月以上2ヶ月未満の人数が減少した。合計人数の増加に最も貢献しているのは、2週間以上1ヶ月未満の留学経験者であると見受けられる。

Q13 あなたは、卒業論文・卒業研究（ゼミ論文等も含みます）を執筆しましたか。
（経験の有無）



Q14 あなたは、卒業論文・卒業研究（ゼミ論文等も含みます）を書くときに、以下の点をどのくらい意識していましたか。

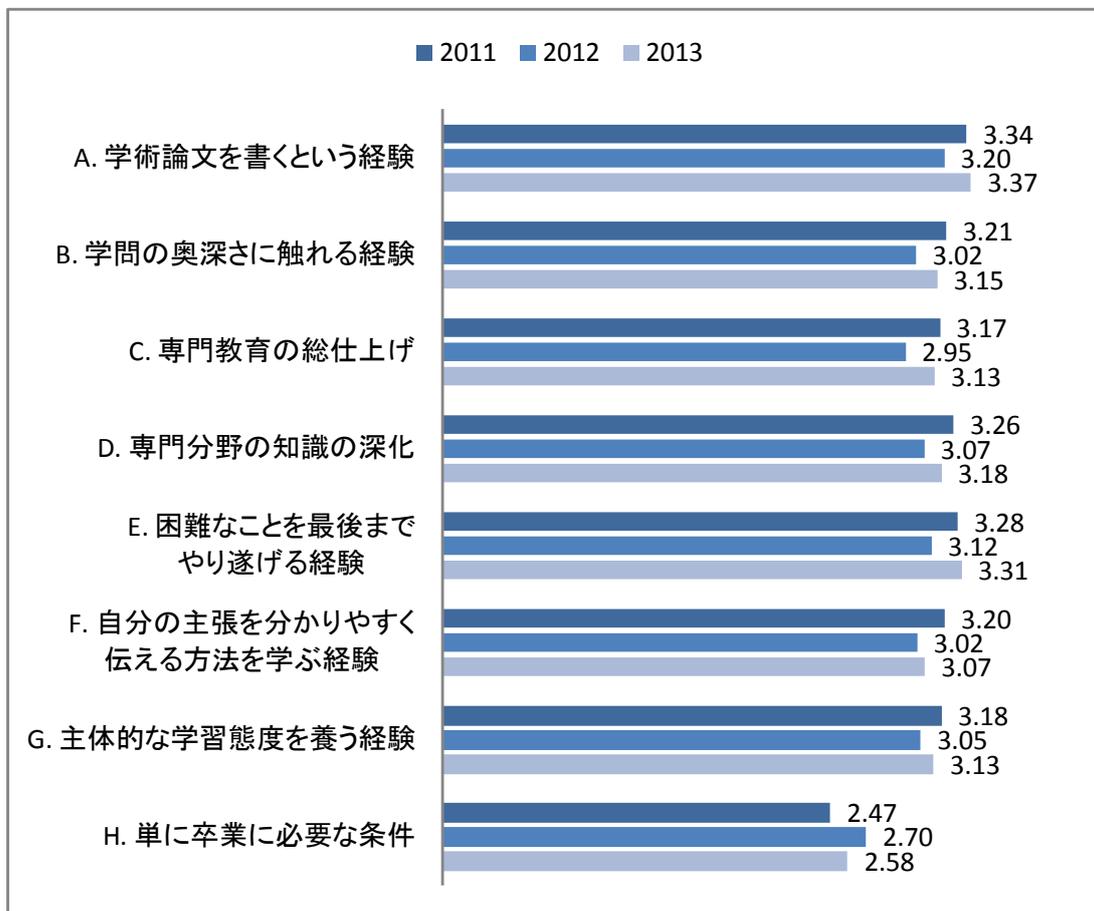
（「とても意識した」（4）～「全く意識しなかった」（1）の4件法）



2013年卒の卒業論文・卒業研究の経験者は、2011年卒・2012年卒に比較して若干減少した。執筆にあたって意識した点で最も平均が高かったのは、2011年卒・2012年卒ではGであったが、2013年卒ではCとなっており、執筆時の注意点が若干変化しているように見受けられる。しかし、どの学年でもEの平均が最も低く、卒業論文や卒業研究では、独創性が意識されることがそのほかの項目に比べて相対的に多くないことは共通している。

Q15 今のあなたにとって、卒業論文・卒業研究（ゼミ論文等も含みます）の執筆にはどのような意義があったと思いますか。

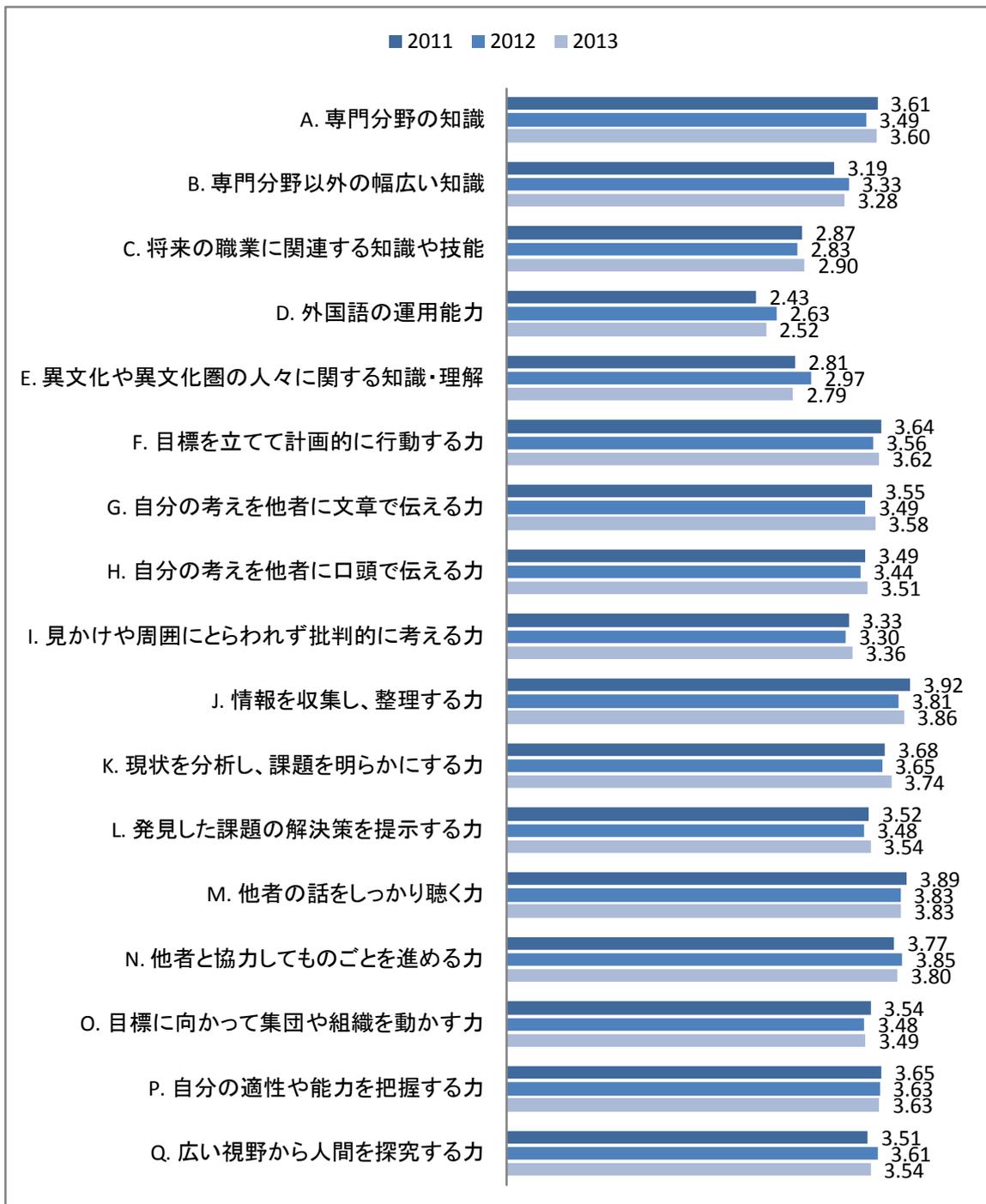
（「とてもあてはまる」（4）～「全くあてはまらない」（1）の4件法）



2011年卒・2012年卒と同様に、2013年卒もH以外のどの項目も一定程度意義として実感されているようである。卒業後5年経過時点で、振り返って卒論・卒研を執筆したという体験の意義を、様々な側面から感じ取っていることがうかがえる。

Q16 大学卒業段階で、あなたは、以下に示すような知識・能力をどのくらい身につけることができたと思いますか。

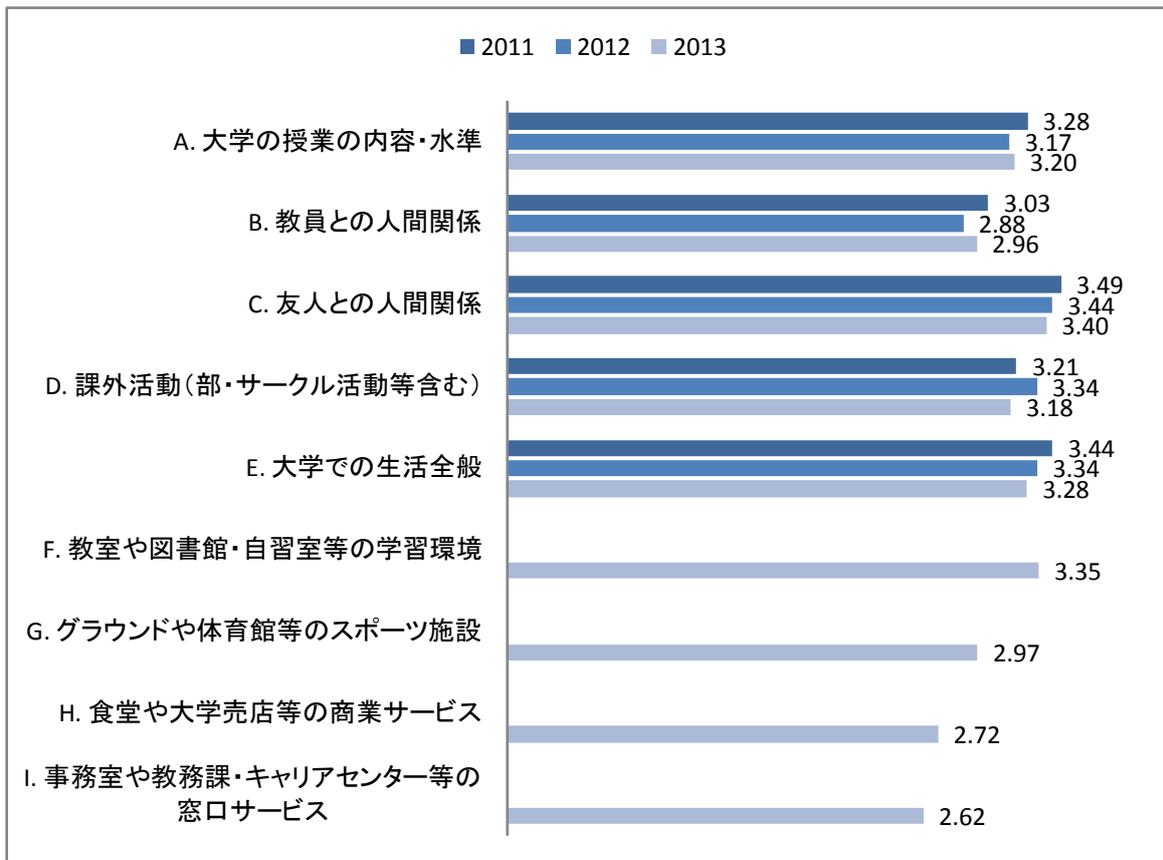
(「しっかり身についた」(5)～「全く身につかなかった」(1)の5件法)



2013年卒も、2011年卒・2012年卒の傾向とほぼ同様であった。平均で4を超える項目はなく、値が高い項目は大学の学習が直結したと考えられる「J.情報を収集し、整理する力」や、M、Nといった他者との協調性に関する項目であった。DやEのような外国語の運用能力や異文化に関する知識・理解の向上が課題であるという点も、3年間を通じて同様であった。

Q17 あなたは、大学時代の教育や学生生活にどの程度満足していますか。

(「とても満足している」(4)～「全く満足していない」(1)の4件法)

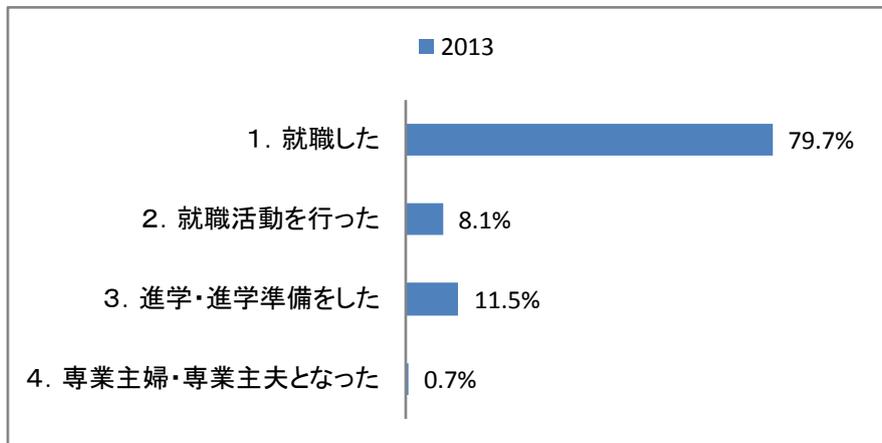


※ F、G、H、Iは2013年卒からの新規項目。

経年で尋ねている項目については、大きな変動は見受けられなかったが、CとEが徐々に低下している傾向が見受けられた。2013年卒から新規に尋ねたF～Iでは、Fは他と比較して高い満足度であるが、G、H、Iのいずれも平均が3未満となった。施設・サービスの活用促進や、質の改善など、満足度向上の余地があるといえるだろう。

大学卒業後のことがら

Q18 あなたが大学を卒業した直後の状況として最もあてはまるものを1つ選んでください。
(1つを選択)

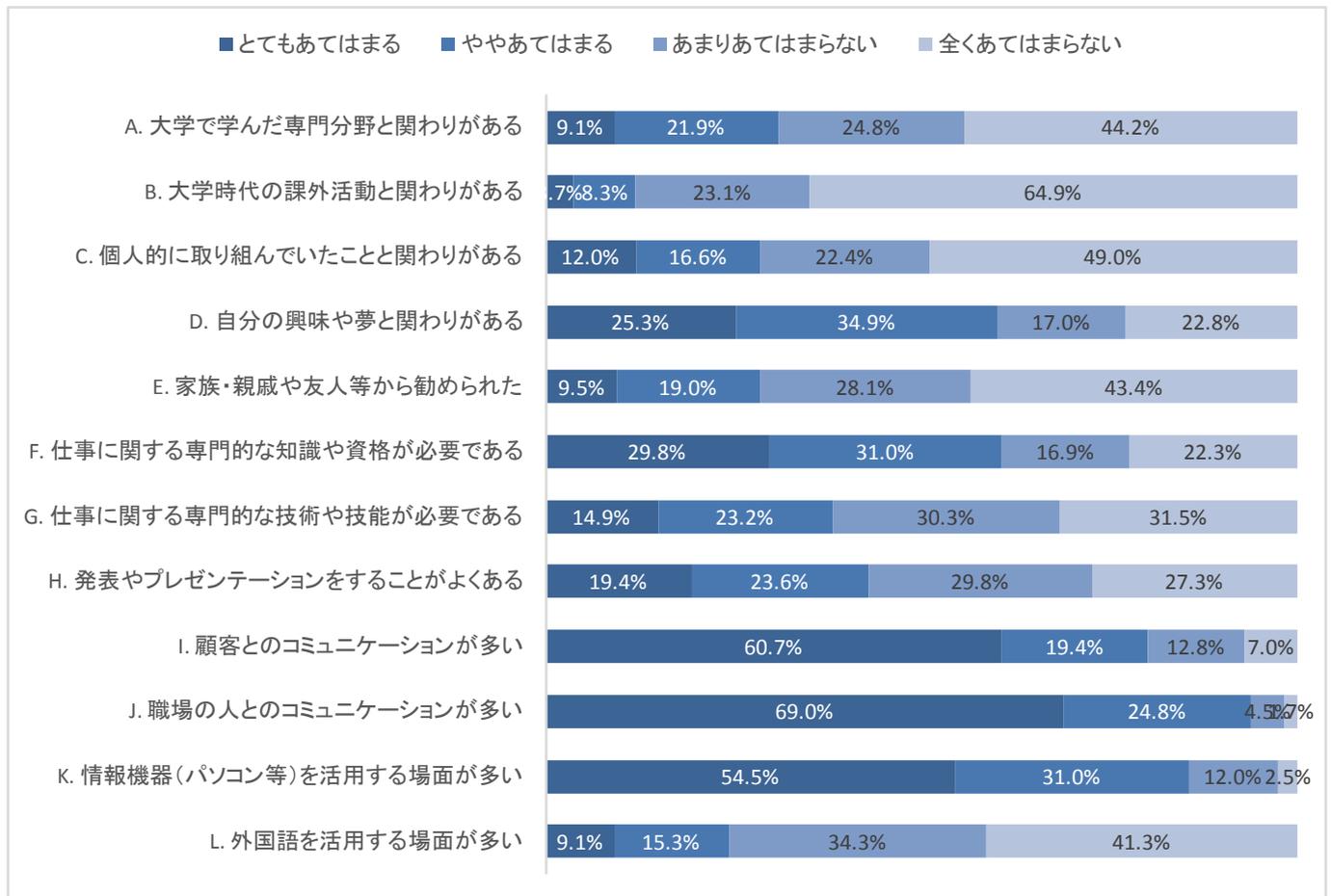


※ 2013年卒より内容を変更した質問のため、2011年卒・2012年卒のデータはない。

アンケートへ回答した卒業生に関して、卒業直後に就職したのは約8割であった。就職活動や進学・進学準備等をせず専業主婦・主夫となったと回答したのは0.7%（2名）であった。

Q19 あなたの大学卒業直後の仕事はどのような内容でしたか。あてはまるものを1つ選んでください。

(「とてもあてはまる」(4)～「全くあてはまらない」(1)の4件法)



※ 2013年卒より内容を変更した質問のため、2011年卒・2012年卒のデータはない。

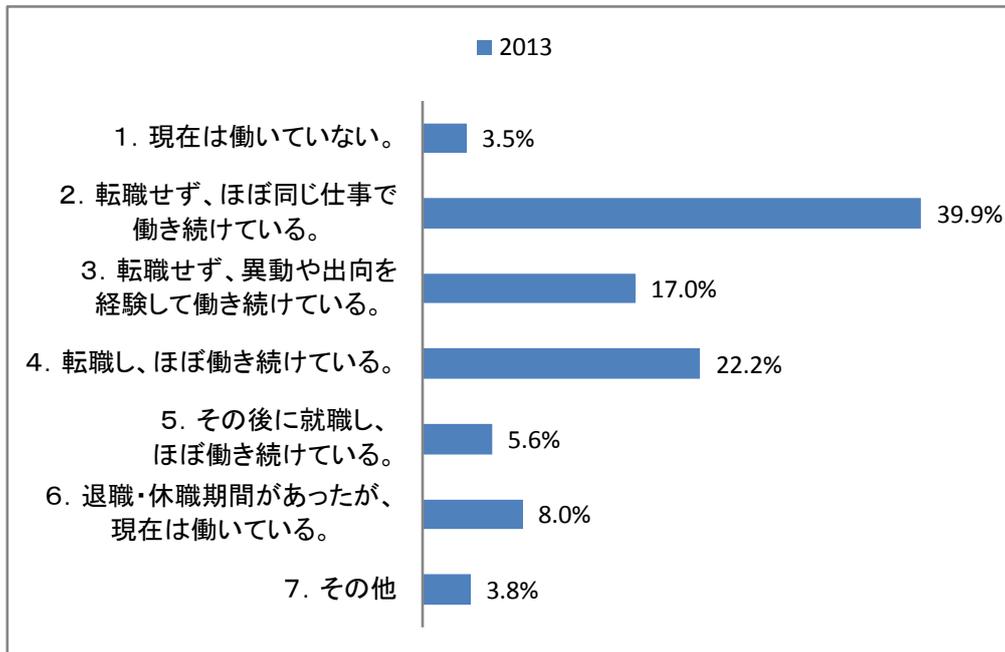
A～Eでは仕事の内容と自身の経験等との関わりについて尋ねた。Dの自身の興味や夢には関わりがあると回答した割合が多いが、大学時代の学びや個人的な取り組み等との関わりは比較的薄い。また、課外活動と関連のある仕事に就いた卒業生はかなり少数派であった。

F～Lでは仕事に必要な能力等について尋ねた。顧客か職場内かに限らずコミュニケーションの必要はやはり高く、さらに情報機器についても85%以上が活用する場面が多いと答えた。専門的な知識や資格は約6割が必要としていた。また、専門的な技術・技能の必要がある、発表やプレゼンテーションの機会が多くあると答えた卒業生はそれぞれ4割程度であった。

外国語については約25%が仕事に活用する場面があるという回答であった。

Q20 あなたの大学卒業直後から現在までの就業状況として、最もあてはまるものを1つ選んでください。

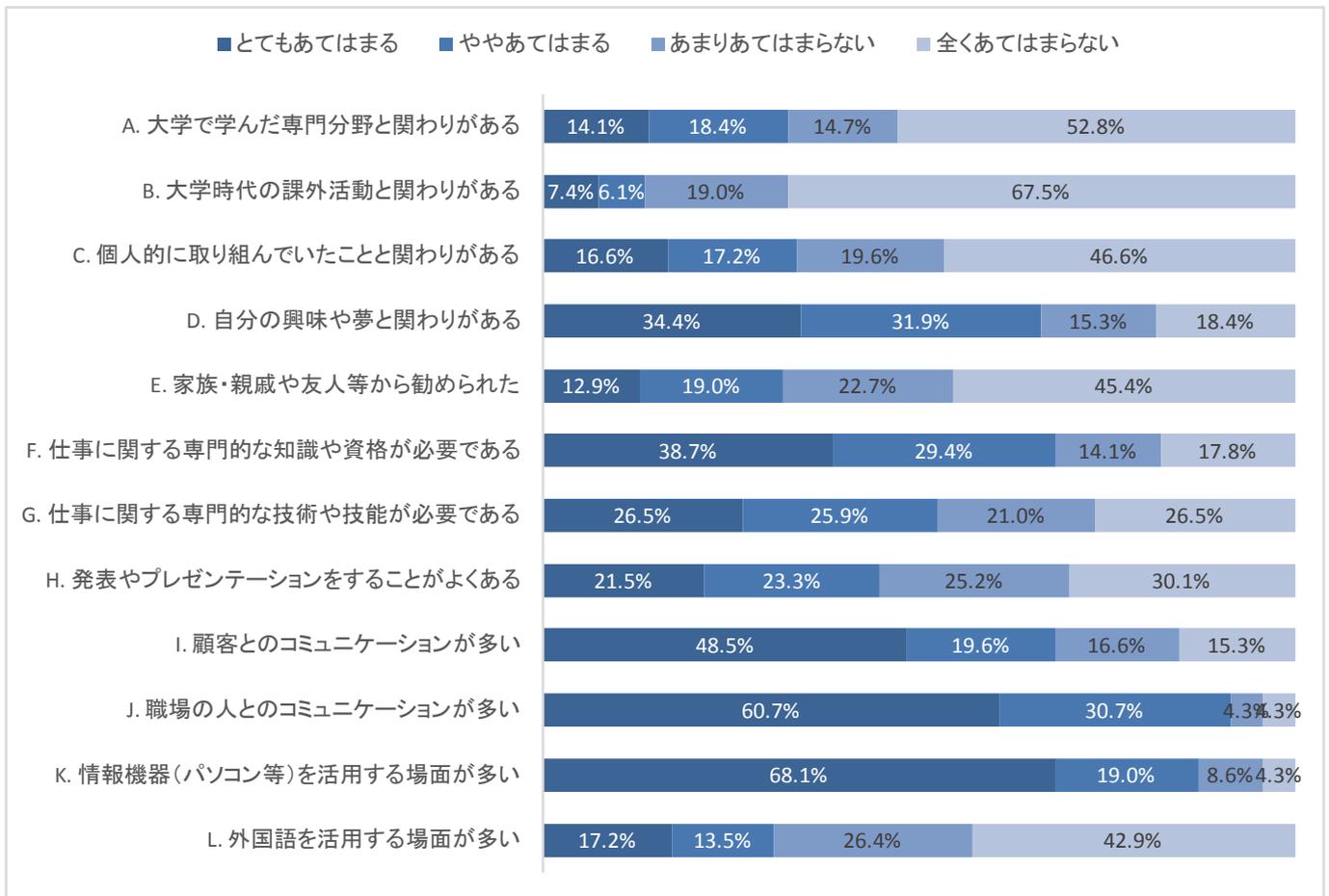
(1つを選択)



回答者のうち、卒業後5年が経過時点で、転職せずほぼ同じ仕事で働き続けている卒業生が約4割、転職せず異動や出向を経験したと回答した卒業生を合わせると、卒業直後の就職から、転職せず働き続けている割合は**56.9%**と半数以上であった。

また、転職や退職・休職の経験者は合わせて約3割であり、その理由が様々であることを考慮にいれつつ、今後の変化について観察が必要である。

Q21 あなたの現在の仕事はどのような内容ですか。あてはまるものを1つ選んでください。
 (「とてもあてはまる」(4)～「全くあてはまらない」(1)の4件法)



Q20 で 3.～7.と回答した卒業生に対して、現在の仕事の内容について Q19 (卒業直後の仕事の内容) と同じ項目で尋ねた。

Q19 の回答と比較して割合に変動が見受けられた項目は D や F であり、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の合計がそれぞれ 10%程度増加し、自身の興味や夢との関わりや、専門的な知識や資格の必要性が増している。反対に、I は 10%程度、J は 5%程度減少し、顧客や職場の人とのコミュニケーションが若干少なくなる傾向があるようである。

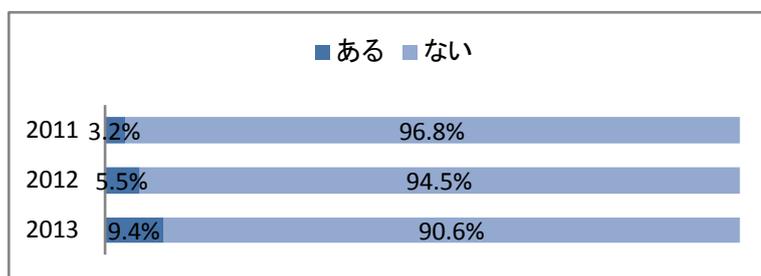
情報機器の活用に関しては、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の合計は 9 割弱と変わりはないが、とてもあてはまるの割合が増え、活用の頻度が高まった様子が見取れる。

外国語の活用も 5%程度増加し、5 年間の変化が若干見受けられた。

Q22 あなたは、これまでに海外での勤務経験または生活経験がありますか。

(経験の有無と経験ありの場合日数)

経験ありなしの割合



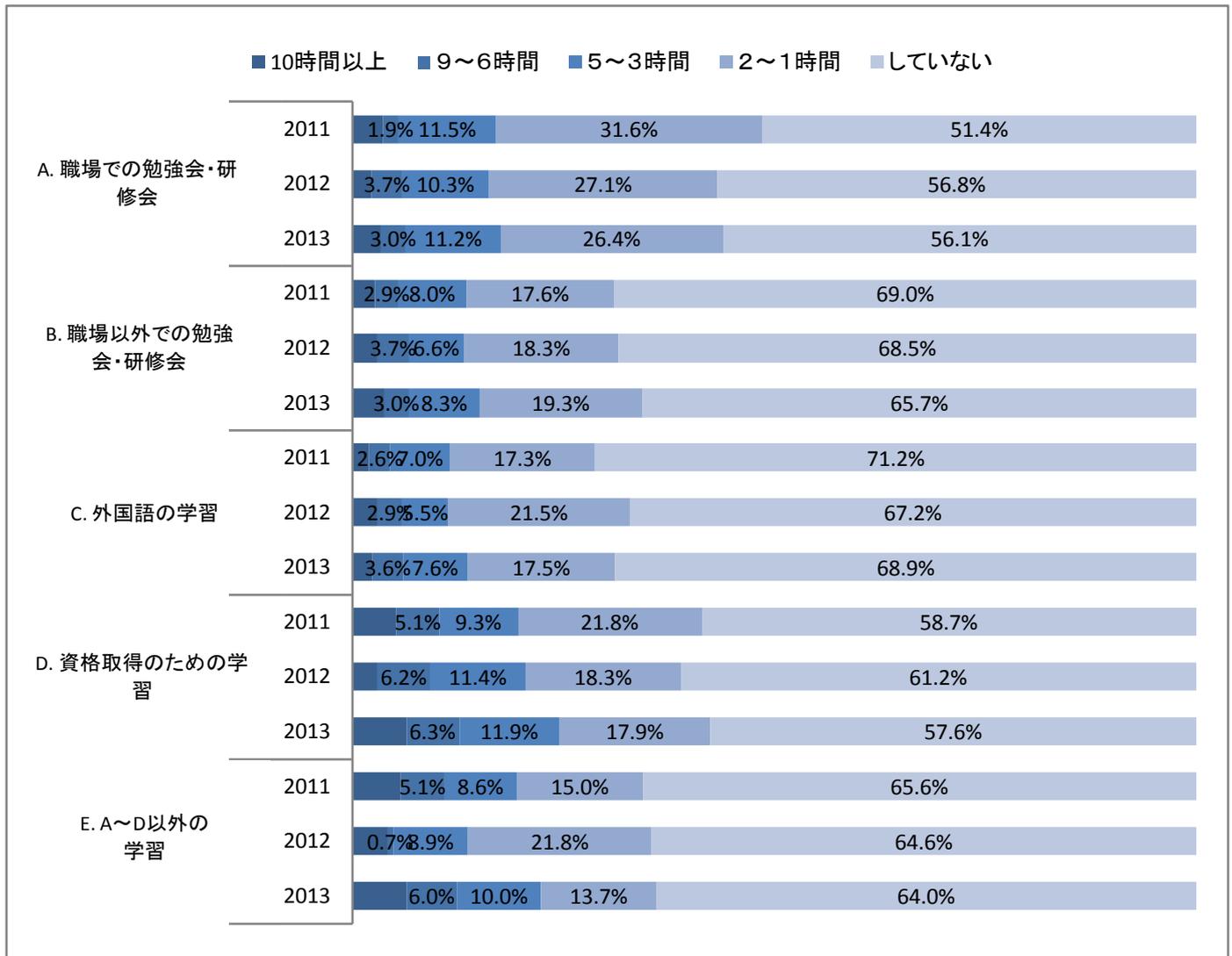
経験者の滞在期間の分布

	2011	2012	2013
1年未満	3	8	12
2年未満	3	3	10
3年未満	1	2	3
4年未満	1	1	1
5年未満	2	1	2
5年以上	0	0	1

海外勤務・海外生活を経験する卒業生の割合は徐々に増えており、期間も1年以上2年未満の経験者人数が多くなるなど長期化の傾向が見受けられる。

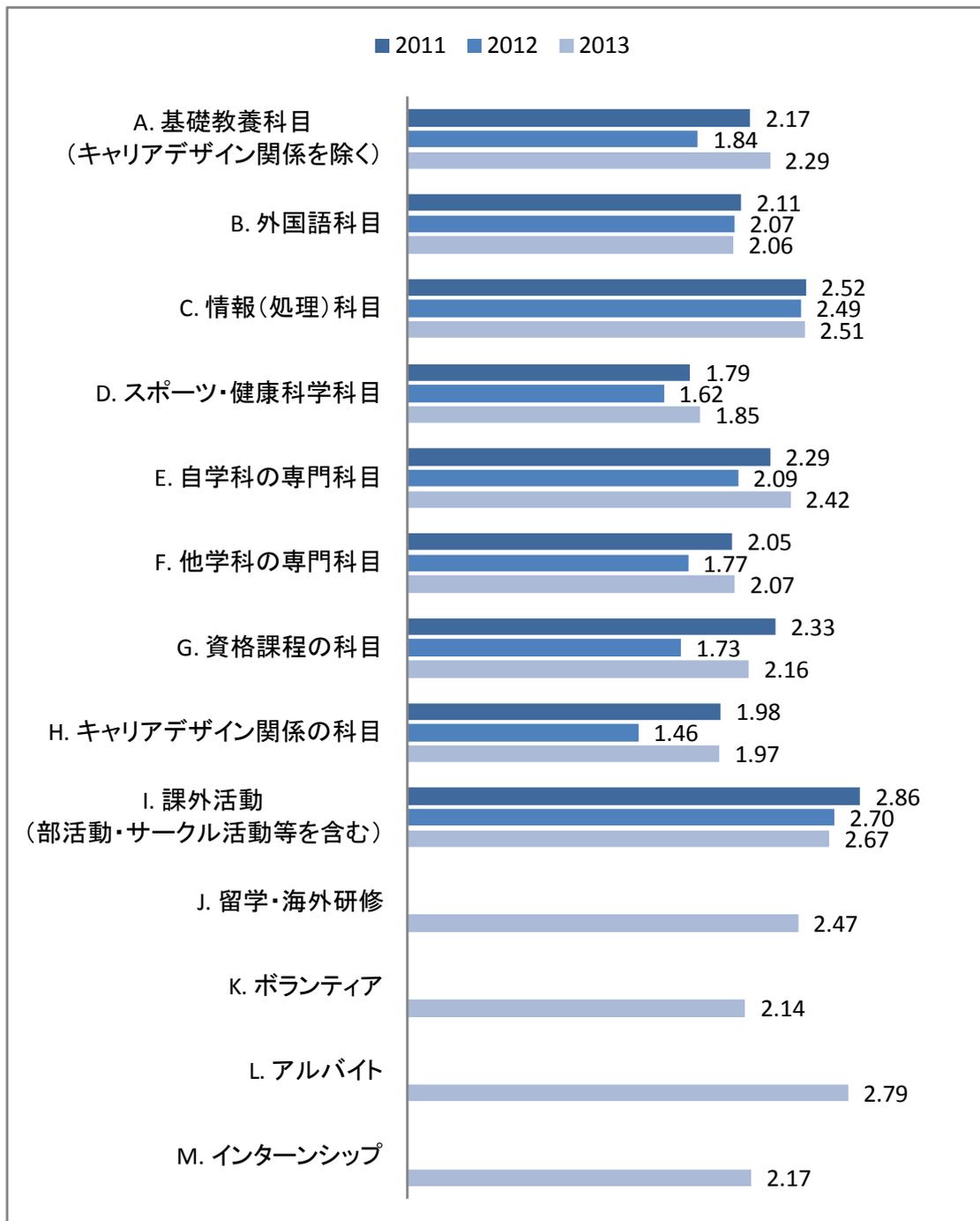
Q23 あなたは、仕事や将来のキャリアのために、以下のような活動を1週間あたり平均でどのくらい行っていますか。あてはまるものを1つ選んでください。

(「10時間以上」(5)～「していない」(1)の5件法)



どの学年の卒業生もあまり研修会や学習への時間を取っている様子は見受けられないものの、外国語や資格取得のための学習時間は、少しずつではあるが増えていることがうかがえる。

Q24 大学時代の学びや経験は、あなたの現在の仕事にどのくらい役に立っていると思いますか。
 (「経験しなかった」を0として、「とても役立っている」(4)～「全く役立っていない」(1)の5件法)



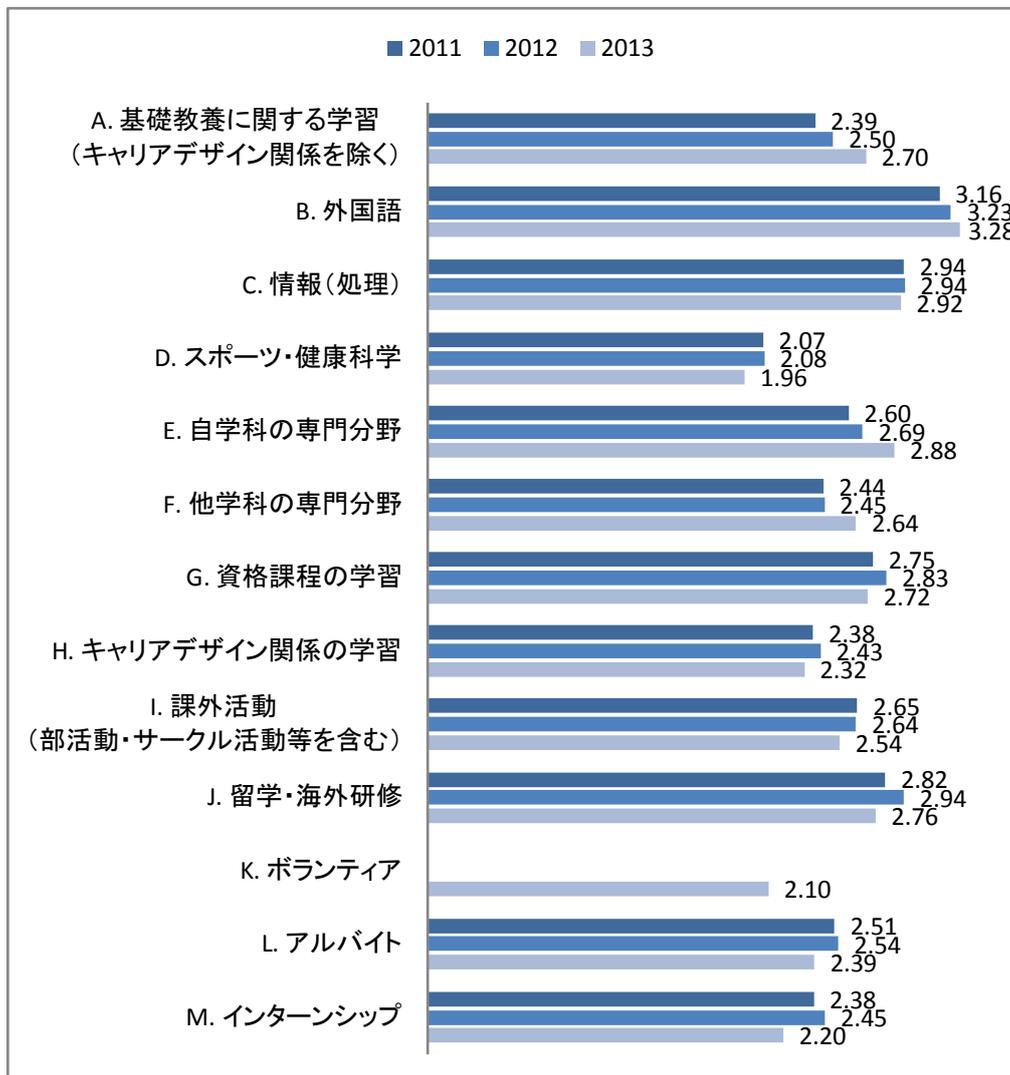
※ 平均値の計算には、0と回答した卒業生を含まない。

2013年卒は、科目に関しては2011年卒・2012年卒と比較しておおよそ高い平均値であったが、課外活動については若干低い値となった。

J～Mは2013年卒から新規に設けた項目である。これらの中ではアルバイト、留学の順に役立っていると感じられており、インターンシップやボランティアはそれよりは低いものの、基礎教養科目や外国語科目と同程度に役立っていると感じられているという結果であった。

Q25 大学時代を振り返って、もっと熱心に学習や経験しておけばよかったと思うことはありませんか。

(「とてもそう思う」(4)～「全くそう思わない」(1)の4件法)

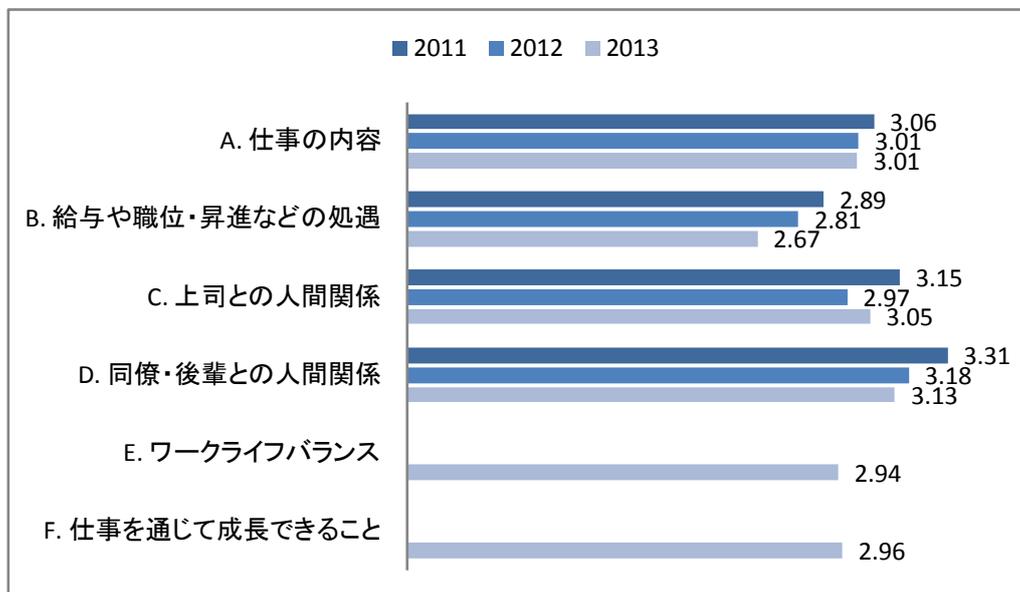


過去2学年と同様に、外国語の学習の回答値が最も高かった。

2013年卒の卒業生は、基礎教養や自学科、他学科の専門分野に関しても過去2学年と比較して高い値だが、アルバイトやインターンシップについては若干低い値であった。2013年卒からボランティアについても新規に尋ねたが、他の項目と比較して低い値であった。

Q26 あなたは、現在の仕事についてどの程度満足していますか。

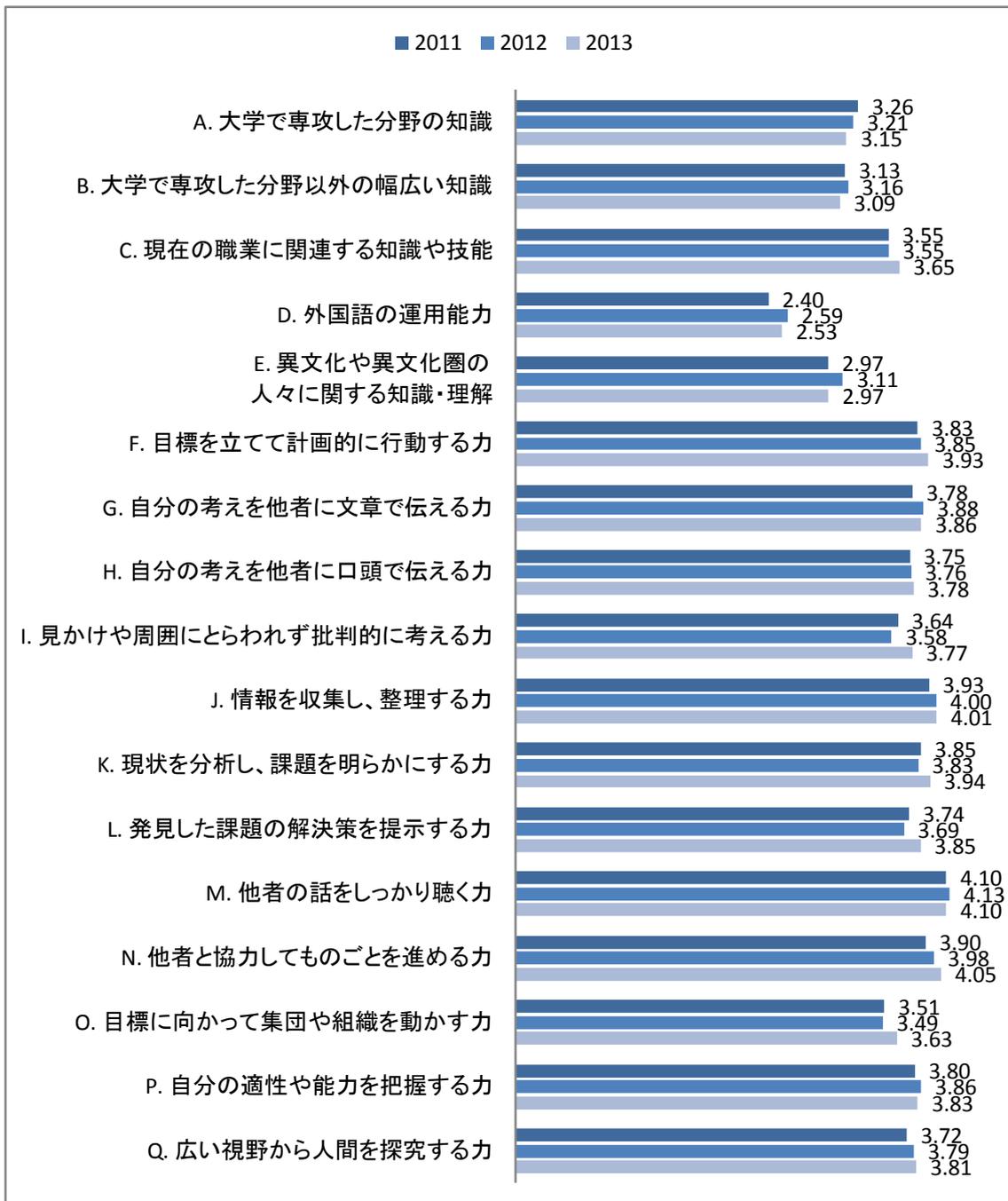
(「現在仕事はしていない」を0として、「とても満足している」(4)～「全く満足していない」(1)の5件法)



※ 平均値の計算には、0と回答した卒業生を含まない。

A、C、Dの回答は、平均で3を超えており満足しているといえるだろう。Bについては、過去2学年よりも低い結果となっており、処遇があまり満足できないと感じられる傾向になってきているように見受けられる。2013年卒より新規に尋ねたEやFも、3に近い値であり、満足度は高めであるといえるが、継続的な観察が必要だと思われる。

Q27 現在、あなたは、以下に示すような知識・能力をどのくらい身につけていると思いますか。
 (「しっかり身につけている」(5)～「全く身につけていない」(1)の5件法)



A、Bの知識はQ16(大学卒業時)と比較して低下傾向にある。また、Dの外国語の運用能力にはほとんど変化がなかった。E以降の知識や能力については向上傾向にあり、その伸びは平均で0.2～0.4程度であった。3学年の差はあまり見受けられなかった。

第2章

卒業生調査にみる学修実感と大学時代の活動やキャリアとの関係

【本章の概要：卒業生調査から見てきた学習実感の傾向】

本章では過年度に実施した3回の卒業生調査を取りまとめ、本学における学修実感（知識や能力が身についたと感じる程度）がどのような傾向にあるかを分析した結果、わかってきたことを冒頭にまとめ、続いて詳細に記載する。

【本章のまとめ：5つの『わかってきたこと』】

1. 学部卒業時の学修実感の傾向と実感しやすい能力

学部卒業時の知識や能力の学修実感を17項目で尋ねたところ、各項目の平均値が過去3年間ほぼ同様に、それぞれの知識や能力の学修実感の得やすさは3学年とも変わらないことがわかった（図1）。

いずれの学年においても実感が高かった能力は、情報を収集・整理する力（項目J）、他者の話を聴く力（項目M）、他者と協力する力（項目N）であった。

（詳細は2-1を参照）

図1 学修実感各項目の卒業年別平均



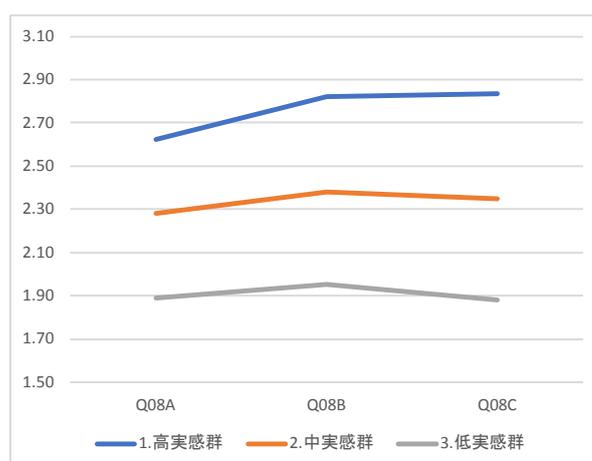
2. 学修実感が高い卒業生は学生時代の学習時間が長く、意欲的で、満足度が高い

学部卒業時の学修実感の感じ方（17項目の知識や能力の感じ方のパターン）を統計的に分類したところ、実感の高さによって3つのグループに分類することができた。この3つのグループ分けを用いて、学生時代の学習時間や意欲等の違いを調べたところ、**高い学修実感を得ていた卒業生は、学生時代の学習時間が長かった**ことがわかった（図2）。

また、卒業時に高い学修実感を得ていた卒業生ほど、各授業科目その他の学習や、サークル・ボランティア等の課外活動、就職を希望する業界に関するアルバイト等への取り組み意欲が高かったこと、教員や友人との人間関係・大学の授業・窓口サービス・大学生活全般への満足度が高かったことも明らかになった。

（詳細は2-5～2-7を参照）

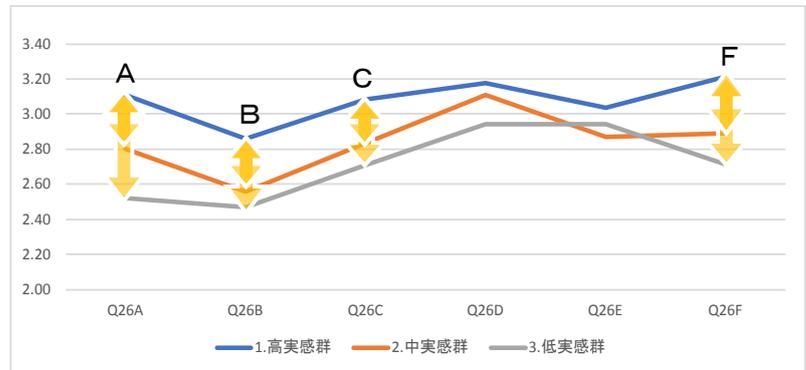
図2 学習時間回答値のグループ別平均



3. 学修実感が高い卒業生は夢や興味に関わる仕事に就き、仕事への満足度が高い

学部卒業時の学修実感の感じ方のグループ分け（2. 参照）を用いて、現在の仕事や生活に関する回答を分析したところ、高い学習実感を得ていた卒業生は、学部卒業5年後現在の仕事に対して、満足度が高いことがわかった（図3）。特に、仕事の内容（項目A）、給与や処遇（項目B）、上司との人間関係（項目C）、仕事を通じた成長（項目F）の満足度が高かった。

図3 学部卒業5年後現在の仕事に対する満足度のグループ別平均

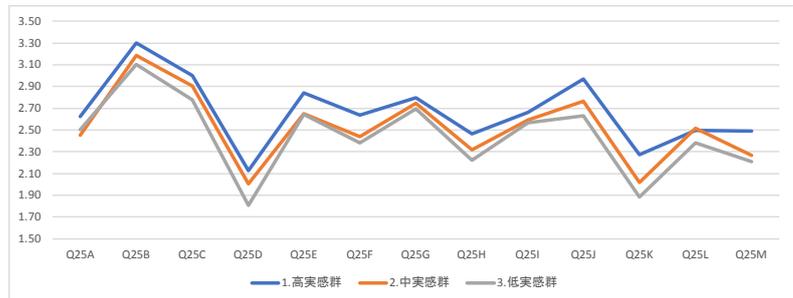


また、卒業時に高い学修実感を得ていた卒業生ほど、卒業直後に就いた仕事は自分の夢や興味との関わりが深いと感じ、学生時代の学びが現在の仕事に役立っていると感じていることもわかった。（詳細は2-8、2-11、2-13を参照）

4. 学生時代の学びや経験の不足に対する後悔度は学修実感とは関連していない

学部卒業時の学修実感の感じ方のグループ分け（2. 参照）を用いて「大学時代を振り返って、もっと熱心に学習や経験しておけばよかったと思うこと」13項目に関する回答を分析したところ、卒業時の学修実感の高低によらず後悔の度合いは同程度であった（図4）。

図4 学生時代の学びや経験の不足に対する後悔度のグループ別平均

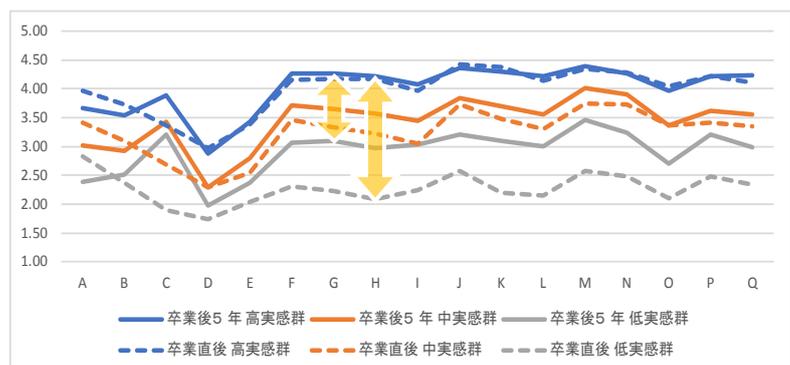


（詳細は2-12を参照）

5. 知識や能力の身につく実感は卒業後5年で確実に縮まってくる

学部卒業時の学修実感と、学部卒業5年後現在の能力実感について、卒業時の学修実感の感じ方のグループ分け（2. 参照）を用いて変化や差を分析したところ、卒業5年後もグループ間の高低順は保たれるが、卒業時の実感が低かった卒業生ほど卒業後に能力実感を高め、実感の差は縮まってきたことがわかった（図5）。（詳細は2-14を参照）

図5 卒業時・5年後の能力実感のグループ別平均（卒業時：点線、5年後：実線）



続いて、冒頭「本章のまとめ」に述べた事柄とその他の検討について、詳細な分析を記載する。

1. 本章の目的

本学における卒業生調査は、平成30年度に実施3回目を迎え、総回答者数は900名を超えた。本章においては、これまでのまとめとして、卒業生調査の回答をもとにした本学における学修成果について検討したい。

昨年度の卒業生調査報告書においては、本調査に回答を寄せた卒業生が、学生時代にどのようなことに意欲的に取り組んでいたのか、様々な活動の組み合わせなどから、その類型化を試みた。結果として、回答から7つの類型が見いだされ、それぞれの特徴や学修実感などの違いが明らかになった。このことから、学生時代にどのようなことに特に意欲的に取り組んでいたかによって、得られる学修実感の内容や程度が異なっており、また学生生活への満足度や卒業後のキャリアも異なってくるのではないかと考えられる。

本年度は、昨年度の分析を踏まえて、学部卒業時の学修実感を起点に、学生時代の学び方や学生生活への満足度、卒業後のキャリア、現在の能力実感などの違いを検討する。

※ いくつかの設問で「経験しなかった(0)」のように値が0である選択肢を設けているが、特に言及しない限り、この「0」も平均値の算出対象に含まれる。

2. 学部卒業時の学修実感（知識や能力が身についたと感じる程度）について

本項では、Q16「大学卒業段階で、あなたは、以下に示すような知識・能力をどのくらい身につけることができたと思いますか。」（「しっかり身についた(5)」～「全く身につかなかった(1)」の5件法）として17項目で尋ねた学修実感について検討する。まず卒業年や学部による違いがあるかを確認し、学生生活を通じて得られた学修実感の特徴をとらえながら、その後の分析につなげていく。

2-1. 卒業年による学修実感

図 2-1-1 は卒業年による比較のグラフである。これを見ると、ほぼグラフが重なっており、学修実感の得られ方には卒業年による違いは見受けられないことがわかる。また、項目ごとに卒業年を要因として分散分析を行ったが、すべての項目で有意な差は認められなかった。したがって、対象としている3年間における知識・能力の学修実感は、概ね同様の傾向であることがわかった。

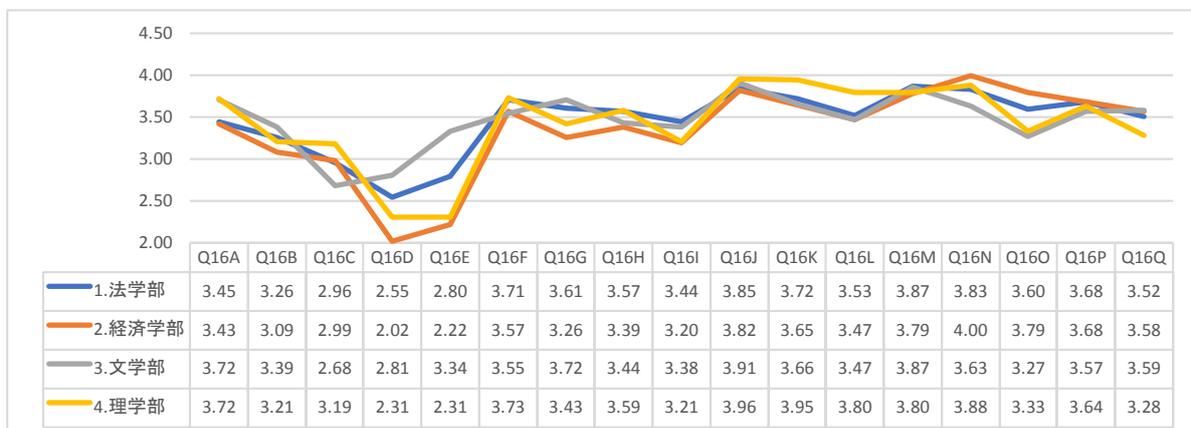
図 2-1-1



2-2. 卒業した学部による学修実感

次に、卒業した学部によって、各知識・能力の学修実感の得られ方に違いがあるかを検討した。図 2-2-1 は、学部ごとの平均をグラフにしたものである。こちらも項目ごとに学部を要因として分散分析を行ったところ、どの項目でも有意な差は認められなかった。したがって、対象とする3年間で、学部による違いは大きくは見られず、知識・能力の学修実感はどの学部においても概ね同様の傾向であることがわかった。

図 2-2-1



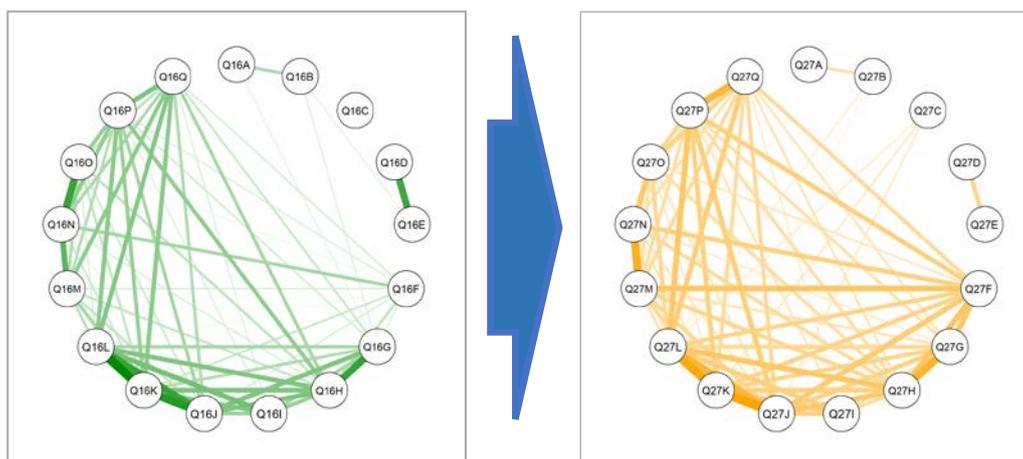
2-3. 学修実感の各項目間のつながりと学部卒業5年後の変化

ここでは、Q16で尋ねた知識・能力17項目間の関係と、さらにQ27で尋ねた学部卒業5年後時点の同17項目の関係について着目した。学部別にその関係を可視化し、卒業時と卒業5年後でどのような変化が見られるかの検討を試みる。項目間の関係は相関係数によって確認し、基準として0.4以上をある程度の関連があるとみなすこととした。グラフにおいては、表示する最小の相関係数を0.4として、その太さ・濃さによって相関の強さを示している（絶対値で0.4を超える負の相関は見られなかったため、図に示された相関は全て正の相関を示す）。

法学部（図2-3-1）では、卒業時は全体で65の組み合わせ（17項目の組み合わせの総数は136）で関連が見られていた。この組み合わせの多く（59の組み合わせ）がF.～Q.の項目間のものであり、A.～E.とF.～Q.の間での関連はほとんど見受けられない。図においても、右上に位置するA～Eはその他の項目とのつながりがほとんど見られない。

卒業5年後ではF.～Q.の項目間のほとんど（66の組み合わせのうち62）で相関が見られ、これらの能力間の関係性が仕事をする中で深まってきていることがうかがえる。B.やC.とJ.・K.・L.の関連が見られ、専門分野以外の幅広い知識や仕事に関する知識と、情報収集・現状分析・課題解決策の検討といった力との関連があることがわかった。しかし、これ以外のA.～E.の項目間やA.～E.とF.～Q.の項目間では関連はあまり見られないままであった。A.～E.のような大学で学んだ知識や外国語の能力・異文化理解といったものと、F.～Q.のような汎用的な能力との関連は、卒業5年後もあまりないよう見受けられる。

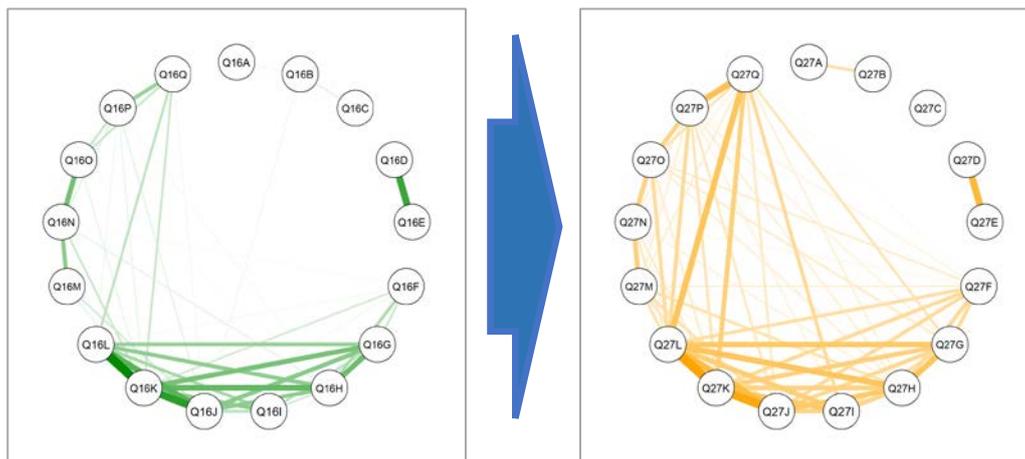
図2-3-1 学修実感項目間の相関関係の卒業時（左）と5年後（右）の変化（法学部）



経済学部（図 2-3-2）では、卒業時は全体で 49 の組み合わせで関連が見られていた。F. ～Q. の項目間に着目すると 43 の組み合わせで関連があり、項目間に関連が見られる数は法学部より少ないものの、傾向としては法学部と同様で、A. ～E. と F. ～Q. では関連がほとんど見受けられない。

また経済学部でも、卒業 5 年後に F. ～Q. の項目間のほとんど（66 の組み合わせのうち 63）で相関が見られており、これらの能力間の関係性が仕事をする中で深まってきていることがうかがえる。A. ～E. と F. ～Q. の関連は全くなく、これらの項目の関連のなさが明確である。

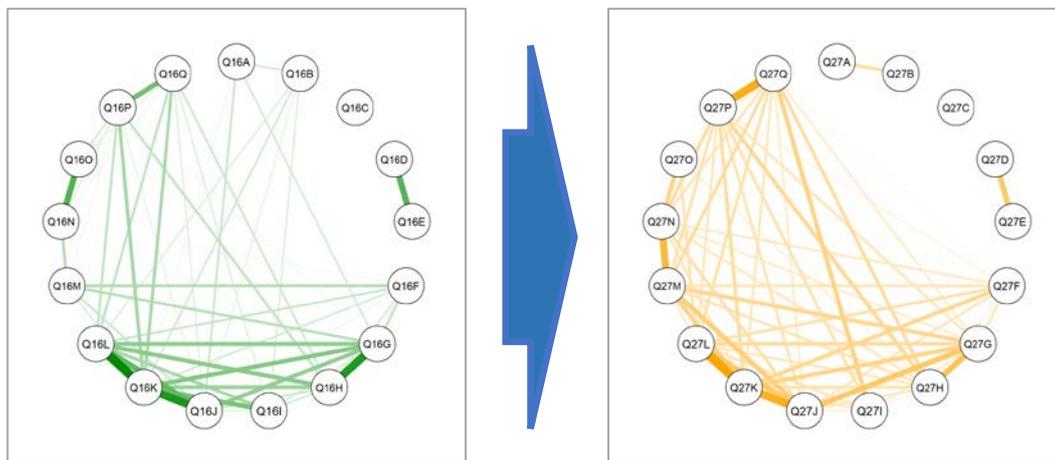
図 2-3-2 学修実感項目間の相関関係の卒業時（左）と 5 年後（右）の変化（経済学部）



文学部（図 2-3-3）では、卒業時は全体で 56 の組み合わせで関連が見られていた。F. ～Q. の項目間に着目すると 45 の組み合わせで関連があった。文学部の場合も多くが F. ～Q. の汎用的な能力間の関連であるが、A. と G. ・H. ・J. ・K.、B. と I. ～K. ・Q. といった関連も見られ、専門分野や専門以外の知識が、文章あるいは口頭での表現力や情報収集・現状分析・課題発見といった能力と関連していた。

また卒業 5 年後に F. ～Q. の項目間の多く（66 の組み合わせのうち 60）で関連が見られるのは法学部・経済学部と同傾向で、これらの能力間の関係性が仕事をする中で深まってきていることがうかがえる。A. ～E. と F. ～Q. の関連は全くなく、経済学部と同様の傾向であった。

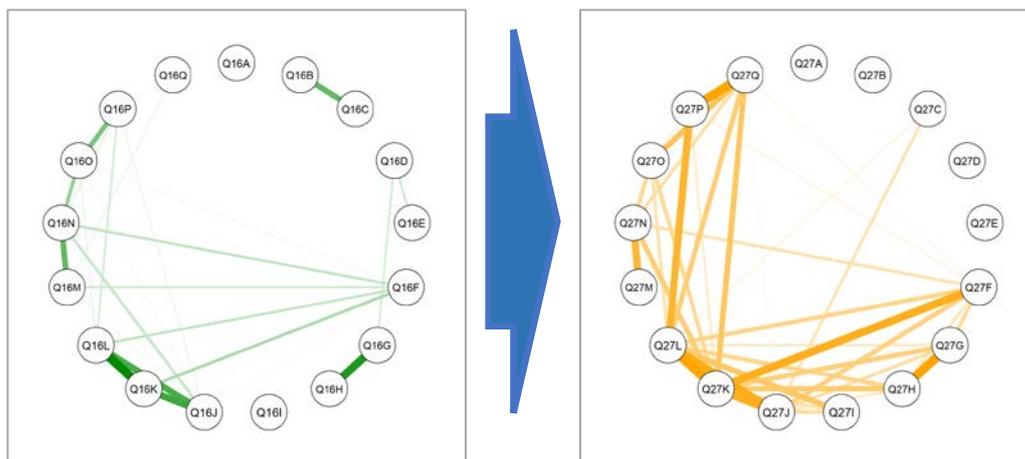
図 2-3-3 学修実感項目間の相関関係の卒業時（左）と 5 年後（右）の変化（文学部）



理学部（図 2-3-4）では、卒業時は全体で 29 の組み合わせで関連が見られていた。F. ～Q. の項目間に着目すると 26 の組み合わせで関連があった。関連性が F. ～Q. の項目間に偏るのは他学部と同様だが、関連する組み合わせの数は少なかった。例えば、I. は他の項目と全く関連がなく、G. ・H. の 2 項目間は関連があるがその他の項目との関連がほとんどない。また、Q. も他の項目との関連があまり見受けられない。I.（批判的思考力）、G. や H.（文章あるいは口頭による表現力）、Q.（人間に対する探求力）は、理学部においては他の知識・能力と同時に身につくというよりも、それぞれ独立に学習されるものであるのかもしれない。

卒業 5 年後の F. ～Q. の項目間の関連は、理学部においては、66 の組み合わせのうち 30 に見られる程度に留まった。この中でも F. ・K. ・L. は多くの項目との関連が見られるものの、G. ～J. と M. ～Q. の項目間の相関があまり見られない（20 の組み合わせのうち関連があるのは 1 つのみ）。G. ～J. は、自分の考えを他者に文章・口頭で伝える力や批判的思考力、情報収集力であり、M. ～Q. は、他者との協力など組織での行動力や、自己の適性を把握したり人間を探究したりする力である。これだけでは傾向を見出すことは難しいが、理学部の卒業生は他学部と比較して卒業後の仕事の性質が異なることが想定されるため、その後の能力の関連のしかたも異なっている可能性が考えられる。A. ～E. とその他の項目との関連が見えにくいことは法学部と同様であり、一部に留まった。

図 2-3-4 学修実感項目間の相関関係の卒業時（左）と 5 年後（右）の変化（理学部）



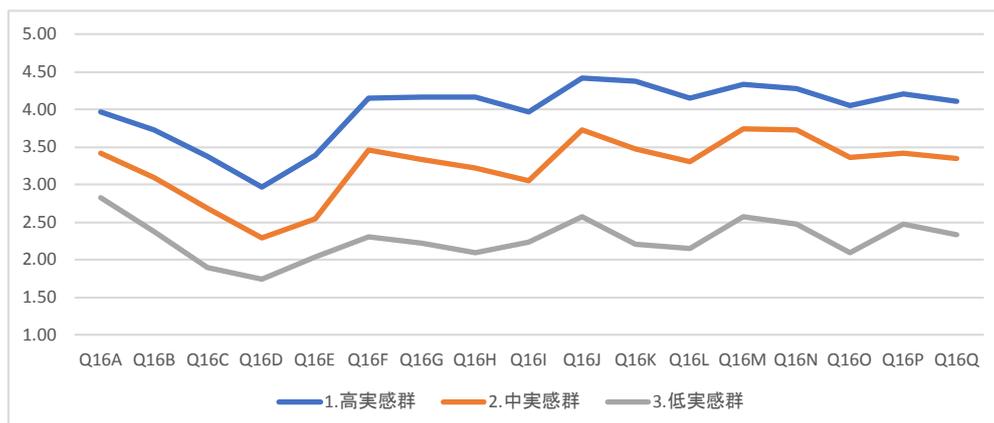
以上、卒業時の各項目間の関連性は、学部により異なるが、A. ～E. と F. ～Q. の関連があまりないことは共通しているように思われた。また、卒業時から卒業 5 年後への各項目間の関連性の変化として、どの学部においても A. ～E. と F. ～Q. の関連はあまり深まらないが、F. ～Q. の項目間の関連は深まる傾向にあることもわかった。大学で学んだ専門分野・専門分野以外の知識や外国語の能力は、他の汎用的な能力との関連が、卒業後 5 年を経過しても変化しないことを示している。要因の一つとして、多くの場合で大学で学んだ知識や外国語を活用するような仕事に就いていないことが考えられる。

2-4. 学修実感による類型化

ここまでの検討で、Q16で尋ねた知識・能力17項目について、回答値の平均には卒業年・卒業学部による差はみられないことがわかった。また、各項目間の相関は学部により異なるものの、共通して大学で学んだ知識や外国語の能力等が、他の汎用的な能力とあまり関連しておらず、卒業5年後もそういった傾向は強いままであることがわかった。これらのことを踏まえて、本報告書においては卒業時の学修実感の回答を用いて卒業生を類型化することとした。類型化には、Q16で尋ねた17項目を用い、非階層的クラスタ分析(k-means法による)を行った。

結果として、3つのクラスタに分けることで特徴が見られたと判断した。第1クラスタには364名、第2クラスタには392名、第3クラスタには109名の対象が含まれていた。クラスタを要因とした分散分析を項目ごとに行った結果、全ての項目で有意であり、多重比較の結果は全ての項目において第1クラスタ>第2クラスタ>第3クラスタという結果であった。この結果から、第1クラスタがどの項目でも回答値が有意に高く、「高実感群」とした。同様に、第2クラスタの回答値は第1クラスタより低い第3クラスタよりは高かったため「中実感群」とし、第3クラスタは他の2つのクラスタより回答値が有意に低いため「低実感群」とした。図2-4-1は、クラスタごとにQ16で尋ねた17項目の平均値をグラフ化したものである。また、表2-4-1(次ページ)に各項目の分散分析結果を示す。

図2-4-1



次に、各クラスタの学部別の人数構成は図2-4-2の通りである。学部とクラスタの人数集計表をもとにカイ二乗検定を行ったが、有意ではなく($\chi^2=5.34$, $df=6$, ns) 偏りは見られなかった。したがって、3つのクラスタは、どの学部にも偏りなく存在していると言え、3つのクラスタの違いは学部によるものではないことが確認された。

図2-4-2

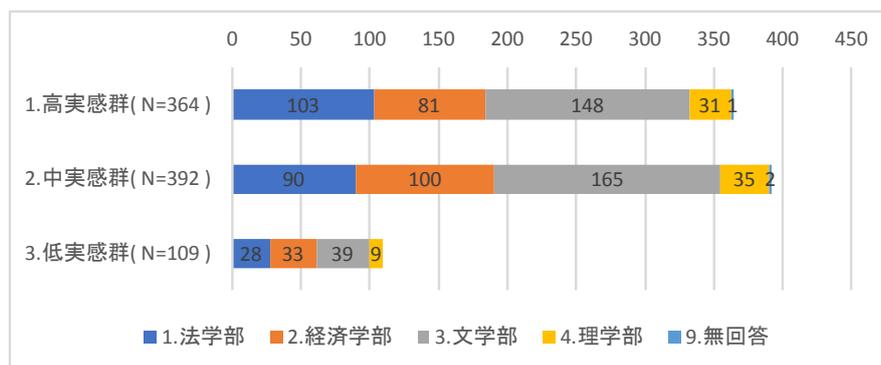


表 2-4-1

項目	1.高実感群	2.中実感群	3.低実感群	分散分析結果 (※1)	多重比較結果 (※2)
Q16A	3.97	3.42	2.83	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16B	3.72	3.09	2.38	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16C	3.37	2.69	1.90	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16D	2.97	2.29	1.74	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16E	3.38	2.55	2.04	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16F	4.16	3.46	2.30	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16G	4.17	3.34	2.22	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16H	4.16	3.22	2.09	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16I	3.97	3.06	2.24	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16J	4.42	3.73	2.58	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16K	4.38	3.48	2.20	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16L	4.15	3.30	2.16	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16M	4.34	3.74	2.58	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16N	4.28	3.72	2.48	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16O	4.05	3.36	2.10	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16P	4.21	3.42	2.48	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q16Q	4.12	3.35	2.34	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群

※1 Welchの補正による ※2 Games-Howellの方法による

各クラスタの特徴を詳しく検討するため、クラスタごとに項目を回答値の平均が高い順に並び替えたものが表 2-4-2 (次ページ) である。

一部の項目では、あるクラスタでは順位が高いが他のクラスタではそうではない、といったことが見受けられた。このことが分かりやすいよう、表 2-4-2 ではクラスタ間で順位の違いが 7 以上あった 4 つの項目について色をつけ変動を示している。最も変動が大きかったのは「A. 専門分野の知識」で、高実感群で 13 位、中実感群で 6 位、低実感群で 1 位であった。同様の傾向が見られるのは「B. 専門分野以外の幅広い知識」で、高実感群で 14 位、中実感群で 13 位、低実感群で 6 位となっている。どちらも知識の習得に関する項目だが、これらは全体の学修実感が高いほど、相対的な順位が低くなる傾向にあると考えられる。

「K. 現状を分析し、課題を明らかにする力」も変動が比較的大きかったが、高実感群で 2 位、中実感群で 4 位、低実感群で 11 位となっている。似た傾向を示すものとして「H. 自分の考えを他者に口頭で伝える力」があり、高実感群で 7 位、中実感群で 12 位、低実感群で 14 位であった。これらは学修実感が高い群ほど順位が高い傾向にあり、項目 A. や B. の傾向とは反対である。

どの群でも上位に入る項目としては、「J. 情報を収集し、整理する力」、「M. 他者の話をしっかり聴く力」「N. 他者と協力してものごとを進める力」(表 2-4-1 においては赤字で示している) があり、学修実感の高低に関わらず、他と比べて学修実感が得られやすい能力と言えるかもしれない。

以上のことから、本学においては、J・M・N は学修実感の高低に関わらず実感が得やすく、現状分析・課題発見の能力や考えを他者に口頭で伝える能力は、全体の学修実感の高まりとともに相乗的に高まっていくが、専門分野の知識やそれ以外の幅広い知識は、全体の学修実感の高まりとともに相対的に低くなる、とまとめられそうである。

表 2-4-2

順位	高実感群	中実感群	低実感群
1	J. 情報を収集し、整理する力	M. 他者の話をしっかり聴く力	A. 専門分野の知識
2	K. 現状を分析し、課題を明らかにする力	J. 情報を収集し、整理する力	J. 情報を収集し、整理する力
3	M. 他者の話をしっかり聴く力	N. 他者と協力してものごとを進める力	M. 他者の話をしっかり聴く力
4	N. 他者と協力してものごとを進める力	K. 現状を分析し、課題を明らかにする力	N. 他者と協力してものごとを進める力
5	P. 自分の適性や能力を把握する力	F. 目標を立てて計画的に行動する力	P. 自分の適性や能力を把握する力
6	G. 自分の考えを他者に文章で伝える力	A. 専門分野の知識	B. 専門分野以外の幅広い知識
7	H. 自分の考えを他者に口頭で伝える力	P. 自分の適性や能力を把握する力	Q. 広い視野から人間を探究する力
8	F. 目標を立てて計画的に行動する力	O. 目標に向かって集団や組織を動かす力	F. 目標を立てて計画的に行動する力
9	L. 発見した課題の解決策を提示する力	Q. 広い視野から人間を探究する力	I. 見かけや周囲にとらわれず批判的に考える力
10	Q. 広い視野から人間を探究する力	G. 自分の考えを他者に文章で伝える力	G. 自分の考えを他者に文章で伝える力
11	O. 目標に向かって集団や組織を動かす力	L. 発見した課題の解決策を提示する力	K. 現状を分析し、課題を明らかにする力
12	I. 見かけや周囲にとらわれず批判的に考える力	H. 自分の考えを他者に口頭で伝える力	L. 発見した課題の解決策を提示する力
13	A. 専門分野の知識	B. 専門分野以外の幅広い知識	O. 目標に向かって集団や組織を動かす力
14	B. 専門分野以外の幅広い知識	I. 見かけや周囲にとらわれず批判的に考える力	H. 自分の考えを他者に口頭で伝える力
15	E. 異文化や異文化圏の人々に関する知識・理解	C. 将来の職業に関連する知識や技能	E. 異文化や異文化圏の人々に関する知識・理解
16	C. 将来の職業に関連する知識や技能	E. 異文化や異文化圏の人々に関する知識・理解	C. 将来の職業に関連する知識や技能
17	D. 外国語の運用能力	D. 外国語の運用能力	D. 外国語の運用能力

以上のことは、あくまで回答者の実感した程度であり解釈には注意が必要だが、本報告書においてはこの類型を起点として、以降それぞれのクラスタがどのような学習経験をし、卒業後にどのようなキャリアを歩んでいっているのかを、他の設問への回答から検討することとする。

2-5. クラスタ別の学習時間や学び方

前項までに見られた学修実感の違いはどのように生まれるのかを検討するため、学習行動に関する設問への回答の違いを検討する。卒業生調査では、「Q08 あなたは、大学在学中、1週間あたり平均でどのくらい『自学自習』（授業の予習・復習、レポート作成、授業とは関係のない学習なども含む日常的な学習時間で、定期試験のための学習時間は除きます）をしていましたか。」や、「Q09 あなたは、大学在学中、どのような学び方をしましたか。」といった学習行動に関する設問を設けており、ここではクラスタによる違いを見ていく。

図 2-5-1 は、Q08（学習時間）に対する回答のクラスタ別平均値である。なおこの設問は「20 時間以上(5)」～「ほとんどしなかった(1)」の 5 件法であり、単位は時間ではない。

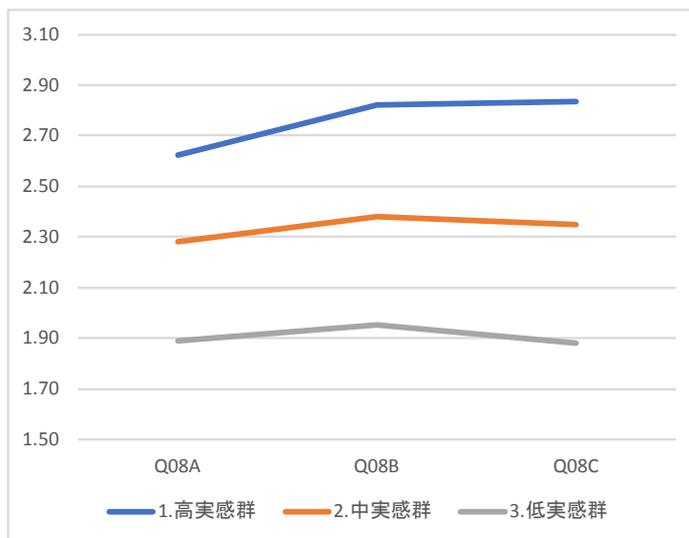
項目（A：1～2年生のとき、B：3年生のとき、C：4年生のとき）ごとにクラスタを要因とした分散分析を行ったところ、全ての項目において有意で、多重比較の結果は全ての項目において高実感群、中実感群、低実感群の順に差が有意であった。したがって、学修実感が高い者ほど、学部 4 年間を通じて自学自習の時間も長かったことがわかる。当然の結果かもしれないが、学部卒業時に高い学修実感を得ていた卒業生は、学習に時間をかけていたことが明らかになった。

各選択肢の中央値を時間に換算（例えば、「3. 10～6 時間」につけた場合は 8 時間と換算）してクラスタ別の平均的な学習時間を試算したところ、高実感群では週に 7～8 時間程度、中実感群では 5～6 時間程度、低実感群では 3～4 時間程度という結果であった。

授業外の学習時間は、他機関が実施する学生実態調査等においても調査されており、1週間あたりにすると 5～6 時間程度であることがわかっている。例えば、ベネッセ教育総合研究所による「第 3 回 大学生の学習・生活実態調査報告書」¹の 1 週間（月曜日～日曜日）あたりの学習・生活時間においては、「授業の予復習や課題をやる時間」の 2.7 時間（2016 年）、「大学の授業以外の自主的な学習」の 2.3 時間（2016 年）の合計が 5.0 時間である。これは、本学の卒業生調査における中実感群の授業外学習時間とおおよそ同程度であり、「中実感群＝他大学含む一般平均程度」と捉えると、高い学修実感を得ていた卒業生は一般平均よりも学習時間が多く、それだけ学習していたということができよう。

図 2-5-2（次ページ）は、Q09（在学中の学び方）に対する回答のクラスタ別平均値である。項目ごとにクラスタを要因とした分散分析を行ったところ、「D. レポート、小論文など文章を書く機会がよくあった」と「F. 暗記による学習が多くを占めた」以外の全ての項目で、有意な結果が得られた。多重比較の結果は、A、C、E、G、H、I の項目では高実感群＞中実感群＞低実感群という順に有意な差が見られ、

図 2-5-1



¹ <https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=5259>（参照日：2019年7月1日）

項目 B. では、高実感群と中実感群では有意な差は見られなかったが、高実感群と低実感群、中実感群と低実感群の間では有意な差が見られた（表 2-5-1）。したがって、レポートや小論文などを課された機会や、暗記型の学習に関する回答傾向は違いがないが、その他の学び方に関しては、高実感群 > 中実感群 > 低実感群の順で高い値となる傾向にあることがうかがえる。

図 2-5-2

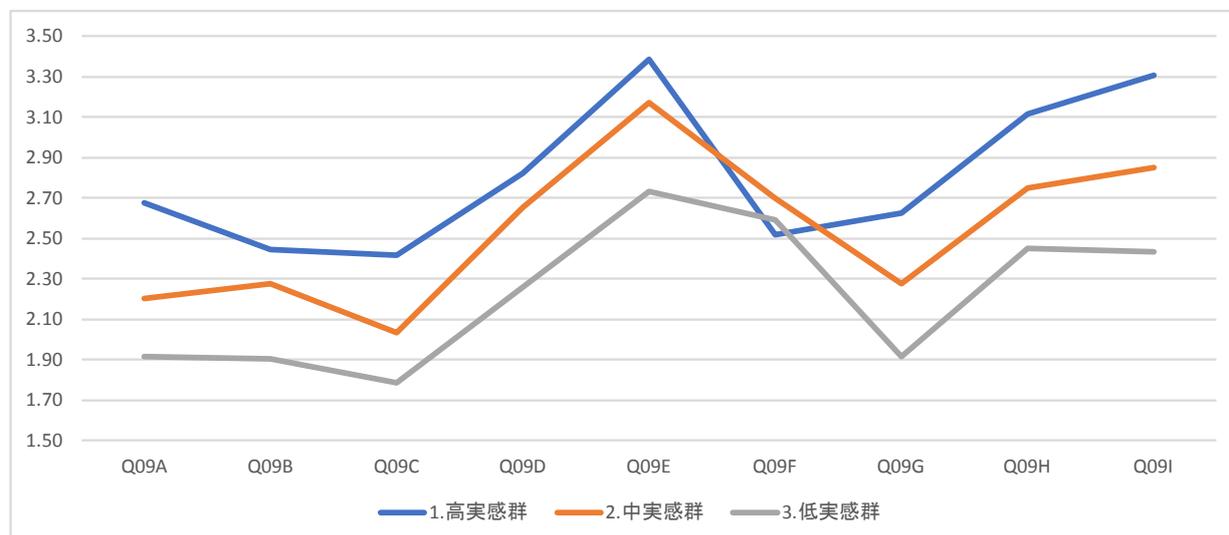


表 2-5-1

項目	高実感群	中実感群	低実感群	分散分析結果 (※1)	多重比較結果 (※2)
Q09A	2.68	2.20	1.92	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q09B	2.44	2.28	1.91	p<.01	高実感群, 中実感群 > 低実感群
Q09C	2.42	2.04	1.79	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q09D	2.82	2.66	2.26	ns	—
Q09E	3.38	3.17	2.73	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q09F	2.52	2.70	2.59	ns	—
Q09G	2.63	2.28	1.91	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q09H	3.12	2.75	2.45	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q09I	3.31	2.85	2.44	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群

※1 Welchの補正による ※2 Games-Howellの方法による

以下ではさらに、各クラスターの学び方の特徴を検討するために、クラスターごとに項目を回答値の平均が高い順に並べ、表 2-5-2（次ページ）にまとめた。

これをクラスターごとの学び方の優先順位としてみると、どのクラスターでも「E. 授業で出された課題などはしっかりと行った」は最も高く、回答平均の違いはあるものの、課題をしっかりと行うことはどのクラスターでも最優先であったことがうかがえる。また、「H. 授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりした」もどのクラスターにおいても共通して3番目に優先されていた。

また、中実感群・高実感群では「I. 授業をきっかけにして自分なりの関心を形成していった」が2番目に入るが、低実感群においては「F. 暗記による学習が多くを占めた」が2番目に入っている。

下位の3項目に着目すると、「C. 新聞を積極的に読んだ」、「B. 文学作品を積極的に読んだ」がどのクラスでも共通して入っており、新聞や文学作品に触れることは、学修実感の高低に関わらず優先順位が低かったことがうかがえる。各クラスで異なる下位項目としては、高実感群では「F. 暗記による学習が多くを占めた」が、中実感群では「A. 学術的な論文・書籍を積極的に読んだ」が下位に入り、低実感群では「G. わからないところは先生に質問した」が入っている。

それぞれのクラスにおける優先順位の違いが顕著だった項目は「F. 暗記による学習が多くを占めた」であり、高実感群では7位、中実感群では4位、低実感群では2位となっている。次に順位の違いが大きかった項目は「A. 学術的な論文・書籍を積極的に読んだ」であるが、高実感群で5位、中実感群で8位、低実感群で6位という違いで、F.ほどの差は見られなかった。比較して、暗記型の学習は学修実感が高い者ほど優先順位が低く、その他の学び方により取り組んでいたと見受けられる。

表 2-5-2

順位	1.高実感群	2.中実感群	3.低実感群	全体
1	E. 授業で出された課題などはしっかりと行った	E. 授業で出された課題などはしっかりと行った	E. 授業で出された課題などはしっかりと行った	E. 授業で出された課題などはしっかりと行った
2	I. 授業をきっかけにして自分なりの関心を形成していった	I. 授業をきっかけにして自分なりの関心を形成していった	F. 暗記による学習が多くを占めた	I. 授業をきっかけにして自分なりの関心を形成していった
3	H. 授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりした	H. 授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりした	H. 授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりした	H. 授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりした
4	D. レポート、小論文など文章を書く機会がよくあった	F. 暗記による学習が多くを占めた	I. 授業をきっかけにして自分なりの関心を形成していった	D. レポート、小論文など文章を書く機会がよくあった
5	A. 学術的な論文・書籍を積極的に読んだ	D. レポート、小論文など文章を書く機会がよくあった	D. レポート、小論文など文章を書く機会がよくあった	F. 暗記による学習が多くを占めた
6	G. わからないところは先生に質問した	G. わからないところは先生に質問した	A. 学術的な論文・書籍を積極的に読んだ	A. 学術的な論文・書籍を積極的に読んだ
7	F. 暗記による学習が多くを占めた	B. 文学作品を積極的に読んだ	G. わからないところは先生に質問した	G. わからないところは先生に質問した
8	B. 文学作品を積極的に読んだ	A. 学術的な論文・書籍を積極的に読んだ	B. 文学作品を積極的に読んだ	B. 文学作品を積極的に読んだ
9	C. 新聞を積極的に読んだ	C. 新聞を積極的に読んだ	C. 新聞を積極的に読んだ	C. 新聞を積極的に読んだ

以上のように、クラス別平均値とクラス内の順位を合わせてとらえると、学修実感の高低に関わらず、大学時代は授業の課題をしっかりと行ったり、授業をきっかけに自分なりの関心を形成する・授業内容について考えたり調べたりするなど、授業内で学んだことに対する学習をよく行っており、高い学修実感を得ていた卒業生ほど自信をもってあてはまると認識していることがうかがえる。

また、暗記による学習は学修実感が高い者ほど優先していなかった傾向にあり、新聞や文学作品に触れることは、学修実感の高低に関わらず優先していなかった傾向にあることがわかった。

2-6. クラスタ別の学習や課外活動等への意欲

卒業生調査では、「Q06 あなたは、大学在学中、大学の授業やその他の学習などにどのくらい意欲的に取り組みましたか。」と、「Q11 あなたは、大学在学中、課外活動などにどのくらい意欲的に取り組みましたか。」という設問で、学習や課外活動等への取り組み意欲を尋ねている。卒業学部による違いの有無を確認するため、学部を要因としてQ06・Q11の各項目を従属変数とした分散分析を行ったところ、Q06の学習関連ではC・K以外の項目で有意な差が見られたが、項目によってどの学部が有意に高いかは異なっていた。またQ11ではどの項目においても有意な差は見られなかった。このことから、学部の違いによる各科目群への意欲はカリキュラムの違いによるものと考えられ、また学生時代の課外活動への取り組みには学部の違いは影響がないことが確認されたため、本項でも学修実感で類型化した3クラスタによる回答傾向の違いを検討することとした。これにより、学修実感の高低と、学習や活動に対する意欲との関連が見えてくると考えた。

図2-6-1(次ページ)は、Q06とQ11の各項目に対する回答のクラスタ別平均値である。また、項目ごとにクラスタを要因とした分散分析を行ったところ、「(Q06)H. 資格課程の科目」、「(Q11)A. 部活動(部・同好会・愛好会)」、「(Q11)F. 上記以外のアルバイト・インターンシップ(上記とは就職を希望する業界と関わりが深いアルバイトやインターンシップを指す)」以外の項目において有意な差が認められた。多重比較の結果は、項目によって有意差の有無に違いはあるものの、高実感群>中実感群>低実感群の順が入れ替わるものではなかった(表2-6-1(次ページ))。

まず、「部活動(部・同好会・愛好会)」や「(就職を希望する業界と関わりがない)アルバイト・インターンシップ」への意欲にはクラスタによる差が認められなかったため、学修実感の高低には、これらの取り組み意欲は関連がなかったことがうかがえる。これは、特にQ16(学部卒業時の知識・能力)のF.~Q.で全てクラスタ間の有意差が見られたことから意外な結果かもしれないが、学修実感が高い者の中にも低い者の中にも、同程度に部活動やアルバイト・インターンシップに意欲的に取り組んだ卒業生がいたということである。

次に、高実感群、中実感群、低実感群それぞれの間で有意な差が見られた項目は、「外国語科目」、「スポーツ・健康科学科目」、「その他の学習」、「ボランティア活動」、「就職を希望する業界と関わりが深いアルバイト」であった。これらの項目を見ると、授業科目では、履修が必須とされる場合が多いが意欲を失いやすい科目群であり、その他の学習や活動では本人のモチベーションが特に必要なものである。これらの項目が学修実感の高低と連動しているということからは、高い学修実感を得ていた卒業生ほど、自主性や自律性が求められる内容にも比較的高い意欲を示していたといえるだろう。

低実感群のみが他の2群より有意に回答値が低かったものは「情報(処理)科目」と「サークル等任意団体の活動」であった。高実感群と中実感群では、情報科目やサークル活動への取り組み意欲には差がなく、低実感群のみ他の卒業生と比較して意欲的でなかったことになる。低実感群のサークル活動参加率は35.8%で他の2群より少ない(高実感群:58.0%、中実感群:52.6%)ため、低実感群にはサークル活動に参加していない卒業生が比較的多く分類された可能性がある。

この点から派生して、各活動の経験率を見てみると、ボランティアや就職を希望する業界と関わりが深いアルバイトでは、高実感群>中実感群>低実感群の順になっていた。これらは前述のように、意欲においても3群の間で有意差が見られた項目である。このことから、学部卒業時の学修実感が高い者ほど、学生時代に何かしらの課外活動に取り組んでいたといえるかもしれない。

残りの項目は高実感群のみが他の2群より有意に回答値が高く、「自学科の専門科目（講義／演習・実験・実習）」「キャリアデザイン関係の科目」「大学で取得できない資格・検定試験のための学習」「その他の読書」「新聞を読む」「就職を希望する業界と関わりが深いインターンシップ」であった。卒業に必要な科目と、自律的な意味合いが強い学習や活動の双方が含まれているが、高い学修実感を得ていた卒業生はこういった項目についても意欲が高かったと自己評価しているといえる。

以上のことを踏まえ、学修実感の高低と大学での授業科目・学習活動・課外活動への意欲は多くの部分で連動していることが確認できたと言える。課外活動のうち、部活動や就職と関係の薄いアルバイトについては学修実感の高低と連動していなかった。その他の課外活動では、各活動の経験率自体が高い学修実感を得ていた卒業生の方が高く、経験することが学修実感に影響をもたらすと考えられる。

図 2-6-1

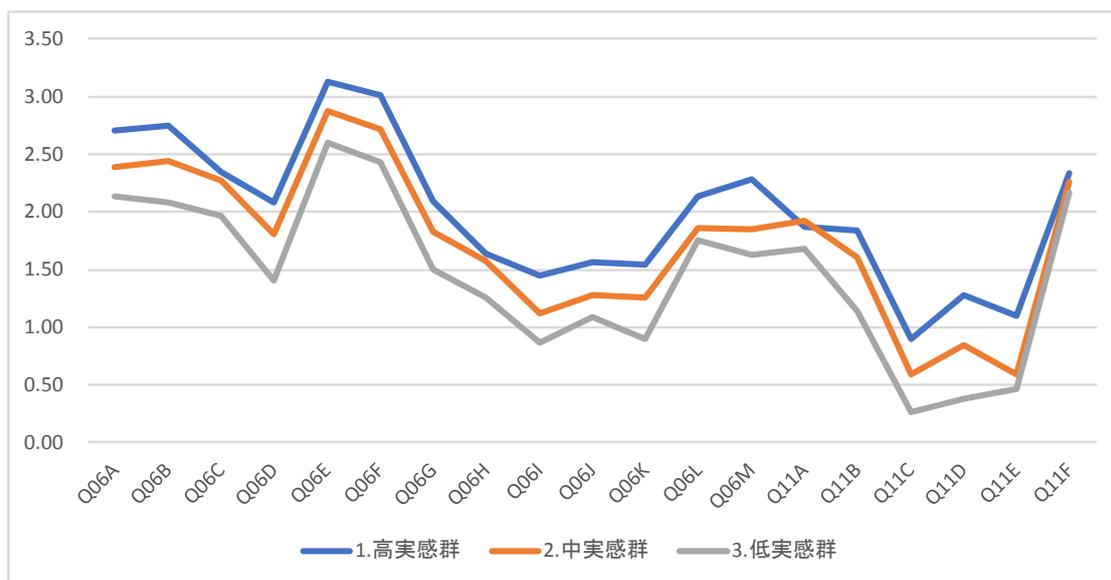


表 2-6-1

項目	高実感群	中実感群	低実感群	分散分析結果 (※1)	多重比較結果 (※2)
Q06A	2.70	2.39	2.13	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q06B	2.75	2.45	2.08	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q06C	2.34	2.27	1.96	p<.01	高実感群, 中実感群 > 低実感群
Q06D	2.08	1.80	1.41	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q06E	3.13	2.87	2.60	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q06F	3.02	2.72	2.43	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q06G	2.09	1.82	1.50	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q06H	1.64	1.58	1.26	ns	—
Q06I	1.44	1.12	0.87	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q06J	1.57	1.28	1.08	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q06K	1.54	1.26	0.90	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q06L	2.13	1.86	1.76	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q06M	2.28	1.85	1.63	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q11A	1.87	1.93	1.68	ns	—
Q11B	1.83	1.60	1.14	p<.01	高実感群, 中実感群 > 低実感群
Q11C	0.90	0.59	0.26	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q11D	1.28	0.84	0.38	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q11E	1.09	0.59	0.46	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q11F	2.34	2.26	2.17	ns	—

※1 Welchの補正による ※2 Games-Howellの方法による

2-7. クラスタ別の学生生活の満足度

卒業生調査では、「Q17 あなたは、大学時代の環境や学生生活にどの程度満足していますか。」という設問で卒業生の満足度を尋ねている。出身学部による違いの有無を確認するため、学部を要因として項目ごとに分散分析を行ったところ、「A. 大学の授業の内容や水準」と「B. 教員との人間関係」においてのみ有意となり、この結果は学部のカリキュラムの違いによるものであると考えた。本項でも学修実感で類型化した3クラスタを用いて満足度の傾向を検討し、学修実感と満足度の関係を捉えたい。

図2-7-1は、Q17の各項目に対する回答のクラスタ別平均値のグラフであり、表2-7-1（次ページ）はクラスタを要因とした分散分析の結果である。これを見ると、「F. 教室や図書館・自習室等の学習環境」と「H. 食堂や大学売店等の商業サービス」以外の項目で有意差が見られた。多重比較の結果は、項目により有意な差の有無に違いはあるものの、高実感群、中実感群、低実感群の順が入れ替わるものではなかった。

まず、比較の結果が高実感群、中実感群、低実感群の全ての組み合わせで有意であったのは、A、B、C、E、Iで、「大学の授業の内容や水準」「教員との人間関係」「友人との人間関係」「大学生活全般」「事務室や教務課・キャリアセンター等の窓口サービス」は、学修実感が高い者ほど満足度も高いことが明らかになった。この結果は、授業にとどまらず教員やその他のスタッフ等大学の構成員との関わりについても、学修実感が高い方が肯定的に受け止めていることを示唆しており、関わりを持つ機会の多寡や質については弁別できないものの、満足する傾向があるといえるだろう。

高実感群が他の2群と比較して高く満足している項目は「G. グラウンドや体育館等のスポーツ施設」である。2-6.における在学中の取り組み意欲の比較では、スポーツ施設を利用する機会が多いと思われるスポーツ・健康科学科目やサークル活動には群間の差があるが、同様と思われる部活動には差がなく、スポーツ施設への満足度と施設を使用する活動への意欲とは傾向が異なっている。この点も、スポーツ施設を利用する頻度や内容について弁別できるものではないが、授業科目やサークル活動に意欲的に取り組んでいた方が、使用した施設にも満足している傾向がある可能性はありそうである。

図 2-7-1

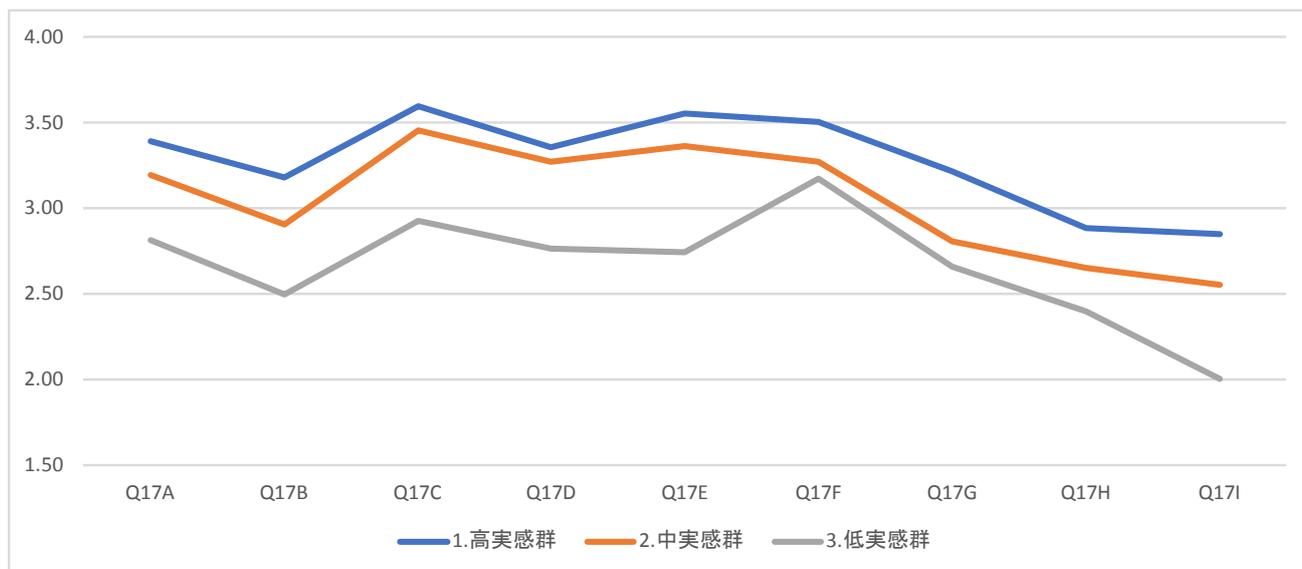


表 2-7-1

項目	高実感群	中実感群	低実感群	分散分析結果 (※1)	多重比較結果 (※2)
Q17A	3.39	3.20	2.82	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q17B	3.18	2.90	2.50	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q17C	3.60	3.46	2.93	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q17D	3.36	3.27	2.76	p<.01	高実感群, 中実感群 > 低実感群
Q17E	3.55	3.36	2.74	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q17F	3.50	3.27	3.17	ns	—
Q17G	3.21	2.80	2.66	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q17H	2.89	2.65	2.40	ns	—
Q17I	2.85	2.55	2.00	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群

※1 Welchの補正による ※2 Games-Howellの方法による

また、クラスタ内の平均値の順位（表 2-7-2）を見ると、高実感群と中実感群は上位から下位までほぼ同じ傾向だが、低実感群のみやや異なる結果であった。低実感群が相対的に最も満足したのは、高・中実感群では3位であった「教室や図書館・自習室等の学習環境」で、高・中実感群で1位だった「友人との人間関係」よりも高く評価されている。また、高・中実感群で2位だった「大学生活全般」に対する満足度は低実感群では5位と低かった。前段の分散分析では、学習環境には有意差はなく、大学生活全般では有意差が見られたことも合わせると、低実感群は大学の施設を活用して学習し、施設には他の2群と同程度に満足していたが、学修実感を高いレベルでは獲得できず、そのことが要因の一つとなって大学生活全般に対する満足度が相対的に低くなった、とも考えられるだろう。

表 2-7-2

順位	1.高実感群	2.中実感群	3.低実感群	(全体)
1	C. 友人との人間関係	C. 友人との人間関係	F. 教室や図書館・自習室等の学習環境	C. 友人との人間関係
2	E. 大学生活全般	E. 大学生活全般	C. 友人との人間関係	E. 大学生活全般
3	F. 教室や図書館・自習室等の学習環境	F. 教室や図書館・自習室等の学習環境	A. 大学の授業の内容や水準	F. 教室や図書館・自習室等の学習環境
4	A. 大学の授業の内容や水準	D. 課外活動(部活動・サークル活動等を含む)	D. 課外活動(部活動・サークル活動等を含む)	D. 課外活動(部活動・サークル活動等を含む)
5	D. 課外活動(部活動・サークル活動等を含む)	A. 大学の授業の内容や水準	E. 大学生活全般	A. 大学の授業の内容や水準
6	G. グラウンドや体育館等のスポーツ施設	B. 教員との人間関係	G. グラウンドや体育館等のスポーツ施設	G. グラウンドや体育館等のスポーツ施設
7	B. 教員との人間関係	G. グラウンドや体育館等のスポーツ施設	B. 教員との人間関係	B. 教員との人間関係
8	H. 食堂や大学売店等の商業サービス	H. 食堂や大学売店等の商業サービス	H. 食堂や大学売店等の商業サービス	H. 食堂や大学売店等の商業サービス
9	I. 事務室や教務課・キャリアセンター等の窓口サービス	I. 事務室や教務課・キャリアセンター等の窓口サービス	I. 事務室や教務課・キャリアセンター等の窓口サービス	I. 事務室や教務課・キャリアセンター等の窓口サービス

2-8. クラスタ別の学部卒業後の進路

表 2-8-1

本項では、学修実感で類型化した3クラスタを用いて、学部卒業後の進路について検討する。ただし、本項の設問は2013

	1.高実感群	2.中実感群	3.低実感群
1.就職した	101	99	27
2.就職活動をした	8	13	3
3.進学・進学準備をした	21	12	1
4.専業主婦・専業主夫となった	0	0	2

年3月卒業の卒業生を対象とした調査から改編したため、2013年卒のみの回答結果を用いる。

表 2-8-1 は、「Q18 あなたが大学を卒業した直後の状況として最もあてはまるものを1つ選んでください。」のクラスタ別の集計である。4.の選択率はどのクラスタも非常に低かったため、この項目を除いたクラスタ別の偏りを調べるために χ^2 検定を行ったところ有意差は見られなかった($\chi=6.19$, $df=4$, ns)。したがって、就職率や進学率にクラスタによる差はないという結果であった。

卒業生調査では、Q18で「1. 就職した」と回答した卒業生に対してのみ、「Q19 あなたの大学卒業直後の仕事はどのような内容でしたか。」という設問で、仕事がどのようなものだったかを尋ねている。この設問の各項目について、クラスタを要因とした分散分析を行ったところ、B.、D.、L.においてのみ有意な差が見られた。Q19の各項目に対する回答のクラスタ別平均値のグラフを図 2-8-1 (次ページ) に、分散分析結果を表 2-8-2 (次ページ) に示す。

項目のうち「D. 自分の興味や夢と関わりがある」でのみ、高実感群、中実感群、低実感群それぞれの間でこの順に有意差が見られた。したがって、学部卒業時の学修実感が高い者ほど、自らの興味や夢と関わりのある仕事についてと認識していると言える。

低実感群のみ回答値が低かった項目は「B. 大学時代の課外活動と関わりがある」であり、学部卒業時の学修実感が低い者ほど、より課外活動とは関わりがないと感じる仕事についてことになる。ただし、この項目については各群とも平均値が2.0を下回っているため、大学時代の課外活動と卒業直後の仕事とはそもそも関連性が低いといえる。

高実感群のみ回答値が高かった項目は「L. 外国語を活用する場面が多い」であり、学部卒業時の学修実感が高い者ほど、外国語を活用する場面の多い仕事に就いたことになるが、高実感群でも平均が2.13のため、これも全体としてはあまり仕事での活用はされなかった傾向にあると思われる。

以上のことから、学修実感が高くなるにつれ、卒業直後に就いた仕事が自分の興味や夢と関わりのあるものだったことが多くなるが、その他の仕事の内容については大きな違いがないことがうかがえる。

図 2-8-1

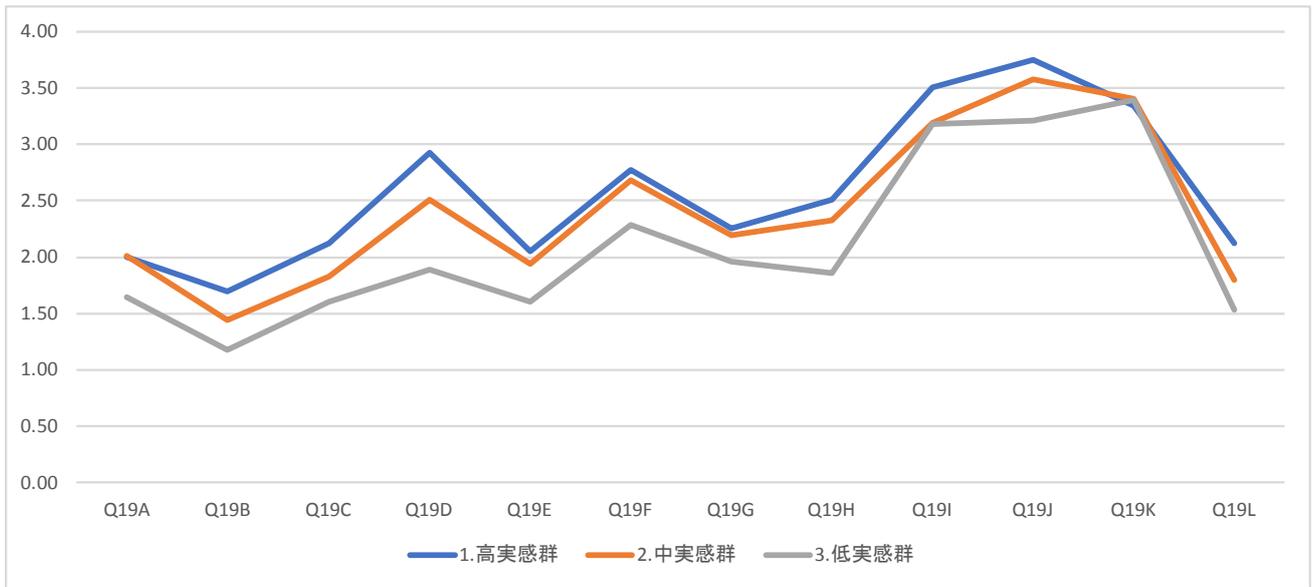


表 2-8-2

項目	高実感群	中実感群	低実感群	分散分析結果 (※1)	多重比較結果 (※2)
Q19A	2.00	2.01	1.64	ns	—
Q19B	1.70	1.44	1.18	p<.01	高実感群, 中実感群 > 低実感群
Q19C	2.12	1.83	1.61	ns	—
Q19D	2.92	2.51	1.89	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q19E	2.05	1.94	1.61	ns	—
Q19F	2.77	2.68	2.29	ns	—
Q19G	2.25	2.19	1.96	ns	—
Q19H	2.51	2.33	1.86	ns	—
Q19I	3.51	3.19	3.18	ns	—
Q19J	3.75	3.58	3.21	ns	—
Q19K	3.34	3.40	3.39	ns	—
Q19L	2.13	1.80	1.54	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群

※1 Welchの補正による ※2 Games-Howellの方法による

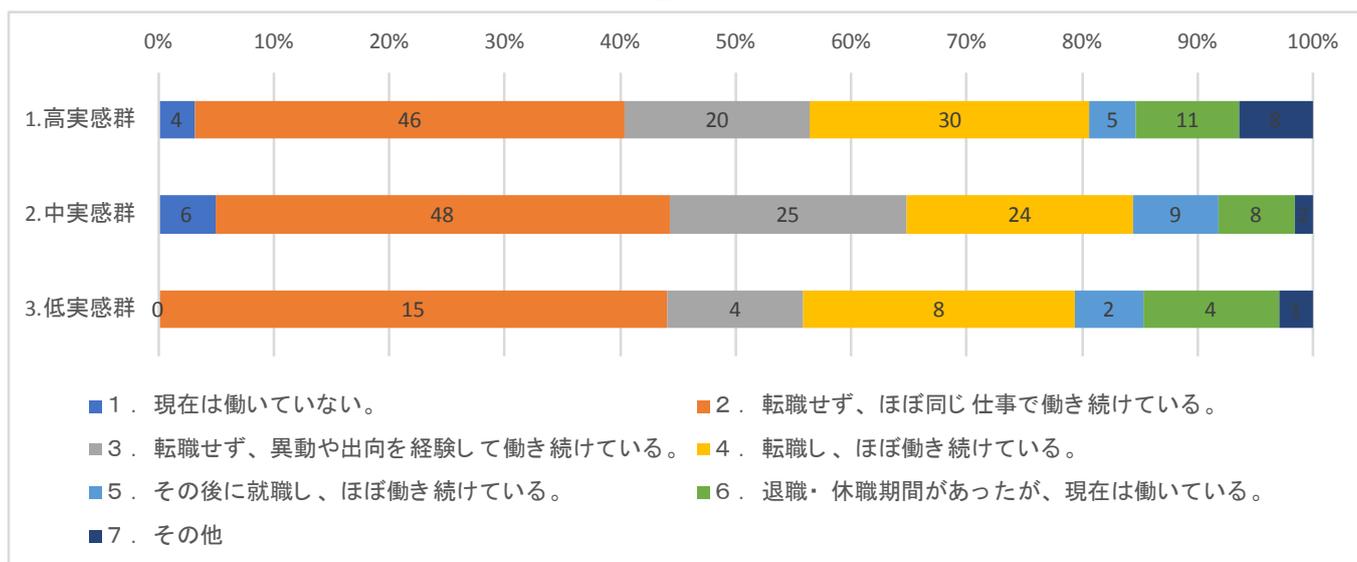
2-9. 学部卒業後の進路から5年後現在へ

本項では、学部卒業後の進路のさらにその先について検討する。表2-9-1と図2-9-1は、「Q20 あなたの大学卒業直後から現在までの就業状況として、最もあてはまるものを1つ選んでください。」という設問で就業状況の変化を尋ねた結果である。度数が極端に少ないセルが多く見られるため検定にはかけられないが、群ごとの割合を見るとクラス間で大きく異なる傾向はないように見受けられる。転職を経験せずに働き続けている卒業生は各群とも55%程度であり、転職を経験したのは20%程度である。

表 2-9-1

	1.高実感群	2.中実感群	3.低実感群
1. 現在は働いていない。	4	6	0
2. 転職せず、ほぼ同じ仕事で働き続けている。	46	48	15
3. 転職せず、異動や出向を経験して働き続けている。	20	25	4
4. 転職し、ほぼ働き続けている。	30	24	8
5. その後に就職し、ほぼ働き続けている。	5	9	2
6. 退職・休職期間があったが、現在は働いている。	11	8	4
7. その他	8	2	1

図 2-9-1



また、本調査では、Q20に3.～7.と回答した（卒業後5年間の間に就業状況が変化した）卒業生に対して、Q21において現在の仕事かどのようなものであるかをQ19と同様の項目で尋ねている。

ここではQ20に「4. 転職し、ほぼ働き続けている」に回答した卒業生について、Q21とQ19の差をクラスター別に見ていく。これにより、転職を経験した卒業生の仕事かどのように変化したのかを観察できると考える。

Q21とQ19への回答値の差のクラスター別平均値のグラフが図2-9-2、差の平均値が大きい順に項目を並べたものが表2-9-2（次ページ）である。

変化が最も大きかった項目は、高実感群では「L. 外国語を活用する場面が多い」、中実感群では「G. 仕事に関する専門的な技術や技能が必要である」、低実感群では「D. 自分の興味や夢と関わりがある」であった。逆に、最も変化が小さかった項目は、高実感群で「D. 自分の興味や夢と関わりがある」、中実感群で「B. 大学時代の課外活動と関わりがある」、低実感群で「F. 仕事に関する専門的な知識や資格が必要である」と「H. 発表やプレゼンテーションをすることがよくある」であった。

2-8. で見た卒業直後に就いた仕事の内容では、「D. 自分の興味や夢と関わりがある」でのみ3群間に有意差があったが、転職後には特に低実感群で上昇が見られたことから、低実感群の卒業生は転職の際に自分の興味や夢という軸で転職活動を行っていたことがうかがえる。高実感群の就いた仕事の興味や夢との関わりは卒業時点でも高かったが、転職後も大きく変化せず一定している。他の項目を見ても、高実感群は転職による変化はあまり感じていないようである。中実感群は興味や夢との関わりの変化は多少ある程度で、仕事に関する専門的な技術・技能の必要性が最も増しているため、より専門性の高い仕事へ転職したケースが多いと考えられる。最後に、特に低実感群において、転職後の仕事は顧客とのコミュニケーションの多さがある程度減っていたことを付け加えておく。

図 2-9-2

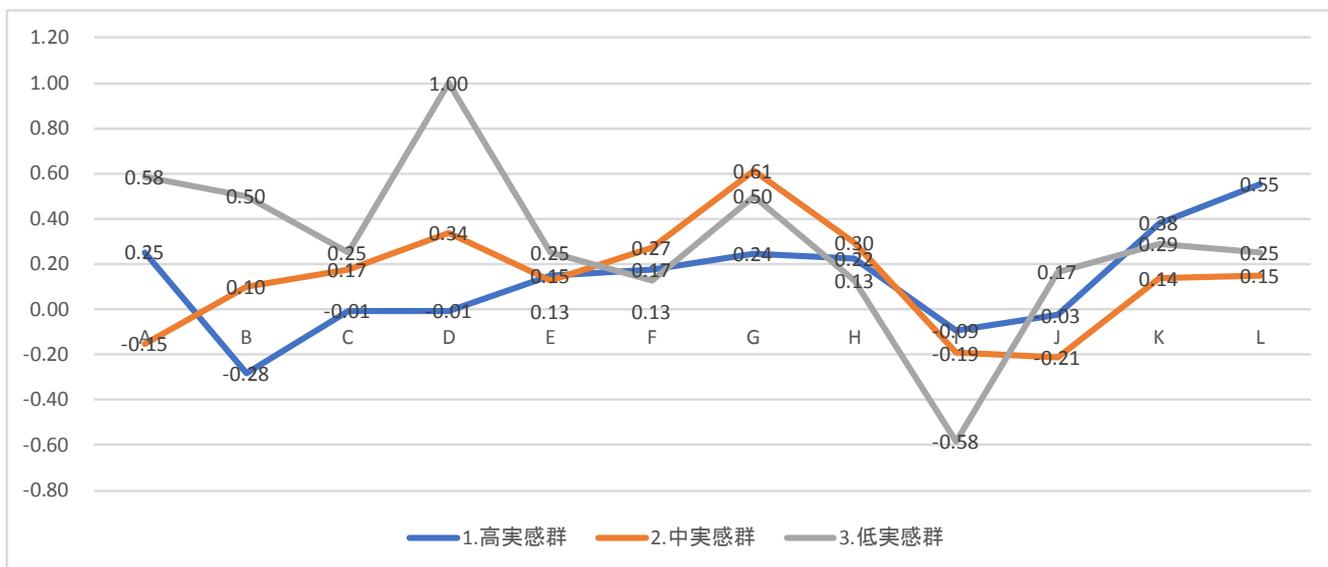


表 2-9-2

順位	1.高実感群	2.中実感群	3.低実感群
1	L. 外国語を活用する場面が多い	G. 仕事に関する専門的な技術や技能が必要である	D. 自分の興味や夢と関わりがある
2	K. 情報機器(パソコン等)を活用する場面が多い	D. 自分の興味や夢と関わりがある	I. 顧客とのコミュニケーションが多い
3	B. 大学時代の課外活動と関わりがある	H. 発表やプレゼンテーションをすることがよくある	A. 大学で学んだ専門分野と関わりがある
4	A. 大学で学んだ専門分野と関わりがある	F. 仕事に関する専門的な知識や資格が必要である	G. 仕事に関する専門的な技術や技能が必要である
5	G. 仕事に関する専門的な技術や技能が必要である	J. 職場の人とのコミュニケーションが多い	B. 大学時代の課外活動と関わりがある
6	H. 発表やプレゼンテーションをすることがよくある	I. 顧客とのコミュニケーションが多い	K. 情報機器(パソコン等)を活用する場面が多い
7	F. 仕事に関する専門的な知識や資格が必要である	C. 個人的に取り組んでいたことと関わりがある	C. 個人的に取り組んでいたことと関わりがある
8	E. 家族・親戚や友人等から勧められた	A. 大学で学んだ専門分野と関わりがある	L. 外国語を活用する場面が多い
9	I. 顧客とのコミュニケーションが多い	L. 外国語を活用する場面が多い	E. 家族・親戚や友人等から勧められた
10	J. 職場の人とのコミュニケーションが多い	K. 情報機器(パソコン等)を活用する場面が多い	J. 職場の人とのコミュニケーションが多い
11	C. 個人的に取り組んでいたことと関わりがある	E. 家族・親戚や友人等から勧められた	H. 発表やプレゼンテーションをすることがよくある
12	D. 自分の興味や夢と関わりがある	B. 大学時代の課外活動と関わりがある	F. 仕事に関する専門的な知識や資格が必要である

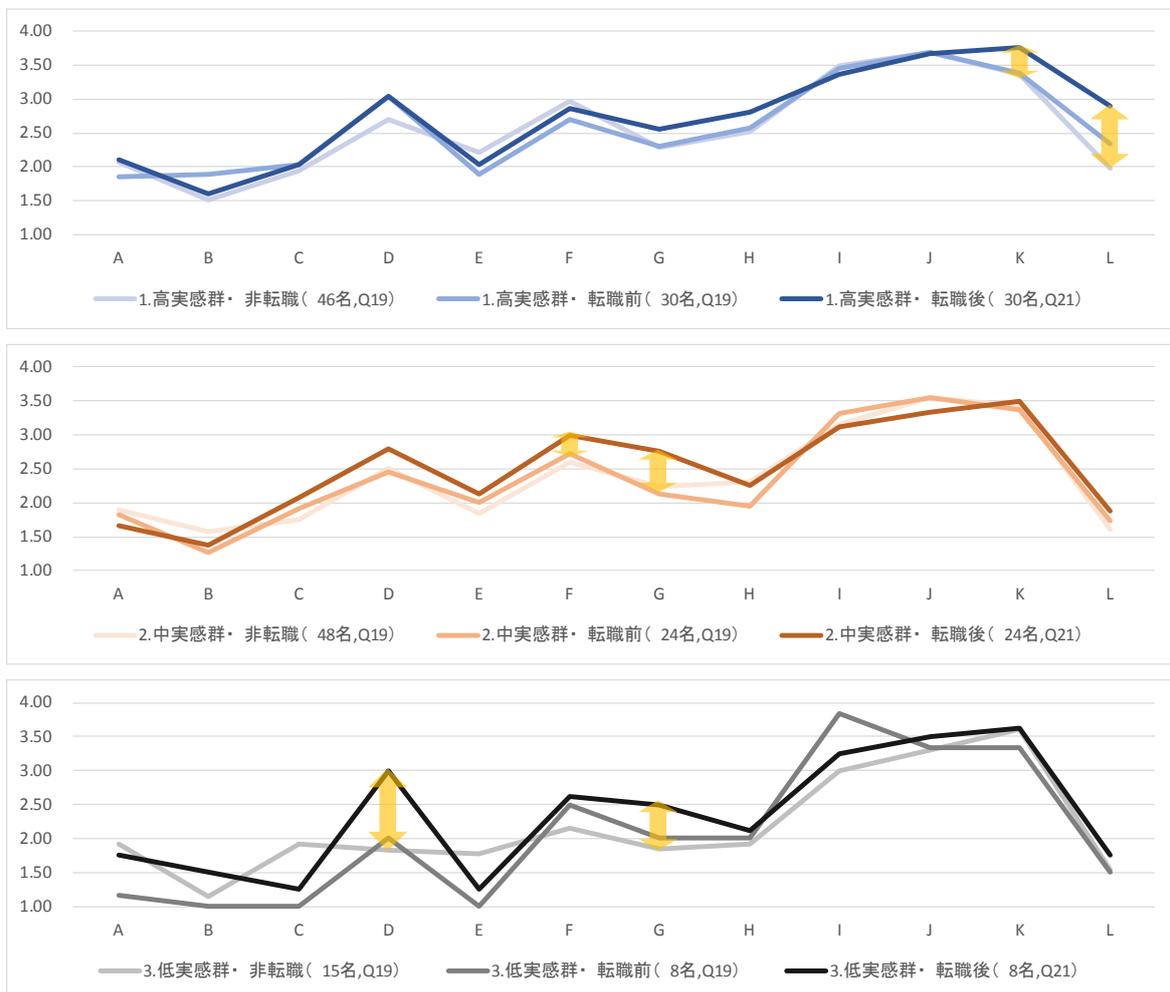
図 2-9-3 は、転職しなかった卒業生の Q19、転職を経験した卒業生の Q19 と Q21 の平均値をクラスタ別
に示したグラフ群である。

高実感群においては、K.（情報機器の活用）やL.（外国語の活用）で、転職を経験した卒業生の転職
後の平均が、転職前および転職を経験していない卒業生よりも高かった。その他の項目では同程度か、
転職を経験した卒業生の平均が若干高い程度であった。高実感群では、転職後は仕事の内容面ではさほ
ど違いが見受けられないが、情報機器や外国語の活用というスキル面でより活用する職に就いている傾
向にあると思われる。このことは、転職を経験した卒業生のみに限って前後の変化を見た表 2-9-2 にも
見られる。

中実感群では、F.（専門的な知識や資格）やG.（専門的な技術や技能）で、転職を経験した卒業生の
転職後の平均が、転職前および転職を経験していない卒業生よりも高かった。中実感群では、転職を経
験した卒業生は専門性がより高い仕事に就いている傾向にあると思われ、やはり前述の転職を経験した
卒業生の前後の変化とも合致している。

低実感群では、D.（興味や夢との関わり）、G. で転職を経験した卒業生の転職後の平均が転職前および
転職を経験していない卒業生よりも高く、C.（個人的に取り組んでいたこととの関わり）やE.（家族・
親戚や友人からの勧め）では転職を経験した卒業生の方が平均が低かった。低実感群の転職を経験した
卒業生は、転職していない卒業生よりも、自分の夢や興味との関連性、仕事の専門性にウエイトをおい
た仕事を選択したが、もともと個人的な活動や周囲の勧めとは関連の低い仕事に就いていた傾向にある
と思われる。

図 2-9-3



2-10. 卒業後の生活における学習行動

本項では「Q23 あなたは、仕事や将来のキャリアのために、以下のような活動を1週間あたり平均でどのくらい行っていますか。」という設問で尋ねた、学部卒業5年後現在の学習時間について検討する。この設問では、各項目に対して、1週間あたりの学習時間を「10時間以上(4)」～「していない(0)」の5件法で尋ねており、以下図表の数値は時間数ではない。

図2-10-1および表2-10-1は、クラスタ別の各項目の回答平均値と学習の実施率を示したグラフおよび、クラスタを要因とした分散分析の結果である。全ての項目で有意差が見られ、多重比較では「A. 職場での勉強会・研修会」と「B. 職場以外での勉強会・研修会」について高、中、低実感群の順に有意な差があり、大学時代の学習時間と同様の傾向が見られた。「C. 外国語の学習」「D. 資格取得のための学習」「E. A～D以外の学習」では、中実感群と低実感群の差がなく、これらの個人的なスキルアップ等に関する学習は、高実感群のみが他2群よりも比較的行っているという結果であった。

学習している時間数は、全体的に各項目の回答値の平均が2.00未満であり、学習を行っている卒業生でも、大半は1週間あたり1～2時間にとどまると思われる。

図2-10-1

(クラスタ別の平均値 (左) と学習を行っている率 (右))

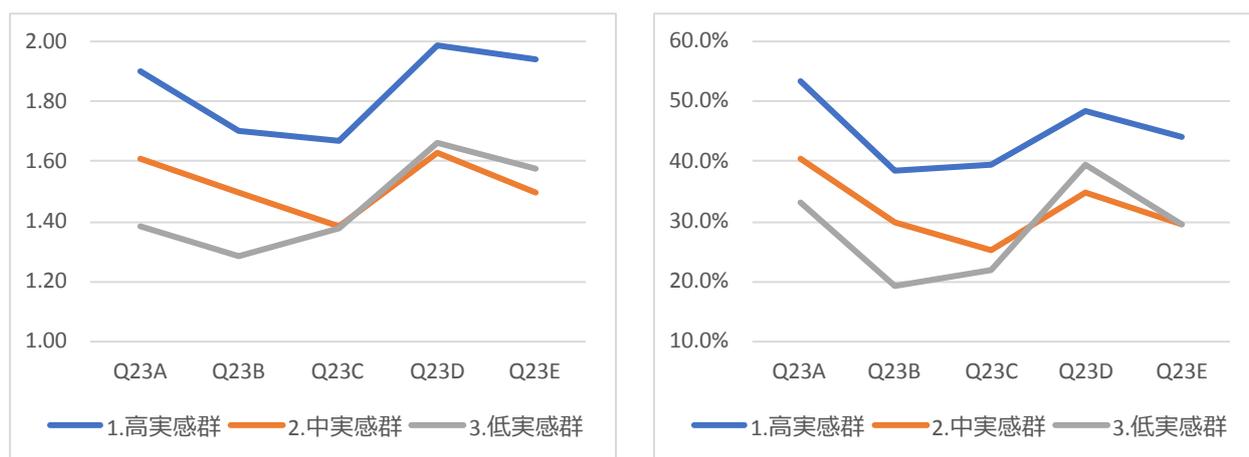


表2-10-1

項目	高実感群	中実感群	低実感群	分散分析結果 (※1)	多重比較結果 (※2)
Q23A	1.90	1.61	1.39	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q23B	1.70	1.50	1.28	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q23C	1.67	1.39	1.38	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q23D	1.99	1.63	1.66	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q23E	1.94	1.50	1.57	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群

※1 Welchの補正による ※2 Games-Howellの方法による

2-11. 現在の仕事などへの役立ち度

卒業生調査では、「Q24 大学時代の学びや経験は、現在のあなたの仕事などにどのくらい役に立っていると思いますか。」という設問で、大学の授業科目や課外活動等 13 項目の各種経験の役立ち度を尋ねている。本項では学部卒業時の学修実感と大学時代の経験の役立ち度との関連について検討する。

図 2-11-1 と表 2-11-1 に Q24 の各項目に対する回答のクラスター別平均値と、クラスターを要因とした分散分析の結果を示す。これらを見ると「G. 資格課程の科目」以外の授業科目関連の項目 (A. ~H.) では、高実感群 > 中実感群 > 低実感群の順に有意な差が見受けられ、高実感群ほど役に立っている実感が高いことがわかる。G. も中実感群と低実感群の差は有意でないが、この 2 群と高実感群の間の差は有意である。その他の活動 (I. ~M.) の項目では「I. 課外活動 (部活動・サークル活動等を含む)」と「M. インターンシップ」で差が有意であり、高実感群がその他の 2 群よりも高い結果であった。「J. 留学・海外研修」「K. ボランティア」「L. アルバイト」では群間に有意な差は見られなかった。

図 2-11-1

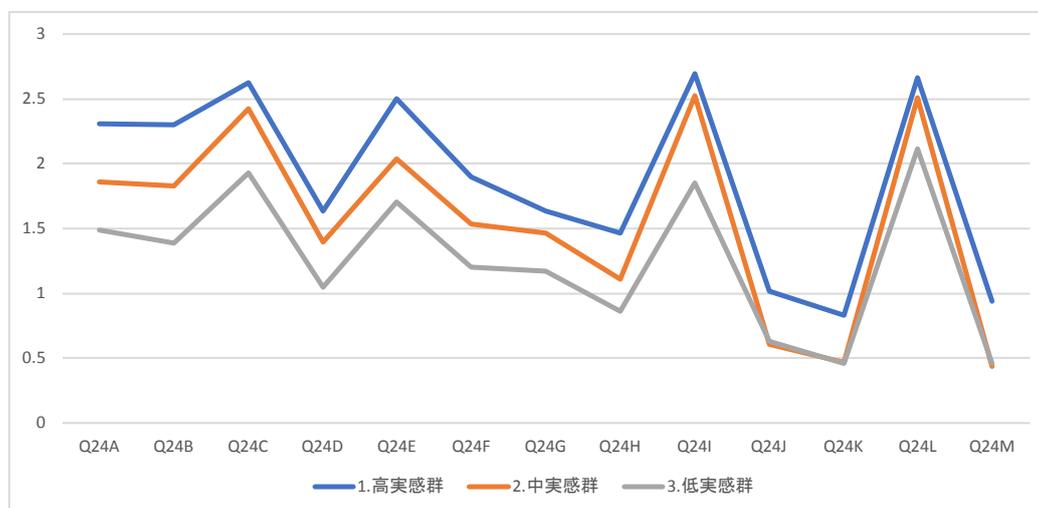


表 2-11-1

項目	高実感群	中実感群	低実感群	分散分析結果 (※1)	多重比較結果 (※2)
Q24A	2.39	1.98	1.65	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q24B	2.37	1.93	1.55	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q24C	2.64	2.50	2.04	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q24D	1.96	1.67	1.30	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q24E	2.60	2.13	1.79	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q24F	2.21	1.84	1.51	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q24G	2.27	1.96	1.62	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q24H	2.00	1.62	1.31	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q24I	2.91	2.73	2.13	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q24J	2.96	2.17	1.69	ns	—
Q24K	2.63	1.82	1.33	ns	—
Q24L	2.91	2.75	2.47	ns	—
Q24M	2.67	1.81	1.33	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群

※1 Welchの補正による ※2 Games-Howellの方法による

この設問では、「経験しなかった(0)」という回答値が含まれるため、前頁の比較には経験の有無も影響している。経験者に限った役立ち度を検討するために「0」以外の回答のみ（経験者のみ）の平均値を算出し、クラス内の順位を表 2-11-2 にまとめた（カッコ内は群内の経験者の割合）。各群・各項目により経験者数が異なるため注意は必要だが、高実感群においては「J. 留学・海外研修」が1位となり、留学・海外研修をした卒業生はその経験が役立っていると実感していることがわかる。「I. 課外活動」や「L. アルバイト」は、どの群でも上位に入った。中実感群と低実感群の順位の傾向はほとんど違いがないが、高実感群においては「K. ボランティア」や「M. インターンシップ」が他2群と比較して上位にきており、高実感群ではこれらの経験に対する評価が卒業後も高いことがうかがえる。

表 2-11-2

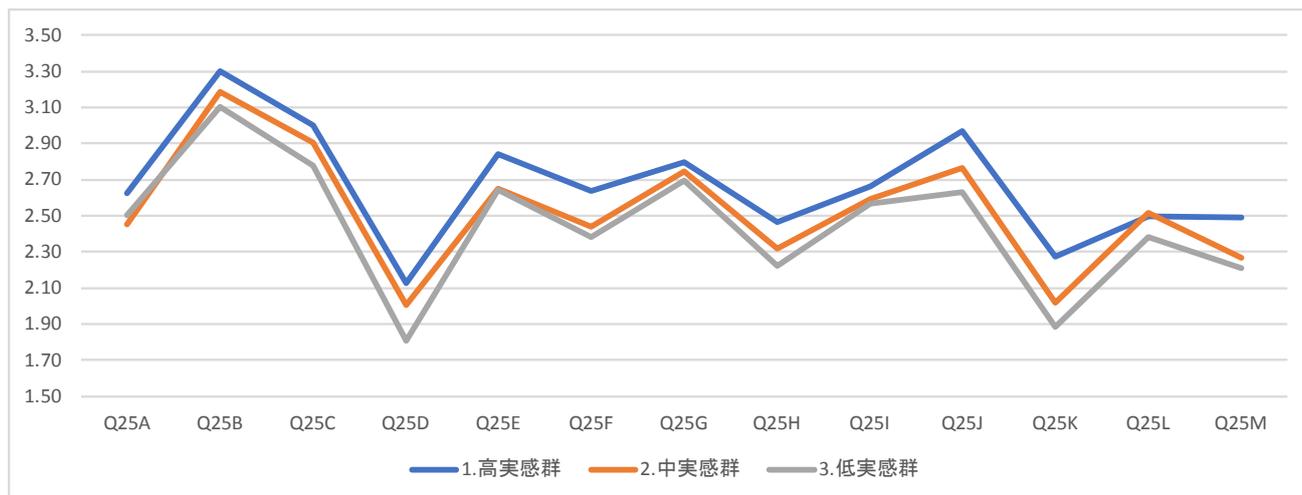
順位	1.高実感群	2.中実感群	3.低実感群
1	J. 留学・海外研修(12.4%)	L. アルバイト(30.1%)	L. アルバイト(27.5%)
2	I. 課外活動(部活動・サークル活動等を含む)(91.8%)	I. 課外活動(部活動・サークル活動等を含む)(91.3%)	I. 課外活動(部活動・サークル活動等を含む)(87.2%)
3	L. アルバイト(32.7%)	C. 情報(処理) 科目(95.7%)	C. 情報(処理) 科目(94.5%)
4	M. インターンシップ(12.6%)	J. 留学・海外研修(9.2%)	E. 自学科の専門科目(95.4%)
5	C. 情報(処理) 科目(98.4%)	E. 自学科の専門科目(94.1%)	J. 留学・海外研修(11.9%)
6	K. ボランティア(11.3%)	A. 基礎教養科目(キャリアデザイン関係を除く)(92.9%)	A. 基礎教養科目(キャリアデザイン関係を除く)(89.0%)
7	E. 自学科の専門科目(95.3%)	G. 資格課程の科目(74.0%)	G. 資格課程の科目(72.5%)
8	A. 基礎教養科目(キャリアデザイン関係を除く)(95.9%)	B. 外国語科目(93.9%)	B. 外国語科目(89.0%)
9	B. 外国語科目(96.2%)	F. 他学科の専門科目(82.7%)	F. 他学科の専門科目(79.8%)
10	G. 資格課程の科目(71.2%)	K. ボランティア(8.4%)	K. ボランティア(11.0%)
11	F. 他学科の専門科目(84.6%)	M. インターンシップ(7.9%)	M. インターンシップ(11.0%)
12	H. キャリアデザイン関係の科目(72.5%)	D. スポーツ・健康科学科目(82.4%)	H. キャリアデザイン関係の科目(65.1%)
13	D. スポーツ・健康科学科目(82.4%)	H. キャリアデザイン関係の科目(67.6%)	D. スポーツ・健康科学科目(80.7%)

2-12. 大学時代の学びや経験の不足への後悔度

卒業生調査では、「Q25 大学時代を振り返って、もっと熱心に学習や経験しておけばよかったと思うことはありますか。」という設問で、大学時代の学びやその他の経験の不足に対する後悔を尋ねている。この設問における各項目は授業科目等に制限せず、例えば「外国語科目」ではなく「外国語」という形で、内容・分野を示して訊いている。各項目に対する回答のクラスター別平均値を図 2-12-1 に示す。

クラスターを要因とした分散分析の結果、「J. 留学・海外研修」のみ有意な差が見られ、高実感群が他 2 群よりも有意に高くもっと経験しておけばよかったと感じていた。

図 2-12-1



また、クラスター内の平均値の順位（表 2-12-1）を見ると、どのクラスターも外国語の学習に対する後悔度が高かった。上位に入る項目、下位に入る項目ともどのクラスターも同様の傾向で、こういった内容の学習や経験の不足を後悔しているか、という点では学部卒業時の学修実感の高低による違いはなかったと言える。

表 2-12-1

順位	1.高実感群	2.中実感群	3.低実感群
1	B. 外国語	B. 外国語	B. 外国語
2	C. 情報(処理)	C. 情報(処理)	C. 情報(処理)
3	J. 留学・海外研修	J. 留学・海外研修	G. 資格課程の学習
4	E. 自学科の専門分野	G. 資格課程の学習	E. 自学科の専門分野
5	G. 資格課程の学習	E. 自学科の専門分野	J. 留学・海外研修
6	I. 課外活動(部活動・サークル活動等を含む)	I. 課外活動(部活動・サークル活動等を含む)	I. 課外活動(部活動・サークル活動等を含む)
7	F. 他学科の専門分野	L. アルバイト	A. 基礎教養に関する学習(キャリアデザイン関係を除く)
8	A. 基礎教養に関する学習(キャリアデザイン関係を除く)	A. 基礎教養に関する学習(キャリアデザイン関係を除く)	L. アルバイト
9	L. アルバイト	F. 他学科の専門分野	F. 他学科の専門分野
10	M. インターンシップ	H. キャリアデザイン関係の学習	H. キャリアデザイン関係の学習
11	H. キャリアデザイン関係の学習	M. インターンシップ	M. インターンシップ
12	K. ボランティア	K. ボランティア	K. ボランティア
13	D. スポーツ・健康科学	D. スポーツ・健康科学	D. スポーツ・健康科学

2-13. 現在の仕事への満足度

卒業生調査では、「Q26 あなたは、現在の仕事についてどの程度満足していますか。」という設問で、現在の仕事への満足度を尋ねている。本項では、学部卒業時の学修実感と現在の仕事の満足度に関連があるかを検討する。

図 2-13-1 と表 2-13-1 に、Q26 の各項目に対する回答のクラスター別平均値と、クラスターを要因とした分散分析の結果を示している。結果として、有意な差が見られたのは「A. 仕事の内容」、「B. 給与や職位・昇進などの処遇」、「C. 上司との人間関係」、「F. 仕事を通じて成長できること」で、高実感群が他 2 群よりも比較的高い満足感を得ていた。「D. 同僚・後輩との人間関係」「E. ワークライフバランス」では有意な差は見られなかったが、どのクラスターでも 3.00 に近い平均値であるため、これらはどの群でもある程度の満足を得られていると見てよいだろう。

図 2-13-1

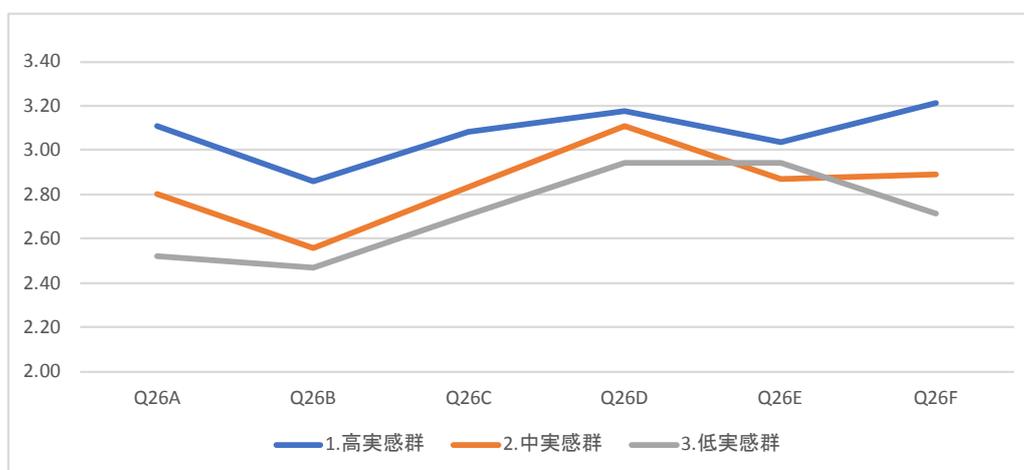


表 2-13-1

項目	高実感群	中実感群	低実感群	分散分析結果 (※1)	多重比較結果 (※2)
Q26A	3.11	2.80	2.52	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q26B	2.86	2.56	2.47	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q26C	3.08	2.83	2.71	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q26D	3.18	3.11	2.94	ns	—
Q26E	3.04	2.87	2.94	ns	—
Q26F	3.21	2.89	2.72	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群

※1 Welchの補正による ※2 Games-Howellの方法による

クラス内の平均値の順位（表 2-13-2）を見ると、中実感群・低実感群で「仕事を通じた成長」と「ワークライフバランス」が入れ替わる他は同じ順位関係であった。「同僚・後輩との人間関係」や「仕事を通じた成長」はどの群でも上位に入るが、「ワークライフバランス」は卒業時の学修実感が低い者ほど、他の項目と比較して相対的に満足度が上がる傾向にあると見受けられる。

表 2-13-2

順位	1.高実感群	2.中実感群	3.低実感群
1	F. 仕事を通じて成長できること	D. 同僚・後輩との人間関係	D. 同僚・後輩との人間関係
2	D. 同僚・後輩との人間関係	F. 仕事を通じて成長できること	E. ワークライフバランス
3	A. 仕事の内容	E. ワークライフバランス	F. 仕事を通じて成長できること
4	C. 上司との人間関係	C. 上司との人間関係	C. 上司との人間関係
5	E. ワークライフバランス	A. 仕事の内容	A. 仕事の内容
6	B. 給与や職位・昇進などの処遇	B. 給与や職位・昇進などの処遇	B. 給与や職位・昇進などの処遇

2-14. 学部卒業後5年経過時点の能力実感

卒業生調査では、「Q27 現在、あなたは、以下に示すような知識・能力をどのくらい身につけることができていると思いますか。」という設問で、現在の能力の実感を尋ねている。項目は、Q16 で尋ねた学部卒業時の学修実感17項目と同様である。

図2-14-1と表2-14-1に、Q27の各項目に対する回答のクラスター別平均値と、クラスターを要因とした分散分析の結果を示している。分散分析の結果は、Q16(学部卒業時)と同様に全ての項目で有意であった。多重比較の結果は、「C. 現在の職業に関連する知識や技能」では高実感群が他2群よりも有意に高く、その他の全ての項目で、高実感群>中実感群>低実感群の順に有意な差が見られた。したがって、卒業後5年が経過した時点でも、能力の身につけ実感には差があることがうかがえる。

図 2-14-1

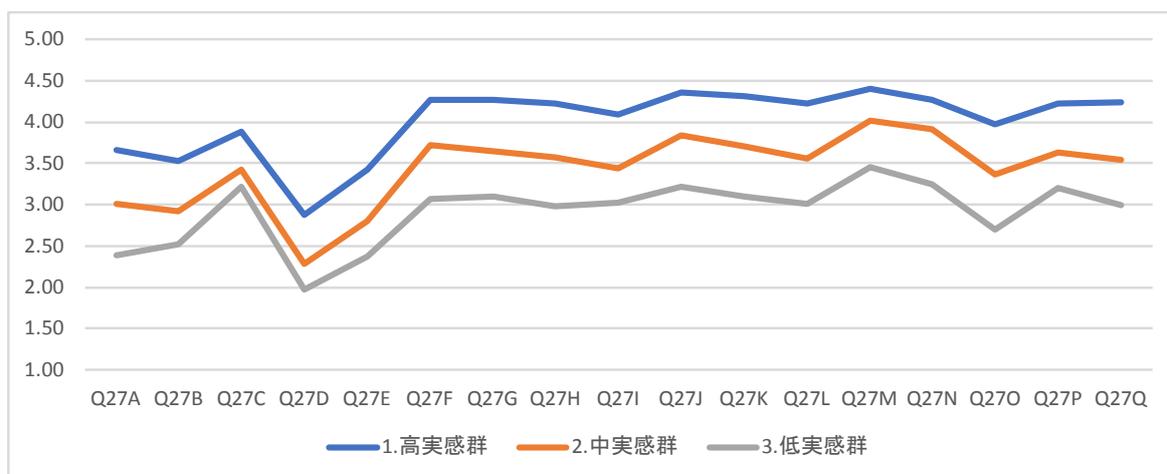


表 2-14-1

項目	1.高実感群	2.中実感群	3.低実感群	分散分析結果 (※1)	多重比較結果 (※2)
Q27A	3.66	3.02	2.39	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27B	3.53	2.93	2.51	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27C	3.88	3.42	3.21	p<.01	高実感群 > 中実感群, 低実感群
Q27D	2.87	2.28	1.97	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27E	3.42	2.80	2.37	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27F	4.27	3.72	3.06	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27G	4.27	3.65	3.10	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27H	4.22	3.57	2.97	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27I	4.08	3.44	3.03	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27J	4.36	3.84	3.21	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27K	4.30	3.70	3.09	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27L	4.23	3.55	3.01	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27M	4.40	4.02	3.46	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27N	4.26	3.91	3.24	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27O	3.96	3.37	2.70	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27P	4.22	3.63	3.20	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群
Q27Q	4.23	3.55	2.99	p<.01	高実感群 > 中実感群 > 低実感群

※1 Welchの補正による ※2 Games-Howellの方法による

次に、Q27 と Q16 は同様の項目を用いていることを利用して、Q27 と Q16 への回答値の差のクラスター別平均値を示したものが、図 2-14-2 と表 2-14-2 である。また、各群の学部卒業時と卒業 5 年後現在のグラフを合わせて示したものが、図 2-14-3（次ページ）である。

これらを見ると、「A. 大学で専攻した分野の知識」、「B. 大学で専攻した分野以外の幅広い知識」ではマイナスも見られるが、その他の項目では、低実感群 > 中実感群 > 高実感群の順に伸びが大きかった。

高実感群では、D. から Q. までどの項目も伸びはほぼ 0.1 以下に収まっており、ほとんど変化が見られないが、低実感群では 0.5 以上の伸びが見られる項目が多くあり、卒業後 5 年の間にこういった能力を伸ばしてきたと自覚していることがわかる。「C. 現在の職業に関連する知識や技能」はどの群においても大きな変化が見られ、最も伸びが小さい高実感群で 0.5、伸びが大きい低実感群では 1.3 と、現在の職業に関するコアスキルは主に就業後に身につけていることがわかる。

こういったことから、大学での専門分野の知識やそれ以外の幅広い知識は、卒業後どの群でも伸ばす機会は少ないが、その他の能力は学生時代にあまり身につけられなかったと感じる者ほど、卒業後に伸ばさせていっている傾向にあると考えられる。

本項をまとめると、学部卒業時点での学修実感の高低の順は、卒業後 5 年が経過しても維持される傾向にあるが、学部卒業時の学修実感が低い者ほど 5 年後の身につき実感は大きく高まり、高低の差は小さくなっていく。これは、本調査で尋ねた各項目の能力が卒業後の諸経験の中で一定レベルまで養われていく、つまり社会人生活で広く必要となるものであることの一つの現れであると言えよう。

図 2-14-2

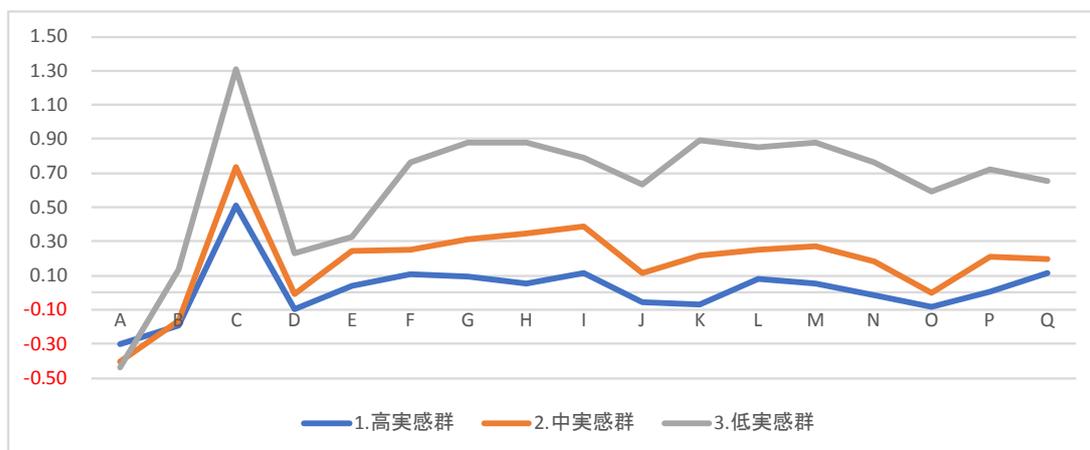
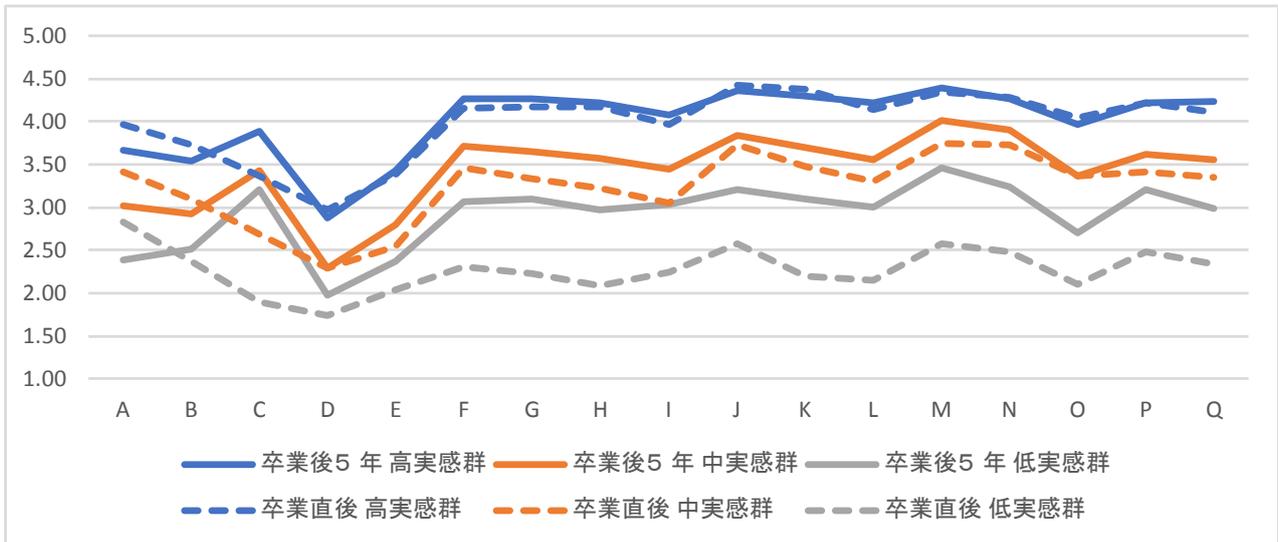


表 2-14-2

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q
1. 高実感群	-0.30	-0.19	0.51	-0.10	0.04	0.11	0.09	0.05	0.11	-0.05	-0.07	0.08	0.05	-0.01	-0.09	0.01	0.12
2. 中実感群	-0.40	-0.16	0.73	-0.01	0.25	0.25	0.31	0.34	0.39	0.11	0.22	0.25	0.28	0.18	0.00	0.21	0.20
3. 低実感群	-0.44	0.14	1.31	0.23	0.33	0.76	0.88	0.88	0.79	0.63	0.89	0.85	0.88	0.76	0.60	0.72	0.65

図 2-14-3

(実線：卒業5年後現在、点線：学部卒業時)



2-15. 学部卒業時の学修実感を起点にした本分析のまとめ

本章における分析をまとめると以下のことがわかったと言える。

1. 情報を収集・整理する力、他者の話を聴く力、他者と協力する力は本学において学修した実感を
得やすい能力である可能性がある。
2. 学部卒業時に高い学修実感を得ていた卒業生は、学生時代に、
 - ・学生時代の学習時間が長く、授業やその他の学習への意欲も高かった。
 - ・部活動と就職希望の業界と関係のないアルバイト以外の課外活動への意欲が高かった。
 - ・教員や友人との人間関係、大学の授業、窓口サービス、大学生活全般への満足度が高かった。
3. 学部卒業時に高い学修実感を得ていた卒業生は、卒業後の仕事や生活に関して、
 - ・卒業直後に自分の夢や興味との関わりが深いと感じる仕事に就いていた。
 - ・学生時代の学びが現在の仕事へ役に立っていると感じていた。
 - ・卒業5年後現在の仕事の内容、給与や処遇、上司との人間関係、仕事を通じた成長に満足して
いた。
4. 学生時代の学びや経験の不足に対する後悔度は、学修実感の高低に関わらず、同程度である。
5. 能力実感は、卒業後5年経過時点でも学部卒業時の高低の順が保たれるが、卒業時の学修実感が
低かった卒業生ほど大きく伸長して、高低の差は縮まっている。

付録表 卒業直後と卒業5年後の能力学修実感に関する学部別の相関係数
(赤色は相関係数の値が0.40以上であることを示す)

法学部

卒業直後

	Q16A	Q16B	Q16C	Q16D	Q16E	Q16F	Q16G	Q16H	Q16I	Q16J	Q16K	Q16L	Q16M	Q16N	Q16O	Q16P	Q16Q
Q16A	—																
Q16B	0.54	—															
Q16C	0.28	0.29	—														
Q16D	0.21	0.39	0.23	—													
Q16E	0.22	0.44	0.19	0.72	—												
Q16F	0.26	0.28	0.28	0.18	0.12	—											
Q16G	0.44	0.45	0.32	0.29	0.28	0.45	—										
Q16H	0.35	0.29	0.30	0.22	0.21	0.50	0.73	—									
Q16I	0.32	0.38	0.31	0.30	0.33	0.27	0.55	0.57	—								
Q16J	0.37	0.40	0.32	0.17	0.24	0.46	0.61	0.61	0.57	—							
Q16K	0.33	0.40	0.30	0.24	0.26	0.49	0.53	0.61	0.60	0.77	—						
Q16L	0.34	0.40	0.33	0.30	0.28	0.43	0.54	0.61	0.63	0.73	0.83	—					
Q16M	0.17	0.26	0.14	0.21	0.20	0.46	0.37	0.50	0.39	0.50	0.55	0.52	—				
Q16N	0.16	0.27	0.23	0.10	0.08	0.55	0.40	0.46	0.23	0.44	0.48	0.39	0.67	—			
Q16O	0.15	0.14	0.22	0.09	0.10	0.43	0.38	0.50	0.29	0.48	0.50	0.45	0.53	0.74	—		
Q16P	0.22	0.29	0.33	0.15	0.13	0.45	0.47	0.58	0.45	0.55	0.57	0.59	0.53	0.58	0.57	—	
Q16Q	0.23	0.33	0.30	0.30	0.29	0.46	0.49	0.55	0.45	0.53	0.59	0.61	0.59	0.54	0.50	0.61	—

卒業5年後

	Q27A	Q27B	Q27C	Q27D	Q27E	Q27F	Q27G	Q27H	Q27I	Q27J	Q27K	Q27L	Q27M	Q27N	Q27O	Q27P	Q27Q
Q27A	—																
Q27B	0.55	—															
Q27C	0.32	0.36	—														
Q27D	0.32	0.34	0.21	—													
Q27E	0.27	0.39	0.22	0.60	—												
Q27F	0.19	0.28	0.42	0.19	0.22	—											
Q27G	0.22	0.29	0.30	0.23	0.28	0.67	—										
Q27H	0.16	0.24	0.41	0.26	0.29	0.68	0.76	—									
Q27I	0.35	0.40	0.29	0.30	0.35	0.38	0.56	0.57	—								
Q27J	0.32	0.42	0.48	0.29	0.28	0.65	0.61	0.66	0.62	—							
Q27K	0.32	0.44	0.49	0.27	0.25	0.61	0.60	0.62	0.64	0.84	—						
Q27L	0.34	0.47	0.47	0.32	0.28	0.61	0.58	0.67	0.63	0.75	0.82	—					
Q27M	0.14	0.24	0.36	0.12	0.21	0.67	0.53	0.59	0.27	0.58	0.57	0.53	—				
Q27N	0.10	0.20	0.37	0.12	0.22	0.62	0.49	0.57	0.26	0.50	0.51	0.52	0.79	—			
Q27O	0.16	0.21	0.39	0.26	0.27	0.50	0.42	0.55	0.33	0.51	0.49	0.59	0.54	0.66	—		
Q27P	0.24	0.35	0.33	0.27	0.26	0.63	0.54	0.55	0.50	0.63	0.62	0.66	0.56	0.51	0.59	—	
Q27Q	0.28	0.36	0.36	0.35	0.33	0.57	0.51	0.52	0.48	0.58	0.57	0.64	0.57	0.54	0.61	0.75	—

経済学部

卒業直後

	Q16A	Q16B	Q16C	Q16D	Q16E	Q16F	Q16G	Q16H	Q16I	Q16J	Q16K	Q16L	Q16M	Q16N	Q16O	Q16P	Q16Q
Q16A	—																
Q16B	0.43	—															
Q16C	0.41	0.45	—														
Q16D	-0.02	0.12	0.05	—													
Q16E	0.01	0.27	0.13	0.72	—												
Q16F	0.35	0.33	0.26	0.08	0.07	—											
Q16G	0.38	0.40	0.27	0.09	0.21	0.49	—										
Q16H	0.27	0.37	0.28	0.06	0.13	0.53	0.63	—									
Q16I	0.39	0.40	0.25	0.08	0.22	0.34	0.50	0.47	—								
Q16J	0.32	0.43	0.30	0.05	0.24	0.42	0.59	0.58	0.51	—							
Q16K	0.32	0.40	0.28	0.06	0.19	0.47	0.62	0.65	0.58	0.75	—						
Q16L	0.31	0.34	0.28	0.03	0.14	0.42	0.57	0.58	0.54	0.67	0.82	—					
Q16M	0.19	0.24	0.03	0.09	0.11	0.37	0.38	0.41	0.41	0.47	0.44	0.41	—				
Q16N	0.22	0.20	0.12	0.04	0.07	0.41	0.29	0.44	0.31	0.36	0.48	0.39	0.58	—			
Q16O	0.20	0.23	0.16	0.06	0.10	0.35	0.27	0.41	0.30	0.28	0.44	0.39	0.29	0.62	—		
Q16P	0.25	0.32	0.31	0.06	0.16	0.37	0.38	0.42	0.36	0.44	0.44	0.43	0.33	0.45	0.49	—	
Q16Q	0.14	0.29	0.20	0.11	0.20	0.27	0.36	0.36	0.32	0.42	0.49	0.50	0.38	0.38	0.48	0.56	—

卒業5年後

	Q27A	Q27B	Q27C	Q27D	Q27E	Q27F	Q27G	Q27H	Q27I	Q27J	Q27K	Q27L	Q27M	Q27N	Q27O	Q27P	Q27Q
Q27A	—																
Q27B	0.54	—															
Q27C	0.27	0.37	—														
Q27D	0.16	0.28	0.05	—													
Q27E	0.18	0.35	0.11	0.73	—												
Q27F	0.17	0.24	0.40	0.17	0.24	—											
Q27G	0.15	0.26	0.26	0.19	0.23	0.56	—										
Q27H	0.19	0.29	0.35	0.18	0.25	0.57	0.67	—									
Q27I	0.20	0.30	0.31	0.16	0.30	0.42	0.55	0.59	—								
Q27J	0.25	0.35	0.38	0.08	0.17	0.57	0.58	0.65	0.60	—							
Q27K	0.31	0.30	0.30	0.07	0.17	0.56	0.62	0.61	0.65	0.80	—						
Q27L	0.19	0.28	0.30	0.15	0.27	0.55	0.65	0.67	0.63	0.71	0.83	—					
Q27M	0.14	0.18	0.31	0.05	0.14	0.47	0.42	0.53	0.43	0.53	0.51	0.53	—				
Q27N	0.14	0.13	0.22	0.04	0.18	0.43	0.38	0.46	0.28	0.43	0.48	0.50	0.62	—			
Q27O	0.13	0.19	0.20	0.05	0.18	0.48	0.48	0.47	0.42	0.41	0.48	0.56	0.34	0.61	—		
Q27P	0.09	0.19	0.27	0.00	0.13	0.45	0.46	0.47	0.46	0.50	0.52	0.57	0.47	0.47	0.60	—	
Q27Q	0.15	0.27	0.17	0.21	0.31	0.43	0.52	0.47	0.57	0.50	0.62	0.67	0.47	0.45	0.52	0.69	—

文学部

卒業直後

	Q16A	Q16B	Q16C	Q16D	Q16E	Q16F	Q16G	Q16H	Q16I	Q16J	Q16K	Q16L	Q16M	Q16N	Q16O	Q16P	Q16Q
Q16A	—																
Q16B	0.45	—															
Q16C	0.33	0.35	—														
Q16D	0.32	0.31	0.30	—													
Q16E	0.26	0.38	0.22	0.64	—												
Q16F	0.36	0.25	0.27	0.22	0.25	—											
Q16G	0.46	0.37	0.27	0.24	0.17	0.49	—										
Q16H	0.41	0.37	0.31	0.26	0.20	0.46	0.73	—									
Q16I	0.33	0.45	0.31	0.27	0.31	0.28	0.45	0.46	—								
Q16J	0.47	0.43	0.27	0.18	0.15	0.42	0.56	0.48	0.44	—							
Q16K	0.42	0.46	0.34	0.22	0.21	0.46	0.58	0.54	0.59	0.73	—						
Q16L	0.39	0.45	0.33	0.23	0.21	0.48	0.56	0.57	0.53	0.63	0.77	—					
Q16M	0.39	0.26	0.25	0.20	0.23	0.51	0.50	0.40	0.32	0.47	0.45	0.42	—				
Q16N	0.24	0.28	0.22	0.16	0.24	0.41	0.33	0.34	0.16	0.40	0.34	0.37	0.51	—			
Q16O	0.16	0.29	0.29	0.18	0.15	0.35	0.26	0.33	0.25	0.31	0.37	0.41	0.32	0.65	—		
Q16P	0.30	0.38	0.32	0.24	0.24	0.40	0.42	0.48	0.37	0.43	0.53	0.49	0.42	0.44	0.47	—	
Q16Q	0.27	0.41	0.32	0.30	0.35	0.30	0.38	0.47	0.45	0.44	0.52	0.49	0.39	0.42	0.44	0.60	—

卒業5年後

	Q27A	Q27B	Q27C	Q27D	Q27E	Q27F	Q27G	Q27H	Q27I	Q27J	Q27K	Q27L	Q27M	Q27N	Q27O	Q27P	Q27Q
Q27A	—																
Q27B	0.52	—															
Q27C	0.33	0.37	—														
Q27D	0.27	0.29	0.17	—													
Q27E	0.24	0.36	0.27	0.61	—												
Q27F	0.23	0.21	0.28	0.25	0.33	—											
Q27G	0.39	0.36	0.35	0.21	0.29	0.49	—										
Q27H	0.20	0.32	0.36	0.21	0.27	0.45	0.63	—									
Q27I	0.29	0.38	0.31	0.22	0.32	0.31	0.47	0.44	—								
Q27J	0.36	0.31	0.34	0.16	0.23	0.49	0.61	0.49	0.46	—							
Q27K	0.25	0.31	0.34	0.19	0.27	0.55	0.56	0.51	0.48	0.72	—						
Q27L	0.29	0.34	0.30	0.21	0.31	0.51	0.53	0.49	0.49	0.61	0.76	—					
Q27M	0.24	0.26	0.31	0.19	0.26	0.50	0.55	0.50	0.33	0.58	0.56	0.47	—				
Q27N	0.19	0.22	0.29	0.19	0.22	0.48	0.48	0.48	0.29	0.51	0.49	0.42	0.67	—			
Q27O	0.27	0.20	0.22	0.21	0.17	0.42	0.37	0.45	0.36	0.41	0.42	0.50	0.37	0.56	—		
Q27P	0.31	0.35	0.28	0.28	0.28	0.44	0.49	0.54	0.51	0.50	0.53	0.49	0.51	0.53	0.43	—	
Q27Q	0.30	0.37	0.24	0.27	0.38	0.42	0.47	0.53	0.57	0.47	0.49	0.52	0.53	0.50	0.46	0.72	—

理学部

卒業直後

	Q16A	Q16B	Q16C	Q16D	Q16E	Q16F	Q16G	Q16H	Q16I	Q16J	Q16K	Q16L	Q16M	Q16N	Q16O	Q16P	Q16Q
Q16A	—																
Q16B	0.12	—															
Q16C	0.08	0.66	—														
Q16D	0.11	0.34	0.36	—													
Q16E	0.15	0.32	0.34	0.48	—												
Q16F	-0.07	0.13	0.03	0.31	0.11	—											
Q16G	0.18	0.16	0.20	0.47	0.12	0.37	—										
Q16H	0.17	0.19	0.17	0.30	0.12	0.33	0.77	—									
Q16I	-0.05	0.24	0.16	0.12	0.21	0.37	0.27	0.31	—								
Q16J	-0.03	0.27	0.23	0.23	0.04	0.41	0.34	0.32	0.16	—							
Q16K	0.12	0.19	0.09	0.29	-0.01	0.54	0.41	0.30	0.19	0.72	—						
Q16L	0.00	0.19	0.14	0.23	0.02	0.50	0.32	0.30	0.24	0.70	0.82	—					
Q16M	-0.06	0.29	0.28	0.29	0.09	0.48	0.33	0.38	0.24	0.43	0.42	0.37	—				
Q16N	-0.11	0.35	0.32	0.20	0.14	0.51	0.25	0.23	0.16	0.50	0.41	0.40	0.66	—			
Q16O	0.13	0.09	0.09	0.12	0.12	0.42	0.10	0.09	0.06	0.43	0.38	0.44	0.42	0.57	—		
Q16P	0.02	0.26	0.20	0.20	0.11	0.22	-0.01	0.02	0.14	0.43	0.38	0.47	0.33	0.45	0.62	—	
Q16Q	-0.10	0.29	0.13	0.39	0.33	0.38	0.23	0.22	0.21	0.26	0.26	0.23	0.44	0.35	0.37	0.41	—

卒業5年後

	Q27A	Q27B	Q27C	Q27D	Q27E	Q27F	Q27G	Q27H	Q27I	Q27J	Q27K	Q27L	Q27M	Q27N	Q27O	Q27P	Q27Q
Q27A	—																
Q27B	0.40	—															
Q27C	0.08	0.37	—														
Q27D	0.19	0.21	0.02	—													
Q27E	0.02	0.32	0.22	0.43	—												
Q27F	0.26	0.41	0.32	0.03	0.02	—											
Q27G	0.23	0.16	0.18	0.17	0.14	0.51	—										
Q27H	0.29	0.30	0.16	0.15	0.18	0.48	0.67	—									
Q27I	-0.16	0.21	0.37	0.08	0.04	0.25	0.27	0.30	—								
Q27J	0.08	0.22	0.48	-0.05	0.05	0.53	0.50	0.47	0.50	—							
Q27K	0.10	0.30	0.35	0.04	0.04	0.64	0.54	0.55	0.49	0.64	—						
Q27L	0.13	0.36	0.43	0.12	0.13	0.52	0.47	0.52	0.56	0.64	0.67	—					
Q27M	0.07	0.17	0.21	-0.13	0.09	0.17	0.29	0.36	0.21	0.27	0.33	0.35	—				
Q27N	0.21	0.31	0.31	0.04	0.04	0.49	0.31	0.37	0.28	0.38	0.55	0.31	0.61	—			
Q27O	-0.01	0.23	0.26	0.08	0.17	0.40	0.21	0.36	0.34	0.29	0.51	0.49	0.36	0.51	—		
Q27P	0.02	0.37	0.38	0.02	0.11	0.43	0.32	0.36	0.32	0.38	0.46	0.62	0.31	0.29	0.44	—	
Q27Q	-0.08	0.26	0.36	0.07	0.22	0.43	0.33	0.40	0.36	0.42	0.57	0.54	0.42	0.49	0.58	0.67	—

第3章

計量テキスト分析を利用した自由記述回答の整理と概観

1. 整理の目的

卒業生調査では、Q28「あなたが本学での学びから得た知識や技能などは、卒業後、どのような形で活かされていますか。すでにお答えいただいたこと以外で、思いあたることがあればご自由にお書きください。」として、過年度実施の2回と同様に自由記述欄を設けている。本章では、この設問への回答から、本学での学びが卒業後にどのように活用されているかを検討することを目的とする。

2. 整理の方法

整理にあたっては、昨年度の集計・分析報告書と同様に「テキスト型データを統計的に分析するためのソフトウェア」であるKH Coderを用いながら、コメント1つ1つについてソフトウェアと人間による確認を両方行うことで、網羅性を担保しつつ意味内容の確認まで行った。(方法の詳細は、章末「自由記述回答内容の整理手順」を参照)

3. 結果

3-1. コーディングの実施と結果

平成30年度実施の本調査では、39件の自由記述回答が得られた。これらについて、昨年度の集計・分析に用いたコーディング・ルールに、本年度の回答内容に即して対象の単語を一部追加したもの(表1(次ページ))を用いて網羅的なコーディングを実施した。また、分類するコード名に、本年度の回答内容に即して新たに「IT・データサイエンス」を追加している。

このコーディングの後、分析者によるコーディング結果の確認を行った。確認の結果、コーディング・ルールの対象の単語は含まれていたが、内容がコードの定義に添わないと判断した場合はコーディングを外し、反対に対象の単語は含まれなくてもコードの定義に合致する内容であった場合はコーディングを割り振った。また、並行して、各コードについて、ポジティブな(活用できている)内容か、ネガティブな(活用できていない)内容か、その他の意見や提案であるかについて、分析者が判断を行った(表2(次ページ))。

表1 コーディング・ルール

コード名	コードの定義	対象の単語
知識	専門、一般教養かを問わず、大学で得た知識に言及した内容	知識、教養、素養、専門、専攻、講義
理解・思考力	大学での活動中に学んだものごとの理解や整理、レポート等に表現することまでの能力に言及した内容	書き方、とらえ方、論理、思考、見方、方法
態度・姿勢	大学での活動中に学んだものごとに対する態度や姿勢、価値観に関することに言及した内容	柔軟性、価値観、積極性、心掛け、目標、姿勢、考え方
対人関係スキル	大学での活動中に学んだ他者とのコミュニケーションに関するスキルに言及した内容	コミュニケーション、関わり方、プレゼンテーション、プレゼン、発表、人前、協力、対人、協調
語学	言語に関わらず、大学で学んだ外国語に言及した内容	英語、フランス語、ドイツ語、語学、外国語
IT・データサイエンス	PC関連、プログラミング、統計学などの情報処理に関するスキルに言及した内容	Word、Excel、プログラミング、HTML、情報処理、統計学
資格	在学中に取得した資格に関することに言及した内容	資格、簿記、学芸員、教員
人間関係	大学で得た人間関係に関する内容	人間関係、交友、繋がり、つながり、友人、仲間
経験	特に知識やスキル、能力等に言及せず、大学での経験そのもののみ言及した内容を含む回答	経験
その他	(上記のコーディングにかからない内容について言及している場合、筆者がコーディングを行った)	—

表2 コーディングの最終結果

	知識	理解・思考力	態度・姿勢	対人関係スキル	語学	IT・データサイエンス	資格	人間関係	経験	その他
活用している	9	7	9	11	2	5	1	4	4	0
活用していない	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他(意見・提案)	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1
合計	13	7	9	11	2	5	2	4	4	1

※ 上記のコードが何もつかなかった回答=2件

3-2. 各コードと活用のされ方について

3-1. に述べたように、コーディングの後、各々の回答がそのコードについてポジティブな内容（卒業後に活用された）かネガティブな内容（卒業後に活用されなかった）かを個別に判断した。本節では各コード別に具体的にどのような内容が含まれているかや、活用のされ方についてみていく。

「知識」コード

「知識」コードは、専門分野や基礎教養等に関わらず在学中に学んだ知識について言及している 13 件（全体の 33.3%）の回答に割り振られた。

卒業後に活かされているとする回答（9 件、「知識」コードの 69.2%）のうち、直接的に活かされている具体例としては、まず以下のように専門分野の授業での知識や卒業論文のために調べた内容がその後の生活や業務に活かされているという回答が見受けられた。

「一社会人として一般的な物事の常識や知識に加え、日本政治の歴史や仕組みだけでなく海外の政治体制を学ぶことで世界情勢などが気になるようになり選挙や政治情勢の勉強などに意欲的に取り組むようになった。」（政治学科）

「ゼミで卒業論文を書くにあたって調べたことは今の業務にも関わることもあり、生かされていると感じますし、入社試験においても大いに役立ちました。」（政治学科）

また、知識は仕事上では直接活かされていないとも、以下のように他者とコミュニケーションをとる際の教養として活かされていることも見受けられた。このようなコメントは、卒業後の生活で活用している例とみなした。

「*「教養」という点で、お客様とお話する際になどに役立っています。具体的にこの科目が！というよりは、学んだ知識全般が自分が話したりものごとを説明したりするうえでの土台となっている印象です。たまたま同じ学部出身の方がお客様としていらっしゃり、話が弾むといったこともありました。」*（日本語日本文学科）

これと同様に、自分の人生の豊かさにつながっているというコメントが見受けられ、このようなコメントも卒業後の生活に活かされている例とみなした。

「*仕事上特に活かされていると感じる時はありませんが、大学で学んだ教養は人生を奥深く素晴らしいものをしてれています。」*（史学科）

逆に、「知識」が卒業後に活用されていないというコメントは、3 件（「知識」コードの 23.1%）であった。具体的には、以下のように他の能力等と比較すると「知識」は活かしていないことを示すコメントが見受けられた。

「*通常の講義で得た知識は現在ほとんど活かせていない。演習（ゼミ）を通して習得した資料のまとめ方や情報収集の方法は社会人になり、経験の無かった仕事や調査を任せられた際に役に立っている。」*（経済学科）

「*化学の勉強そのものが直接つながることはありませんが数値を処理する能力はやくにたっています。」*（化学科）

その他、「知識」に関する意見としては、以下のように学習内容に関するコメントが見受けられた。

「経済や金融、法律など、労働や生活に必要な社会の基礎的な仕組みをもっと実務に面した形で勉強したかった。」(心理学科)

「理解・思考力」コード

「理解・思考力」コードは、ものごとに対する理解の仕方や捉え方、また論理的な思考力に関して言及している8件(全体の20.5%)の回答に割り振られ、全件が卒業後に活かされているとする回答であった。これらの回答は、以下の具体例のように、在学中の授業や演習に取り組む中で身についた理解力・思考力が、卒業後の仕事や生活において活かされているという内容であった。

「論理的思考力や批判的に物事を見る力、分析能力や自分の考えを他者に伝える力は、哲学科の授業などを通して身に付けることができた。ただ、より意欲的、積極的に学問に臨むべきだったという後悔は大いにある。」(哲学科)

「態度・姿勢」コード

「態度・姿勢」コードは、ものごとに対する態度や姿勢、また、価値観に関することに言及している8件(全体の20.5%)の回答に割り振られた。全回答が卒業後に活かされているとする内容であった。これらの回答は、以下のように、自ら学んだり挑戦したりする姿勢や、余裕を大切にすることが仕事や周囲とのコミュニケーションに役立っているという内容であった。

「わからないことに直面するたびに、勉強し解決していく姿勢を身につけたことが、仕事においても役立っている。」(法学科)

「[自発的にチャレンジすることで、自分のモノとして経験が価値を持つということ]に気づけたことは今の仕事に活かしている。困難を乗り越えるための自分なりのパターンを見つけられたということ。」(日本語日本文学科)

「学校全体がおおらかでゆとりある雰囲気であり、余裕を持つことの大切さを身に着けた。そして、この余裕さが他者にとっては心地よいのか、気軽にいろんなことを相談しやすいようであり、結果として多彩なコミュニケーションを取る下地となっているように思う。社会人始めの下っ端の時は「ハングリーさに欠ける」などと指摘を受けたこともあったが、歳をとり後輩や部下を持つにつれて、何でも気兼ねなく話せる(と相手に思ってもらえる)ことのアドバンテージを感じる方が多くなり、大いに助けられている。」(法学科)

「対人関係スキル」コード

「対人関係スキル」コードは、他者とのコミュニケーションに関するスキル等に言及している11件(全体の28.2%)の回答に割り振られた。ここでのコミュニケーションには、発表やプレゼンテーションも含まれる。全件が学んだ事柄が卒業後に活かされているとする回答で、以下のようにゼミや課外活動を

通じて身についた力が、卒業後の仕事を進めるうえで役に立っているという内容がみられた。

「レポートやゼミの演習発表などで、自分自身の意見を伝える機会が多いことは、私が窓口営業でお客様に商品を勧めたり、クレーム対応をする際に、お客様に企業としての対応を納得して頂くことに役立ちました。これは、どのような企業で働く上でも、人に物を円滑に、かつ的確に伝え、納得してもらう能力として、非常に重要であるかと思います。」(日本語日本文学科)

「現在の、変化を推進する仕事において、大学時代の、逆境のチームを束ねる経験を通して身につけた、人を介して事を成す力がベースになっていると感じます。それは、学科の組織論、リーダーシップなどの授業や本からのインプットと、部活動の主将としての振る舞いとしてアウトプットできる機会が両方あったので、理論と実践をいったりきたりすることで身に付いたと感じています。」(経営学科)

「語学」コード

「語学」コードは、言語に関わらず大学で学んだ外国語について言及している2件(全体の5.1%)の回答に割り振られた。以下のように、具体的に海外とのコミュニケーションを伴う仕事で活かされているというコメントがあった。

「英語運用能力、欧米文化、スペイン語に関する入門知識は海外事業に従事する上で役立っています。特に英語は海外支店との日常的な文書、メールのやりとりで必須となっています。またリサーチ力、課題分析力、論理的な文章表現力は幅広い日々の業務遂行に役立っています。」(英語英米文学科)

「IT・データサイエンス」コード

「IT・データサイエンス」コードは、WordやExcelの使用方法や、プログラミング、統計学について言及している5件(全体の12.8%)の回答に割り振られた。「IT・データサイエンス」については、以下のように、活用の具体的な場面まではうかがえないものの、直接的に役に立っているというコメントがあった。

「統計学、PC知識が非常に役に立っている。統計学とプログラミングは基礎科目として授業化することをお勧めします。」(心理学科)

「情報のインストラクターのアルバイトで、ExcelやWordの使い方をしっかり教わったのが仕事で本当に役に立ちました。名前を失念してしまったのですが、女性の情報の先生でした。本当に感謝しています。」(政治学科)

「資格」コード

「資格」コードは、大学の資格課程内外を問わず、在学中に取得した資格について言及している2件(全体の5.1%)の回答に割り振られた。このうち1件は以下のように在学中に取得した資格が卒業後の仕事やその後にも影響を与えているというコメントであった。

「初めは単位のために取得した簿記検定が経理の仕事に繋がり、現在は税理士を目指し試験勉強の日々を過ごすことに繋がっています。」(経済学科)

もう1件は、在学中に資格を取得していればよかったという後悔をうかがわせるコメントであった。
「卒業後にFPや簿記の知識の大切さを知った。」(心理学科)

「人間関係」コード

「人間関係」コードは、ゼミ、部活動、サークル活動などで培われた人間関係について言及している4件(全体の10.3%)の回答に割り振られた。全件が、大学時代の人間関係が卒業後に活かされており、以下のように就職先の会社で学習院大学の先輩や後輩がおり相談がしやすい、卒業後の生活の心の支えとなっている、このような人間関係が財産になっているといったものであった。

「大学時代に築いた交友関係が現在も活かされていると感じます。」(経営学科)

「外国人留学生出身です。大学で学んだ専門知識と関わりのない仕事をしていますが、学習院というバックグラウンドと身につけた教養、そして学習院で作った人脈(面接対策セミナーのOBOG含め)は一生ものです。」(日本語日本文学科)

「経験」コード

「経験」コードは、特定の知識、能力、スキル等に言及してはいないが、大学時代に経験したことそのものが卒業後に活かしているという36件のコメント(全体の20.5%)に割り振られた。以下のように、何かの活動の経験が役立っているというコメントが見受けられた。

「何よりも学んだことは4年間たった一つのことにも情熱・時間を全て注いだ経験。これからの私の人生を通じて間違いなく唯一であるこの経験が私という人間の根幹を形成しているだけでなく、仕事や私事も含めて人生に起きた問題を解決していくための原動力となっています。」(経済学科)

「学習塾では2020年度から必修となるプログラミング、夏休みには自由研究で理科実験を行うため、大学(物理学科)での学習や実験の経験が生かされている。」(物理学科)

「現在は読書にかかわる仕事をしているため、多くの論文や古典を読み込んだ経験がいかせていると思います。」(日本語日本文学科)

その他

その他のコメントとしては、以下のような大学の社会的認知度や環境に関する意見が見受けられた。

「学習院での学びは全く役に立っていないが、学習院出身というブランドイメージで得をすることは多いし、誇りに思っている卒業生は多い。そのため、どうか学生選抜は今後も慎重に行い、大学の品格を落とさないで欲しい。また、キャリア支援が他大学と比較してとても弱いと感じる。」(法学科)

4. まとめ

4-1. 自由記述回答のまとめ

以上、各コードについて具体的な回答を見ながら、学習院大学での学びや経験が卒業後、どのように活用されているかを見てきた。概要としては以下のように集約できるだろう。

- ・専門の知識そのものが卒業後のキャリアに役立つかどうかは就いた職業によるものの、学びの過程において身についた理解・思考力や、態度・姿勢は全般的に役立っているという回答が見受けられた。
- ・理解・思考力は特に論理的思考力や批判的思考力を指し、ゼミにおける活動やレポート作成などから身についたと感じている。
- ・態度・姿勢は自発的に学んだり挑戦したりする姿勢や、自らに余裕を持たせる意識などであり、大学生活における課題解決や取り組みの経験からその価値を実感し、身につけた様子が見えがえる。
- ・対人関係スキルはゼミや課外活動において身についたと感じられており、一部には学科の授業で学んだ理論を対人関係で実践していた卒業生も見受けられた。
- ・語学については仕事で活用しているというコメントのみであった。
- ・ゼミや課外活動の他、大学生活の中で培われた人間関係は、卒業後にも価値が見出されていた。
- ・大学生活の中で、ひとつの物事に多くの時間やエネルギーを注いだ経験や、ある物事に量をこなし習熟した経験は、卒業後に活かされているというコメントが見受けられた。

4-2. 自由記述回答からみた学びの場としての学習院大学

前節までは、大学時代に学んだ内容と卒業後の活用のされ方について検討してきたが、ここでは自由記述回答の分析を通じて浮かび上がってきた本学の特徴と思われる点をまとめたい。

まず、本学の雰囲気について「おおらか」「ゆとりある」といったコメントが共通に見られた。これらの「おおらかさやゆとりのある雰囲気」は、「人を押し退けたり、いわゆる『マウンティング』のようなことをしない」「大学では、目標や考え方が似た人、全く違う人、多くの人に出会いました」といった形で実感されているようである。大学時代にこういった環境に身を置いたことが、人と関わる場面でのおおらかさや、対人スキルとしての余裕を身につけることにつながったというコメントが見受けられた。本学のワンキャンパスにおける学生生活では、課外活動を含めて多様な他者（学部を問わない友人、先輩や後輩、教員など）とのつながりを作る機会が常に身近にあると考えられ、これらの関係性の中で多くの学びがあったことがうかがえる。

授業科目で学んだ専門知識等に関しては、その知識が卒業後に活かされるかは進路による部分が大きいと言えるが、直接的にはなくとも教養として人間の幅を広げることで他者とのコミュニケーションに役立っているという側面もあった。

これに対して、授業を通じて養われた論理的思考力・批判的思考力などの能力面に言及すると、役に立っていないというコメントはなく、全てが活用できているとする内容であった。また、学習の過程で、多くのレポートに取り組んだり卒業論文のために調査や分析を重ねたりした経験は、卒業後の実務において役立っているというコメントが見受けられた。文章表現力や情報収集力、さらには課題作成のためのIT関連スキルについても、課題等にしっかり取り組むことで訓練され、卒業後に生きる能力となっていることがうかがえる。こういった将来的な意義までを見通して学ぶことで、卒業後も大学での学修成果を実感しやすい可能性が考えられる。

その他、自発的なチャレンジや粘り強い課題解決、ひとつの物事に打ち込む、といった時間を持てたことによって、大学時代が価値あるものとなったというコメントも見受けられた。ゼミや課外活動等における具体的な活動に言及したコメントも、自分なりの目標意識や情熱を持った取り組みがうかがえた。これらのことから、大学時代の活動が卒業後にも役立つ学びとして実感されるためには、漫然と、あるいは受動的に活動するのではなく、自発的な挑戦や追求の態度・姿勢が必要であるのかもしれない。

総合すると、自由記述回答のうち肯定的コメントからみる学習院大学の学びの場としての特長は、学生一人一人の挑戦や追求を受け止める懐として、おおらかでゆとりのある雰囲気を持つところである可能性が考えられるだろう。

■自由記述回答内容の整理手順

卒業生が回答したコメントの整理を行うにあたって、KH Coder (version : 3.alpha.13L, 2018) の機能 (形態素解析とコーディング機能) を用いた。KH Coder は「テキスト型 (文章型) データを統計的に分析するためのフリーソフトウェア」であり、抽出する特定の語を設定できることや、回答の内容をコーディングする際に網羅できることと、フリーソフトウェアであり費用の面で有用であることを理由として利用した。しかし、KH Coder は文中に含まれる「語」についての解析ソフトウェアであるため、その語が肯定的あるいは否定的に用いられているかなどの意味は判別できない。このことから、KH Coder の機能を用いつつ、分析者による確認と再コーディング、意味の判別を行うことで、整理の目的を達成できるようにした。具体的な手順は以下の通りである。

【コーディングの手順】

- ① KH Coder を用いて、形態素解析を行い、単語を網羅的に抽出する。
- ② 単語と内容を検討しながらコーディング・ルールを検討する。
- ③ KH Coder によるコーディングを実施する。
- ④ KH Coder によるコーディングの結果を、分析者が確認し、必要な場合に再コーディングを行う。同時に、そのコードについて、ポジティブ (活用できている)・ネガティブ (活用できていない)・その他 (〇〇を学べるようにしたほうがよいという大学への提案など) に意味の判別を行う。(最終コーディングの決定)
- ⑤ コーディングの差異を見ながら、コーディング・ルールを再検討する。
- ⑥ 再検討したコーディング・ルールでコーディングを実施する。
- ⑦ コーディング・ルールと最終的なコーディングの差異率の検討。

本年度は、昨年度に作成したコーディング・ルールをもとに②を行い、この際に「IT・データサイエンス」コードを追加した。

④において、KH Coder による網羅的なコーディング結果から、分析者による再コーディングを行ったのは、単語が含まれていても目的と合致しない使用の仕方である回答や、関連する単語を含まないがいずれかのコーディングと同様の内容に言及していると判断された回答があったためである。結果として、KH Coder によるコーディングから変更のなかったものの割合をコード採用率として計算したところ、全体の採用率は 90.0%であった (付録表 2)。再コーディングを行った後、その他を含むコードが何も振られなかった回答は 2 件であった。コードの種類別にコード採用率を見ると、最低が「経験」の 80.7%であり、最高は「語学」の 97.4%であった。

また、この再コーディングと同時に、ポジティブな内容、ネガティブな内容、あるいはその他の内容、のいずれに該当するか、分析者の判断により分類を行った。これは、質問項目は「どのような形で活かされていますか」であるが、実際の回答には、「〇〇はあまり活かされていない」といったものや、「〇〇を学べるカリキュラムにしてほしい」といったものなどが含まれており、これらの判別が必要であったためである。

また、このコーディングでは、一つの回答に複数のコードが振られる (一つの回答が複数のコードに該当する単語を同時に含む) 場合が多数存在するが、その意味の判断はコードごとに行った。

なお、⑤～⑦は、次年度以降の自由記述回答の整理に用いることを意図して、コーディング・ルールの妥当性を高めることを目的とした振り返りの作業である。

今回は、KH Coder による解析やコーディング後の意味内容の判断を行ったのは1名の分析者によるものである。本報告書に含まれる回答内容とコーディングや意味については、複数の人間による確認と合意を経ているが、すべての回答やコーディングについて複数人の確認を行うことには使用できるリソースの関係上限界がある。したがって、本報告の結果の信頼性や妥当性についても限界があるが、次年度以降も課題として、整理の方法の検討を進めていく予定である。

付録表1 頻出単語上位150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	14	後輩	3	繋がる	2
大学	14	考える	3	見る	2
経験	13	考え方	3	戸惑う	2
仕事	13	行う	3	構築	2
学習	12	作る	3	行動	2
学ぶ	10	持つ	3	講義	2
感じる	10	自身	3	今後	2
自分	10	就職	3	仕組み	2
社会	10	出る	3	司	2
身	10	出身	3	思考	2
人	10	出来る	3	支援	2
知識	10	情報	3	支店	2
役立つ	10	政治	3	時代	2
現在	9	生かす	3	質問	2
関係	7	生きる	3	実験	2
活かす	6	先生	3	社外	2
資格	6	多く	3	塾	2
授業	6	伝える	3	書く	2
人生	6	日	3	少ない	2
多い	6	部活動	3	場	2
勉強	6	福祉	3	情勢	2
今	5	文科	3	触れる	2
施設	5	文章	3	積極	2
児童	5	方法	3	専門	2
取得	5	アルバイト	2	全く	2
人間	5	コミュニケーション	2	全体	2
卒業	5	サポート	2	組織	2
大いに	5	ステーション	2	対応	2
役に立つ	5	セミナー	2	大切	2
お客様	4	プログラミング	2	仲間	2
ゼミ	4	メール	2	直接	2
解決	4	レポート	2	通信	2
海外	4	意欲	2	程	2
学科	4	印象	2	統計	2
活きる	4	営業	2	特に	2
試験	4	演習	2	内定	2
生活	4	課題	2	日々	2
他者	4	会社	2	年	2
得る	4	学び	2	年間	2
能力	4	学問	2	納得	2
分析	4	勤める	2	非常	2
目指す	4	関わり	2	必修	2
力	4	関わり方	2	必要	2
おおらか	3	含める	2	付ける	2
英語	3	企業	2	物事	2
科目	3	基礎	2	物理	2
活動	3	機会	2	雰囲気	2
気	3	起きる	2	文書	2
教養	3	教わる	2	変化	2
業務	3	興味	2	簿記	2

付録表2 KH Coder によるコード採用率

コード名	知識	理解・思考力	態度・姿勢	対人関係スキル	語学	IT・データサイエンス	資格	人間関係	経験	全体
変更のなかった回答	32	36	32	36	38	36	36	37	33	316
全体の回答数	39									351(※)
コード採用率	82.1%	92.3%	82.1%	92.3%	97.4%	92.3%	92.3%	94.9%	84.6%	90.0%

※コード（その他を除く）の種類9つと回答数39件をかけた351を全体の一致率計算に用いた。